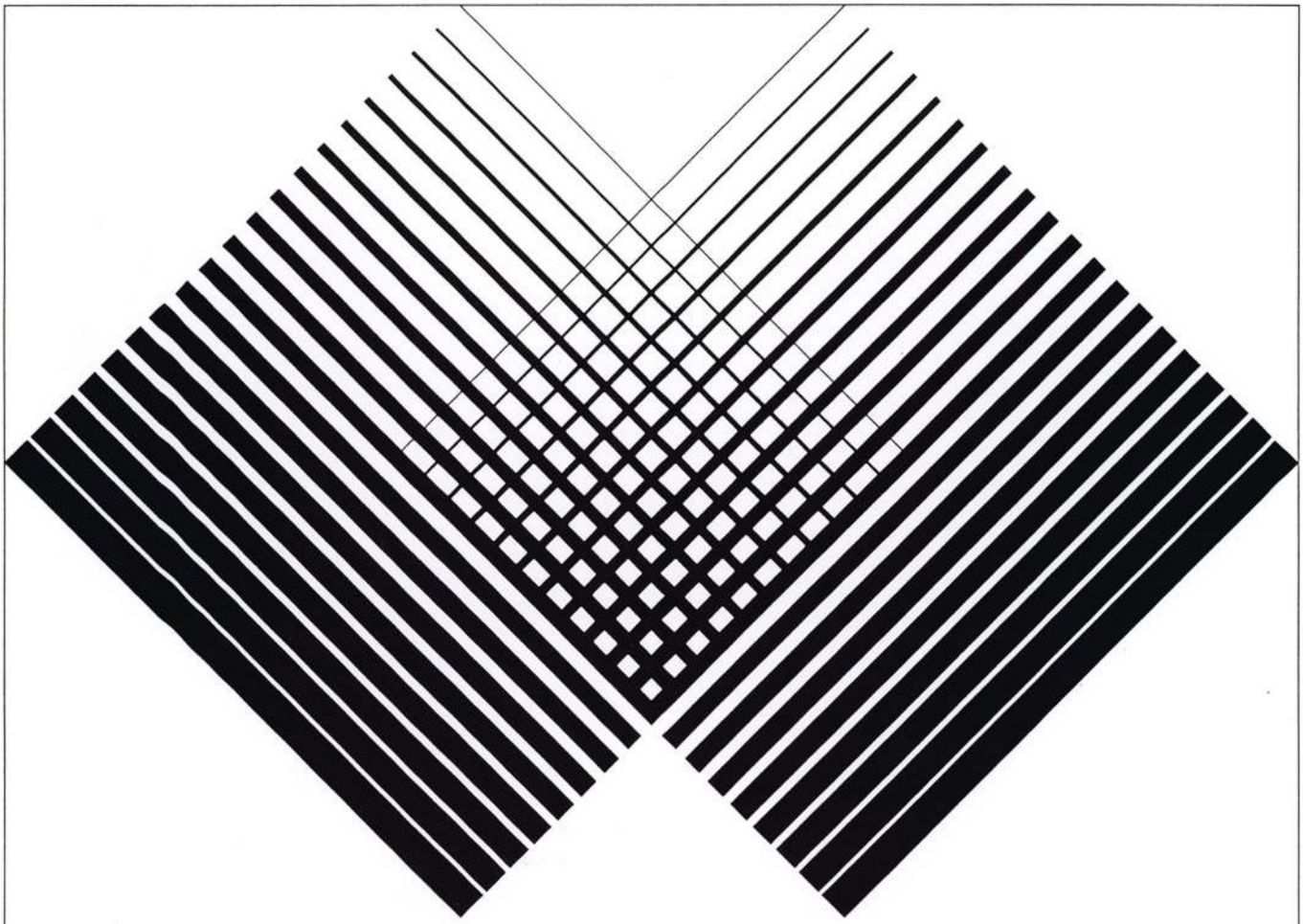


建築と社会 Architecture and Society

特集
東海支部会員作品2004
愛・地球博〜2005年日本国際博覧会のめざすもの〜

日本建築協会

03
2004



FUJITA

自然と街と人の美しい調和を追い求めるフジタには、先端技術とエンジニアリングを活かした豊富な建設の実績があります。さらに都市再開発、リニューアル、環境創造、情報通信などの分野に取り組み、付加価値の高い企業活動を通じて、より豊かな社会を創ります。

"高"環境づくり フジタ

http://www.fujita.co.jp 151-8570 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-25-2 Tel(03)3402-1911

日本建築協会

会告

平成15年度 第2回通常総会開催

平成15年度第２回通常総会を下記のとおり開催いたしますので、ご出席頂きますようお願いします。

記

と　き　平成16年3月24日（水）
午後4時から4時40分

ところ　社団法人 日本建築協会 大会議室
大阪市北区梅田1-1-3-2100

議　案　・第1号議案
平成16年度事業計画（案）の件
・第2号議案
平成16年度収支予算（案）の件

なお、開催通知は個人正会員、団体正会員あて別途送付しております。ご欠席の場合は『返信用ハガキ』にて必ず委任状の送付をお願いします。

お問い合わせ先：（社）日本建築協会総務課
電話06-6348-0635

常設委員会のサポーターに就任し活躍されませんか

（再掲）

日本建築協会では、現在活動している各常設委員会の活動をより活性化するため、広く会員の中からサポーターの希望者を募ります。
会員の皆様の応募をお待ちしております。

サポーターの業務
あらかじめ登録して頂き、見学会等の事前準備、随行等必要に応じ、委員、事務局職員とともに委員会活動に従事して頂きます。（主として事務局内での業務です）

●応募要領
★応募資格
日本建築協会の個人正会員または団体正会員に所属しておられる方
★人数
若干名（各委員会とも）
★応募の記入項目
①住所
②氏名（フリガナ）
③生年月日
④性別
⑤勤務先
⑥所属団体正会員名（個人正会員は記入不要）
⑦希望委員会名(第２希望まで記入可)
⑧連絡先等（Tel・Fax・Eメール）
⑨希望がある場合はその内容
★応募の締切
平成16年３月31日（水）
★応募方法
応募記入項目①～⑨までをハガキまたはFax、Eメールにて下記まで送付願います。
（社）日本建築協会　〒530-0001
大阪市北区梅田1丁目1-3-2100
Fax：06-6348-0634
Eメール：kyoukai@aaj.or.jp
協会ホームページ(http://www.aaj.or.jp)のトップページのお問い合わせメールから送信できます。
●任期
２年（平成16年４月１日～平成18年３月31日）
●報酬
なし（ボランティア活動としてお願いしております。ただし交通費実費のみ支給）
●常設委員会の主な活動内容
（　）はH16.1.1現在の委員数
★編集委員会（104人）
会誌「建築と社会」の企画・編集・発行
★事業委員会（49人）
見学会、講演会の開催、若い会員の集いの開催
★教育委員会（25人）
建築教育の調査・研究、建築工事実務講習会の開催、工高生デザインコンクールの実施
★出版委員会（20人）
建築に関する図書の企画・編集・刊行、講座の開講
★建材委員会（14人）
建築材料の検討・新建材の紹介
●その他
＊会議の回数及び時間等については、会誌「建築と社会」各号協会月間の動き及び協会ホームページの委員会の動きを参照
●お問い合せ先
（社）日本建築協会
Tel：06-6348-0635
Eメール：kyoukai@aaj.or.jp

日本建築協会会員有志の集い 建築クラブ朝食会ご案内

●第378回
と　き:平成16年3月9日（水）8:30～
ところ:大阪全日空ホテル4F平安の間
講　師:上村　洋行氏
〈司馬遼太郎記念館館長〉
演　題:司馬遼太郎について
●第379回
と　き:平成16年4月13日（火）8:00～
ところ:大阪全日空ホテル4F平安の間
講　師:北田　博昭氏
〈(財)関西空港調査会常務理事〉
演　題:関西空港問題について
●第380回
と　き:平成16年5月11日（火）8:00～
ところ:大阪全日空ホテル4F平安の間
講　師:奥田　精一郎氏
〈イトマンスイミングスクール代表取締役名誉会長〉
演　題:アテネオリンピックにむけて
＊
建築クラブ朝食会は日本建築協会会員有志によって運営され、毎月第2火曜日早朝に、朝食をとりながら各界著名人のお話を聞いています。
朝食会では、建築クラブ会員に限らず、広く一般ビジターのご参加をお待ちしております。
ビジター料金　4,500円
●問い合わせ先　（社）日本建築協会
Tel:06-6348-0635
mail:soum@aaj.or.jp

講演記録集「話のはなし」残部頒布します!

昭和47年6月に発足した「建築クラブ」（日本建築協会会員有志の集まり）は1997年、朝食会の第300回を記念して、講演速記録を集約し、最終的に118回分を5冊1セット（1冊平均約320ページ）の本にして発行いたしました。
「話のはなし」の講話の内容はとても多彩で、「おもしろい話」「貴重なはなし」「裏ばなし」などがいっぱい詰まっています。
1セット・5,000円（消費税別途）でおわけします。ご希望のかたは電話またはFAXでお申し込み下さい。
申込先：日本建築協会事務局
TEL.06-6348-0635　FAX.06-6348-0634
e-mail：soumu@aaj.or.jp

「建築と社会」誌

特集一覧●1982~2003

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6348-0635、FAX 06-6348-0634）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1982 vol.63	●新たな商業空間の展開＊	●省エネルギーと開口部＊	●医療施設―地域医療と設備計画＊	●近畿の地盤と地質＊	●都市景観―まちなみ美観への誘い＊	●大阪市庁舎（第1期）＊	●ホール建築と音＊	●大スパン構造＊	●昭和設計作品集＊	●絵本にみるすまいとまちづくり ●オー・エム・ホテル日航ビル	●第29回青年技術者 ●地方の庁舎建築＊	●風土・空気と人間＊
1983 vol.64	●関西の建築文化を考える	●マイコンの建築への利用	●多様化する運動施設＊	●建築と品質管理	●計画におけるコミュニケーションとプレゼンテーション	●大阪駅とターミナルビル	●維持管理と設備更新	●東海の将来と文化を考える	●オフィス・インテリアの変革	●プレストレスト・鉄筋・コンクリート構造	●第30回青年技術者 ●大阪城国際文化スポーツホール＊	●集合住宅と生活音
1984 vol.65	●21世紀への関西―魅力あるまちづくりを問う	●関西の超高層ビル＊	●ビルのリフレッシュー内外装補修技術の現状と景観―＊	●建設産業とロボット開発＊	●住環境と法制度	●まちの活性化と商業空間 ●京都駅南口再開発ビル＊	●消防設備のポイント	●みどりとそれをとりまく人々＊	●高齢化社会と生活空間	●床の構工法	●第31回青年技術者 ●ディテールの思想	●光応用システムと建築
1985 vol.66	●大阪湾物語＊	●東海の現在と近未来	●自由様式への道―建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	●情報化をめぐる建築・都市事情	●ホール―それが生みだす文化―	●建物の表情―最近の外壁材料	●大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	●都市と健康・スポーツ	●接合―人体と建築にみる― ●日建設計作品＊	●村野藤吾の一断章 ●伊勢湾をめぐる東海	●第32回青年技術者
1986 vol.67	●これからの住空間―都市型集合住宅にみる	●屋根―そのデザインと素材	●現代デザイン―ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築・設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住宅と設備	●開発―その創造的仕掛けの鍵をもとめて― ●ツイン21	●CAD―その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 vol.68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚の街づくり＊	●建物と町並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 vol.69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統―東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明＊	●制振＊	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営善	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 vol.70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備I	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備II ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館＊	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識―中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化―設計の多様化をめざして―＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営緒の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感―建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	●新しい都市空間づくり―I―	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくり―II― ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識―複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木―構造技術の世界― ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語―人がかわる、まちがかわる―	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン―東海支部―＊	●建築家のための設備知識―集合高層住宅の設備システム―	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り―住宅・都市整備公団関西支社10周年―	●木構造を使ってみませんか―集成材による構造―＊	●接着―建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」＊	●屋台―仮設の魅力に学ぶ― ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第38回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営緒	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境―限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生―構造技術の役割― ●大阪市営緒	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境―人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと贄	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって―会員作品＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美―建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界＊	●音―騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃―まちの活性化と地方文化＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法―会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江―その地方振興と文化＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり＊	●東海支部会員作品 ●金沢・能登―風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念/建築と私と社会―80人の眼―＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興―法・制度の運用と新たな展開へ― ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA＊	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法―会員作品―	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州―諏訪とその周辺―	●街並みの演出―最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備―ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98―21世紀に向けて	●ゆれをとめる―たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ”のデザイン ●建築を綾どる小粋なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃―街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法―まちづくり・すまいづくりへの展開―	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア―都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年	●中国支部―しまなみ海道と中国地方の街づくり―	●東海支部会員作品2000 ●福井・富山―地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る―測定方法と測定結果が意味するもの―	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法―パートII―	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ―わざ、もの、こころ―	●時間	●私の空間作法―会員作品― ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者
2001 vol.82	●エヌ・ティ・ティファシリティーズ	●21世紀の建築設計教育	●東海支部会員作品 ●岐阜・大垣	●IT社会におけるきずな	●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	●成熟社会をささえるまちづくり	●現代の日本の空間・文化を探る	●環境―近未来に向けて今できること― ●大建設計―作品特集1996~2001―	●建築の力 都市の力	●緊張 ●都市基盤整備公団関西支社	●私の空間作法―会員作品―	●第48回青年技術者 ●NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館＊
2002 vol.83	●国土交通省近畿地方整備局営繕部＊	●再生・リサイクル	●東海支部会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安全・安心―パート2―	●塗装のいろいろ	●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	●いま、インテリアデザインは ●漆町リバープレイス	●建築をささえるセンター	●建築とボランティア	●時を超えて―サステナブルエンジニアリングの現在―	●私の空間作法―会員作品―	●第49回青年技術者 ●大阪市中央公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所創立70周年	●九州の地域づくり・まちづくり	●東海支部会員作品2003 ●愛知・名古屋―この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える―	●サスティナビリティ―次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン―	●建築と五感	●都市計画法及び建築基準法等の改正	●コンバージョン―インテリアから発信するまちなみ―	●介護と建築・設備	●建築とノスタルジー―建築の主観的価値について―	●力と楽しくつき合う方法	●私の空間作法―会員作品―	●第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年

＊は欠号

建築と社会 03 2004
Architecture and Society
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

1917年創刊　第85集／通巻984号

今月の表紙

企画／高野直樹
企画と写真／伊藤　彰
表紙デザイン／窓田衣里

●最近、撮影以外で仕事に出かけるときは、電車を利用している。交通事情など気にすることなく、時間を有意義に使うためである。移動手段を変えることで、素通りしていた場所から新しい何かが見つかると思う。
大阪・ナンバのOCATで見かけて思わずシャッターを切った彫刻は、関根伸夫氏の作品。
（伊藤　彰）

■特集予告
4月号／省リスクな『まち再生』
5月号／リニューアルの技
6月号／地域住民主体のまちづくりと支援制度

編集委員会（平成15年度）

■副会長
井上　豊
中井　進
■編集担当理事
上原　正行
岡田　聿之
佐藤友美子
◎設楽　貞樹
竹中　統一
畠山　祐治
広原　盛明
堀田　修二
松村　慶三
■特集小委員会
□計画分科会
★計画系
伊縫　憲幸
※鈴木　克彦
田中　直人
紅谷　昇平
細田　浩史
松田奈緒子
辻　武之
三宅　次郎
森　康郎
吉村　英祐
★建築計画系
荒木　宏之
江副　敏史
菅野　忠司
木多　彩子
楠　敦士
小林　優子
桜井　則雄
笹村　欽也
静　茂夫
所　千夏
※野田　隆史
三村　和生
★インテリア・住宅系
阿部　泰浩
加藤　力
黒柳　亮
田中　浩介
※高野　直樹
戸井賢一郎
西田　和子
ペリー史子
本山　仁
□構造分科会
稲田　竜也
大氏　正嗣
大住　和正
尾上　清治
木下　隆嗣
白髪　誠一
住田　隆二
田中　剛
※田渕　勝道
松村　和夫
向井　洋一
山本　健二
吉川　真次

□設備分科会
※梶井　宏修
河井　康人
河津　隆之
近藤　国夫
近藤　正一
多賀　浩三
田ノ畑好幸
桝井　貴廣
松浦　肇
丸山　和夫
村上幸三郎
□施工材料分科会
植田　実
竹中　秀文
太刀川丈爾
野島　昭博
平田　茂良
※平野　剛
吉田　正友
□法令分科会
岡本　哲夫
坂中　信隆
田村　俊郎
※鶴田　和幸
溝上　省二
山根　正利
■作品作風小委員会
赤木　隆
石塚なぎさ
居内　章夫
井上　雅祐
池上　明
川上比奈子
△倉渕奈千子
寺岡　宏治
鞆野　淳司
中村　文紀
林　孝司
前川　治彦
増田　敬彦
山田　俊紀
■会員企画小委員会
稲木　裕子
大谷由紀子
河崎　敦子
清水　麗子
△髙岡　伸一
髙田　光雄
辰巳　清一
塚口　明洋
辻川ひとみ
福田　瑞穂
■広告企画小委員会
荒本　俊明
池田　孝夫
石塚　俊明
小山　昭
斉藤　治久
竹内　健介
古畑　健一
前田　衛
横田　和生
△渡邊　浩文

◎委員長　△副委員長　※幹事

印　刷　2004年2月25日
発　行　2004年3月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　話　06-6348-0635
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
日本データネット株式会社
定　価　1200円〔税込〕

CONTENTS

特集● 東海支部会員作品2004

［作品］
国立三重病院 10
美濃市立美濃病院 12
あいち小児保健医療総合センター 14
聖十字病院 16
特別養護老人ホーム 高坂苑 増築 18
瀬戸デジタルテレビ放送所 20
東海テレビ放送 新館 22
名古屋テレビ放送株式会社新社屋 24
トヨタインスティテュート 26
トヨタ車体 開発センター 28
Paramita museum 30
星が丘テラス 32
東部丘陵線車輌基地 34
楞厳寺増改築 36
セキスイハイム東海 ル・シェモア泉町 38
［東海スケッチブック］ 40

特集● 愛・地球博～2005年 日本国際博覧会のめざすもの～

［施設の計画とその意図］
愛・地球博メッセージ●2005年日本国際博覧会協会経営企画室 42
会場計画の概要●2005年日本国際博覧会協会会場整備グループ 43
政府出展事業の計画概要●小池雅行 47
愛知県施設の計画概要と設計意図●浦野設計／第一工房 49
名古屋市パビリオン●安田裕樹 51
魅力が満載　民間パビリオンゾーン●2005年日本国際博覧会協会出展グループ 53
新しい時代における市民参加へのチャレンジ●2005年日本国際博覧会協会市民参加促進グループ 56
［関連事業］
せと・まるっとミュージアム～愛・地球博を契機として～●瀬戸市企画部国際博覧会推進課 58
博覧会会場における公園事業と博覧会後の公園整備●川崎昭弘 60
海上の森の保全と活用●浦井　巧 61
磁気浮上式システム～リニモ（東部丘陵線）～●愛知県高速交通 62

会告
平成15年度第2回通常総会開催．常設委員会のサポーターに就任し活躍されませんか．
建築クラブ朝食会ご案内．講演記録集「話のはなし」残部頒布します！ 1

作品作風 小野薬品工業 フジヤマ寮 4

gallery House Nis●木内達夫＋吉永健一 6

建築の眼
住宅政策と福祉●檜谷美恵子
行政の技術者●荒木　敏
煉瓦造のなかまたち●太田隆信
ひと・まち・建築●江口　崇 8

法令コーナー 大阪府景観条例●平井秀樹 64

構造の頁 SMWの本設杭使用●金子　治 65

設備の頁 堺ガスビルの設備設計●岡　克己 66

研究最前線を追う 屋上緑化用水量と排水の水質●近畿大学社会環境工学科水工学研究室 68

information
漂着物考展．建築海外研修奨学生募集．京都六大学合同卒業設計展「六建ロールカーニバル」．「創っ展－TSUKUTTEN－」ATC関西学生卒業作品展Vol.9．大阪府公共建築設計コンクール表彰式・記念講演会開催．西日本トータルリビングショー．東京オペラシティアートギャラリー 69

月間の動き 平成16年1月分 70





作品

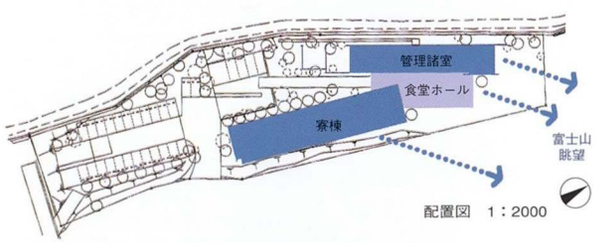
設計・監理■
大林組本店一級建築士事務所

施工■
大林組

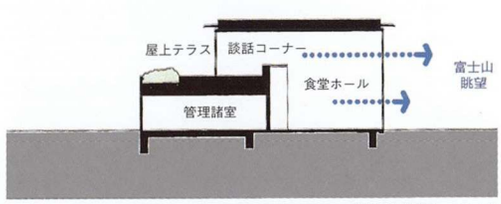
小野薬品工業 フジヤマ寮

富士山の南西約20kmに位置する小野薬品工業フジヤマ工場の敷地内に建つ独身寮である。
必要施設は、25室の寮室と食堂・厨房、談話コーナー、浴室および管理諸室等である。計画に当たっては、立地特性である富士山への眺望を最大限に確保することが要求された。
配置計画では、寮室と管理諸室を別棟とすることで諸機能のゾーニングを明解にし、その２棟を繋ぐガラスの箱の表現で食堂ホールを北端に設け、日常動線の核として位置付けると共に富士山への眺望を満喫できる開放的な空間づくりを心掛けた。２層吹抜の食堂ホールでは、２階部分に直接ホールから階段で行き来できる談話コーナーを設け、共用施設での立体的なコミュニケーションを誘発させる空間の仕掛けを盛り込んだ。また談話コーナーに面する屋上テラスにはデッキと庭園を設け、自然環境を取り入れた豊かな空間とした。
設備面では、屋上に太陽熱温水器を設ける他、吹抜部分での居住域空調など、様々な省エネ手法を採用している。

（神戸嘉也・井上雅祐／大林組）



配置図　1：2000



断面構成図　1：500

所 在 地 ―― 静岡県富士宮市北山字東下組5248-1
敷地面積 ――2,967.21㎡
建築面積 ――1,513.33㎡
延床面積 ――1,964.51㎡
構造規模 ――RC、一部S、２F
工　　期 ――2002年12月12日～2003年7月31日
最 寄 駅 ――JR身延線・富士宮駅
撮　　影 ――内山雅人（エスエス東京）









gallery

House Nis

設計
木内達夫+吉永健一



大きなキッチンと大きなバスルーム

壮年夫婦２人のための専用住宅である。施主からはパーティー仕様の大きなキッチン十ダイニング十リビング（リビングキッチン）と、大きなバスルーム、そして明るく開放的なスペースを要求された。リビングキッチンは２階に配置し、サブリビング、寝室３とともに巨大なワンルームとし、必要に応じて間仕切ることとした。バスルームは寝室１、寝室２、納戸とともに１階に配置し、テラス１へ視線が抜ける明るく開放的なスペースとした。1階テラス周りの植栽エリアは周辺地盤に合わせて１階床より１ｍほど上げ、1階における適度なプライバシーを保つ事を考慮した。

構造体の消去

２階キッチンエリア南面の柱径を最小とするため、このエリアの耐震要素を全て北面に集約した。北面に無骨な鉄骨部材が出現しないよう、柱やブレースは収納棚と兼用とした。耐震要素の北面への集中による剛性の偏在は、寝室３の収納背面に設けたブレースにより緩和している。半地下状態である１階部分は耐震壁付きＲＣラーメン構造とした。

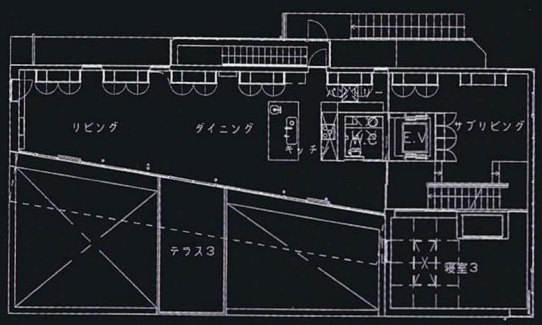


基本設計　木内達夫
実施設計　木内達夫+吉永健一
施　　工　（株）笠谷工務店

木内達夫
1966年　埼玉県生まれ
1993年　東京工業大学大学院修了
1994年～Arup Japan 勤務

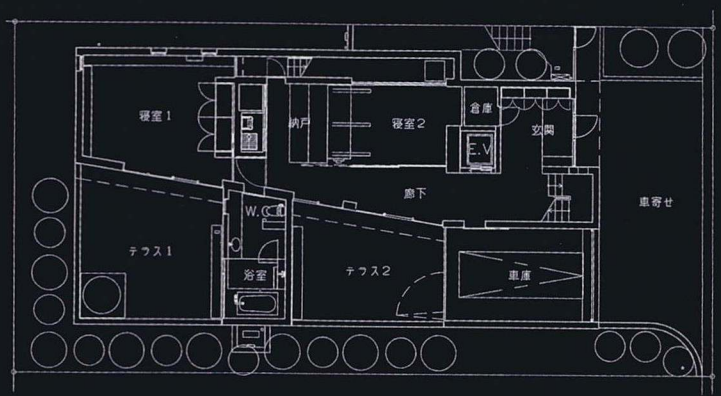
吉永健一
1967年　大阪府生まれ
1992年　東京工業大学大学院修了
1994年～長谷川逸子・建築計画工房勤務
1996年　シーラカンスK&H勤務
1997年　吉永建築デザインスタジオ開設

写　　真　木内達夫
企画編集　池上明（作品作風小委員会）



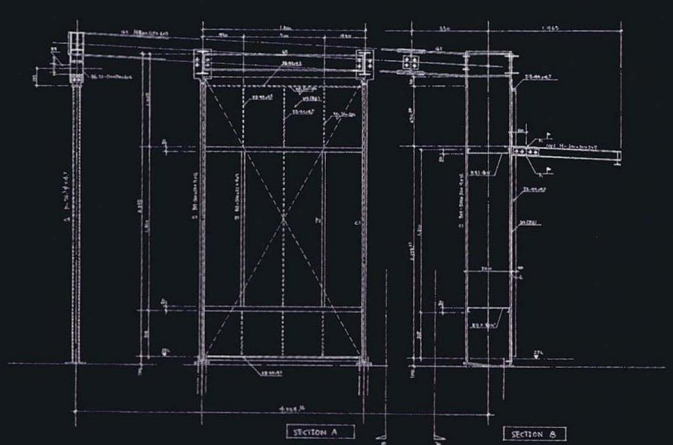
2階平面図　1：300





1階平面図　1：300





北面収納鉄骨詳細図



住宅政策と福祉

少子高齢化、人口減少、世帯構造の変容など、住宅行政を取り巻く社会状況が大きく変わりつつある。こうしたなか、住宅政策不要論も聞かれるが、福祉や雇用、経済、産業振興、環境政策などを包摂した、総合的な住宅政策への転換を目指すべきとの意見もある。

住まいや居住環境は、人々の生活の質を左右する重要な生活基盤であり、「住みやすさ」を追求する総合的な居住政策は、地域で惹起している様々な生活課題に、より効果的にこたえられるかもしれない。

特に注目されるのは福祉との連携である。現行の縦割り行政のなかでは、連携を実現するのは容易ではないし、また、「福祉の世話にはなりたくない」との意識に示されるように、福祉といえば自力で問題を解決することができない者を救済するための措置制度とのイメージから、住宅との接点はごくわずかと考える向きもないわけではない。しかし、こうした福祉観をあらため、誰もが安心して暮らしつづけられる社会の実現という福祉の原点に立ち戻れば、住宅政策との接点は無数にあり、様々な政策展開の可能性が拓かれる。

地域社会の構成員ひとり一人は、福祉サービスの受け手であると同時にその担い手でもある。公営住宅に収斂されない多様な住まいやまちづくりへの取り組みが、ひとり一人の生活の質を引き上げるのみならず、自助や共助を作動させ、公的扶助へのニーズを抑制することにも通じるであろうことは、もっと強調されてよいように思われる。

檜谷　美恵子　大阪市立大学大学院生活科学研究科助教授

行政の技術者

建築の技術職として行政に携わってから、早や30数年が経過した。最近でこそ、自分が技術者であるということをほとんど意識しないが、若い頃は、学んだ建築技術が行政においても求められており、それが生かされるものとして、公務技術はどうあるべきかと考えたものである。そもそも、行政は法律を基盤としているから、その中で技術として求められるのは、法務技術であり、建築基準法等の関係法令を駆使して、建築活動に対して法の枠内で規制・誘導・運用することが必要とされた。その根底は、専門的な知識や技術で裏打ちされていた。

その後、社会状況は目まぐるしく変動し、住民要求も多様化し、行政に求められる技術者像も変化してきた。研究においては、専門領域に限らず、他の領域との共同研究や学際的研究といった方向へ向かっているのと同様に、行政においても、建築分野に限らず、環境、福祉といった他分野との連携が必要とされ、技術者の役割も、法務技術から各分野を総合化する技術へと変わってきている。

見方によっては、確認行政の民営化や公共事業の縮小等によって、行政における従来の建築技術職の必要性は薄らいできているが、これからの行政施策を展望する上では、関連分野との整合を図りながら、コーディネイトする技術が求められる。このことは、技術者像というものを見えにくくしているが、行政に籍を置く者として、今後の方向性を指し示すべく努めていきたい。

荒木　敏　京都府土木建築部住宅課長

建築の眼

煉瓦造のなかまたち

ユーラシア大陸では最もポピュラーな建材、煉瓦も、日本では明治維新前夜に欧米より渡来の新建材。関東大震災までは近代建築建設の一翼を担ってきました。現在もかなりの数の煉瓦近代建築が、全国各地、いや、海を越えて旧植民地にも残存しています。

それらの煉瓦造近代建築のなかで、お弟子さんの作品も含めて、いわゆる辰野式と称される建築群を思い浮かべてみて、そのなかからベストスリーを選ぶとなると、侃侃諤諤これはむつかしい。そう簡単にはまとまりそうもありませぬが、ビックスリーとなると、これは分かりやすい。東京駅、旧台湾総督府、旧台北帝大附属医院、この３作で異存ありますまい。そのうちの２作品が当時の外地の建物、それも台湾に建っているということを重く受けとめたい。

明治以後1945年の敗戦まで、我が国には外地と呼ばれる植民地があった。そこでも内地同様の、いや、場合によっては、内地以上の近代化が推し進められていました。この部分、この歴史を落としては近代日本の姿がきちんと見えてきません。植民地の文学、植民地の建築ではなく、それらを包含してトータルに論じる、これは辛いところもあれば、しんどい面もあります。しかし、勇断をもってこの事実に直面せずして、日本の近代を論じることができようか。昭和ひと桁ならではの熱い思いもあります。

太田　隆信　（株）坂倉建築研究所代表取締役

ひと・まち・建築

ヨーロッパの歴史的な街並みや建築に接する度に、日本の街の未成熟度（未完成度というべきか？）を感じさせられます。もちろん、西欧の歴史的な街がすべて良い訳ではありませんが、「市民の眼」が行き届いた建築や街、昨今は変わったとはいっても「市の中心」としての広場（教会の）など、街づくりの骨格が厳然として確立されています。地中海沿岸の各地方に点在する、その土地の地形と整合した中世の都市群には、何度足を運んでも飽きることがないのは、私だけでしょうか。

また、特にイタリアの各地市は歴史的な由縁もあってか「おらが街」としての愛着と誇りも相変わらず強いようです。「スローフード」と称する食を中心とした回帰主義がベネト地方から始まったのもむべなるかなと思われます。古い街や建築に住むことがステータスともされているようです。

今後の日本の建築や街づくりも、これまでのような「手軽で経済的」なものから、「少し時間はかかるが、安全で、長続きするもの」へと路線を転換すべき時が来ていると思われます。この点、今後とも各方面から都市や建築への様々な論議がまき起こることを期待したいと思います。また、街づくりや建築に携わる者の一人として、「ひと・まち・建築」の融合を目指した「街づくり」に微力ながら参画をしたいと願っております。

江口　崇　（株）フジタ大阪支店企画営業部長

東海支部会員作品2004

国立三重病院

美濃市立美濃病院

あいち小児保健医療総合センター

聖十字病院

特別養護老人ホーム 高坂苑 増築

瀬戸デジタルテレビ放送所

東海テレビ放送 新館

名古屋テレビ放送株式会社新社屋

トヨタインスティテュート

トヨタ車体 開発センター

Paramita museum

星が丘テラス

東部丘陵線車輌基地

楞厳寺増改築

セキスイハイム東海 ル・シェモア泉町

本特集企画・日本建築協会東海支部特別編集委員会
委員長　松本壮一郎
特集記事担当副委員長　林　金之
作品作風担当副委員長　植田　明
デザイン広告担当副委員長　佐藤達雄
作品作風担当委員　和宇慶　朝武
デザイン広告担当委員　小宮三辰
委員　今津芳清　牛嶋教雄　尾崎武寛　北川貴啓　後藤利秋　佐藤達雄　篠原佳則　杉澤和男　鈴木慶智　仙田　篤
田村由紀　寺本英一　中村哲士　中村嘉男　野崎　勉　福田泰造　細田泰彦　松元親司　宮崎博民　水川善雄
武藤謙人　森田富士男　山本敦子　芳山明久（50音順）


国立三重病院
TAXI
国立三重病院






至 伊勢自動車道
芸濃インターチェンジ
至 津駅
椋谷池
駐車場
三重県立緑が丘
養護学校
グランド
多目的広場
芝広場
病棟
将来計画
新外来治療棟
今回工事
研修棟
林間トリム
コース
第3病棟
第2病棟
サービス棟
第5・6病棟
第7病棟
第1病棟
臨床研究棟
多目的棟
新池

国立三重病院



設計　厚生労働省東海北陸厚生局・株式会社日本設計
監理　厚生労働省東海北陸厚生局
施工　株式会社熊谷組名古屋支店

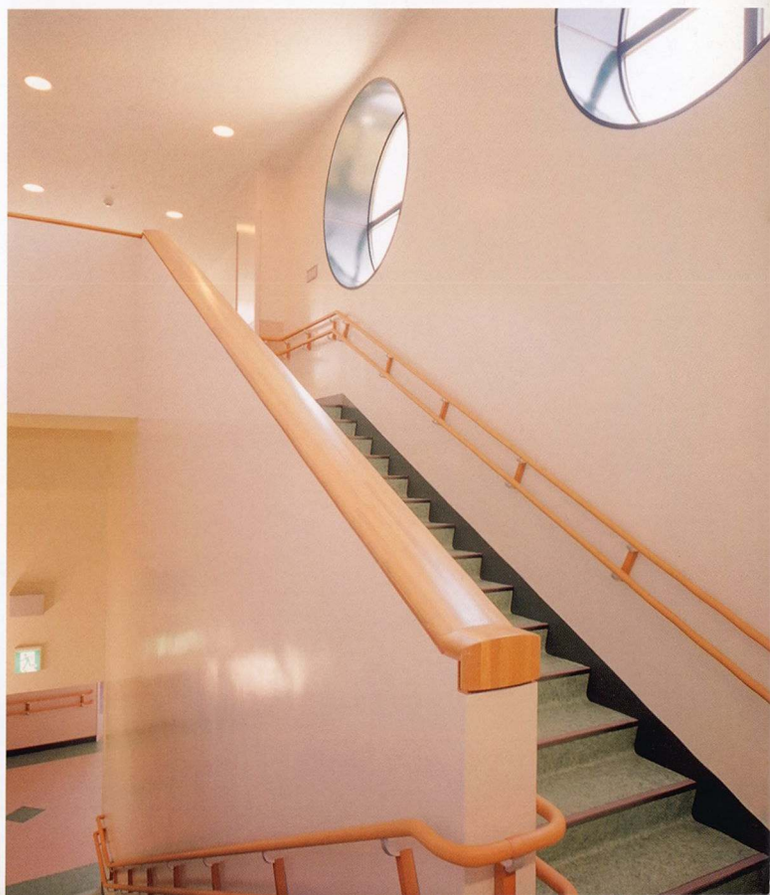
三重病院は、近鉄線津駅又はJR津駅より北西側約６kmに位置し、入院280床、外来200人、13診療科を標榜する病院である。
既存の外来管理治療棟の老朽化により、今回更新築する計画とした。
敷地内の配置計画としては、東側に大里バイパスが平成12年に完成し、三重病院へのアプローチがしやすくなったことから、既存、南側外来管理治療棟を廃止し、反対側の北側に新たな外来管理治療棟を計画した。
病院の中心的な建物が逆側に位置することで動線が全く逆になるが、今後の発展性を考え決定した。
平面計画としては①既存の病棟、サービス棟等からの動線。②今後計画される病棟からの接続。③敷地外部からのアプローチ。④小児救急外来によるアプローチ等を考慮し、患者にとってわかりやすく、また、職員にとって能率的な動線を念頭に置き、延べ面積を5,600㎡以内で平面計画を行った。
小児患者が全体の65%であることから全般的に小児を意識したデザインとし、特に小児の外来待合室は南側に配置し、プレイルームを兼ね広くとり、天井に星の模様の貼りもの、壁は動物画模様の貼りものとした。
また、建物は、直線と曲線を取り入れ単純にならないように計画を行った。
平成15年７月より「建物を使用し、小児患者、小児救急外来も増え、順調なスタートをきったと聞いており、今後建物がますます有益に使われることを期待している。」

（東海北陸厚生局）



所 在 地　三重県津市大里窪田町357
敷地面積　200,389.98㎡
建築面積　　3,608.69㎡
延床面積　　5,502.19㎡
構造規模　RC、2F、PH1
工　　期　2002年7月～2003年6月
最 寄 駅　JR、近鉄名古屋線津駅
撮　　影　エスエス名古屋







美濃市立美濃病院

設計監理　日建設計
施　　工　前田建設工業・野田建設・西村建設

所 在 地　岐阜県美濃市中央4-3
敷地面積　26,803.62㎡
建築面積　 5,066.69㎡
延床面積　10,507.18㎡
構造規模　RC、十4、P1
工　　期　2001年12月～2003年３月
最 寄 駅　長良川鉄道美濃駅
撮　　影　エスエス名古屋

美濃病院は、清流長良川に隣接し、緑豊かな山々と田園に囲まれる恵まれた療養環境の中に122床の市民病院として移転新築された。

１．おおらかな自然に溶け込む計画

敷地は、親水公園・リハビリ庭園など緑化に努め、緑豊かな病院つくりと、季節毎に木々が変化する癒しの環境つくりに配慮した。また、訪れる人々に圧迫感を感じさせないように建物を小さなボリュームに分け、美濃の古い町並みのイメージを継承した「黒い屋根」「白い壁」など、親しみを感じる外観とした。

２．明るく・分かりやすく・使いやすい計画

建物の構成は、南北と東西の２軸にゆとりある広い廊下とその交点に中庭を設け、各部門をこれらに沿って配置することで案内性の良い計画とした。
また、中庭など院内各所に大きなガラス窓を設け、建物の中に太陽光と自然の風を導き、「光」「風」を感じる空間つくりに配慮した。

３．「いえ」にいるようなくつろぎと安心感を生む計画

患者が安らかな気持ちになれるように、暖かく親しみのある木製の素材や暖色系の色彩のインテリア計画や、患者が気持ちに合わせてくつろぐ場所が選べるよう、各所にベンチのある眺めの良い「たまり」空間を配置した。
また、４床室は放射状のベッド配置、１床室は外壁側に便所配置するなど、廊下側からスタッフが見守りやすい計画とすること、スタッフステーションのオープンカウンターなど、患者とスタッフがコミュニケーションしやすく、見守られる安心感や信頼感をつくりやすい計画とした。

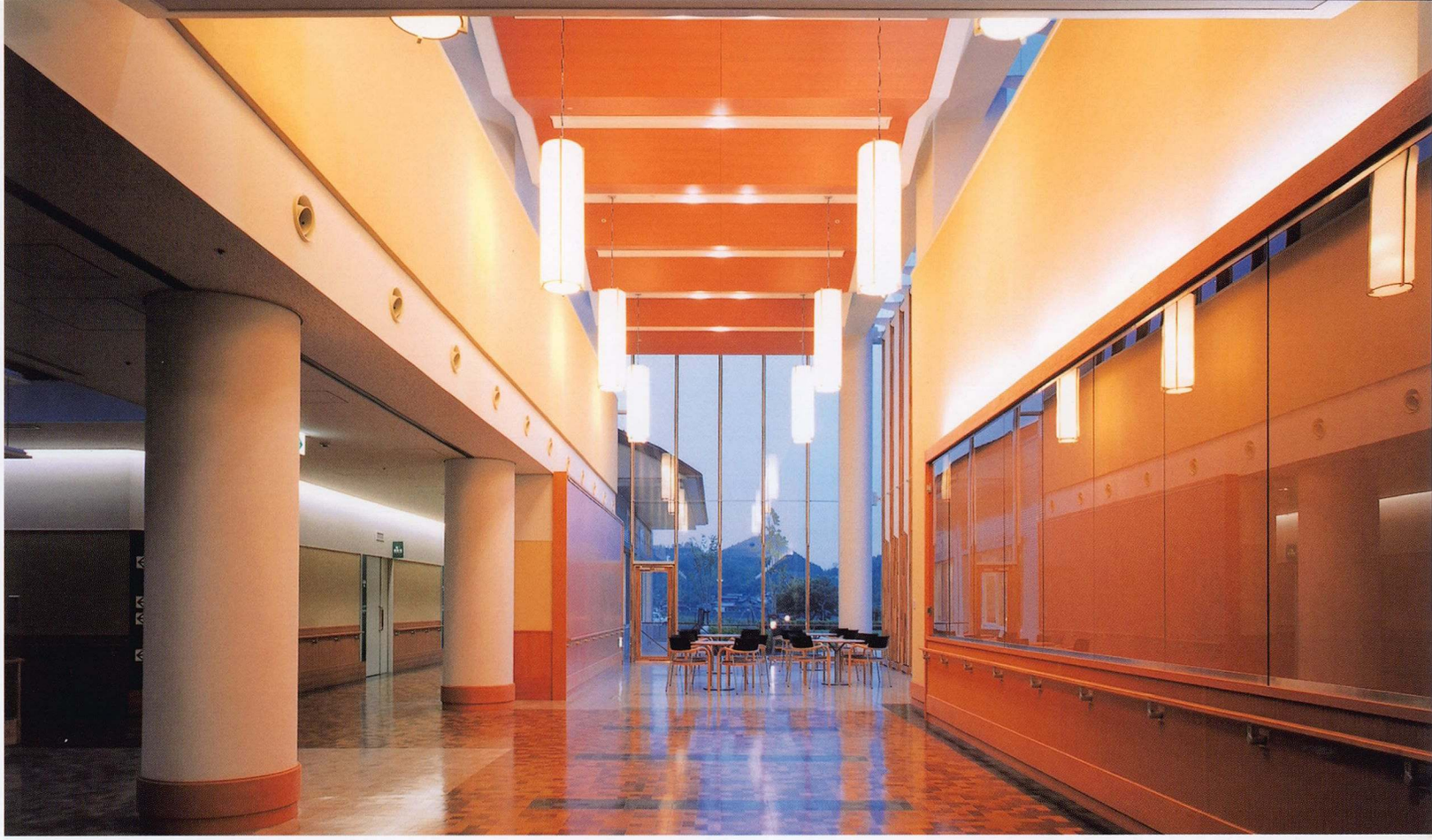
（浅野正芳・吉田敏一／日建設計）



周辺環境にとけ込む病院、病室の窓から暖かい灯がともる風景



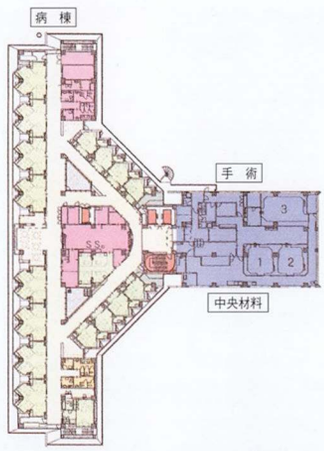
トップライトから自然光がふりそそぐ外来待合



大きなガラススクリーンにより、内部と外部の一体感を高めた、患者・家族のためのくつろぎスペース



1 階平面図



3 階平面図



配置図



放射状のベッド配置の個室的多床室



自然光を建物内に導く木製デッキの中庭







あいち小児保健医療総合センター

基本計画　環境デザイン・安井設計共同企業体
設計監理　愛知県建設部公共建築課、安井建築設計事務所
施　　工　建　築　佐藤・辻・七番特定建設工事共同企業体
（第1期）　電　気　きんでん・東海電工社特定建設工事共同企業体
　　管　　新日空・大建特定建設工事共同企業体
　　空　調　一工・大建工業特定建設工事共同企業体（2期とも）
　　受変電　株式会社東芝　中部支社（2期とも）
　　電　話　三友電子株式会社
　　昇降機　株式会社日立製作所　中部支社（2期とも）
　　環境整備　サカイ創建株式会社
　　屋外電気　村瀬電気株式会社
　　植　栽　株式会社榊原農園、株式会社深谷造園
施　　工　建　築　佐藤・七番特定建設工事共同企業体
（第2期）　電　気　株式会社きんでん　中部支社
　　管　　新日本空調株式会社　名古屋支店
　　環境整備　株式会社七番組
　　屋外電気　阿久比電工株式会社
　　植　栽　サングリーン株式会社

大府市と東浦町にまたがるあいち健康の森の一角に立地する。南東斜面地の雑木林の丘の上に「子どもやその家族がいきいきとして、地域や家庭に帰っていける」ことを目標にして計画された。200床の入院施設と22の診療科からなる医療部門と相談、教育研修、調査研究、情報収集・提供といった地域の母子保健を支援する保健部門が設置されている。

建物の中心にはエントランスから奥の池や雑木林に向かって「大通り」を設け、目的地へ行きやすくすると共に、子ども、家族、スタッフなどみんなが行き交い、出会える空間として計画している。部門を越え、施設という枠を越え「子どもの健康」という目的のために関係者が協力し、連携する姿勢を象徴した空間である。

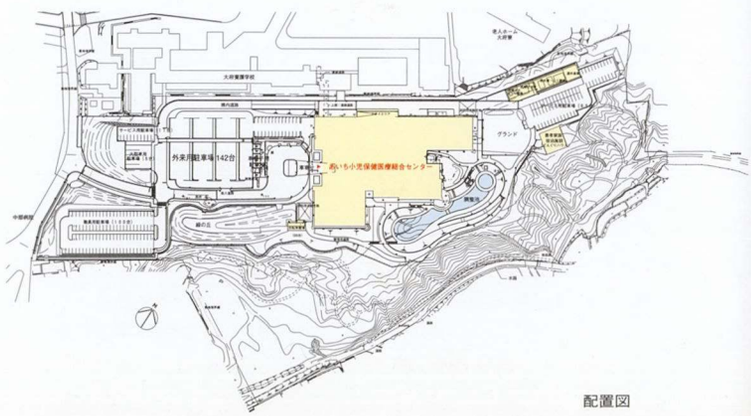
ベッドまわりは掲示板や縦型コンソールを設け、病院らしさを極力なくすようにした。病室は家として計画し、病棟入口にはストーリーのある立体的な絵を描いた。中庭のテラスとスタッフステーションを中心とした病棟平面とし、病棟内に子どもの生活に不可欠な要素である屋外空間と回遊できる空間をつくりあげた。

病気の時、子どもやその家族はただでさえ不安で一杯である。その不安を和らげる工夫を建物の至る所でしたつもりである。

（篠原佳則／安井建築設計事務所）

所 在 地　愛知県大府市森岡町
敷地面積　70,467㎡
建築面積　7,299.01㎡
延床面積　20,269.72㎡
構造規模　SRC、B1、3F、P2
工　　期　第1期　1999年12月～2002年3月
　　第2期　2001年12月～2003年3月
最 寄 駅　JR東海道本線大府駅
撮　　影　加藤敏明／アーキフォトKATO

協　力　遊び空間/東京工業大学:仙田　満
空間認知/豊橋技術科学大学:渡辺昭彦
病棟計画/名古屋大学:谷口　元
雑木林計画/岐阜大学:林　　進
療養環境/子どもの療養環境研究会、愛知学泉大学:高橋博久、愛知工業大学:曽田忠宏、名古屋市立大学:鈴木賢一
建物のストーリー/チャイルドライフ・スペシャリスト:藤井あけみ、名古屋市立大学:坂戸尚子、十條:井上雅章

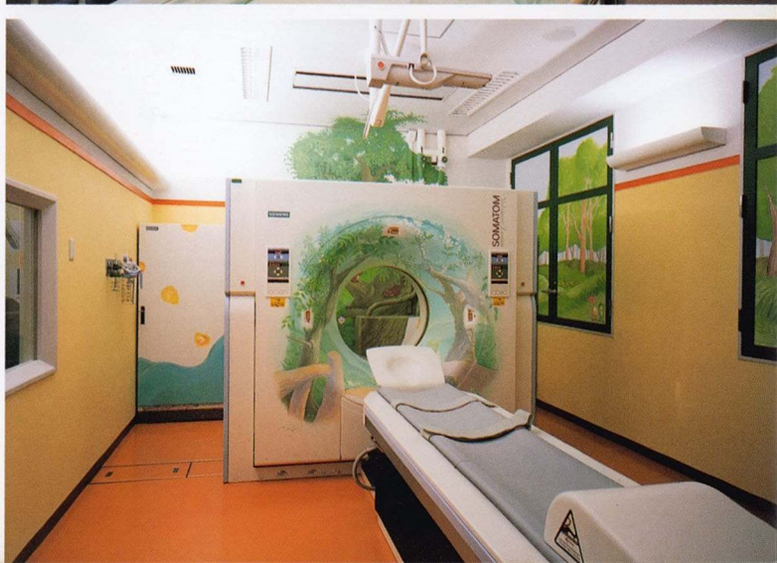


配置図









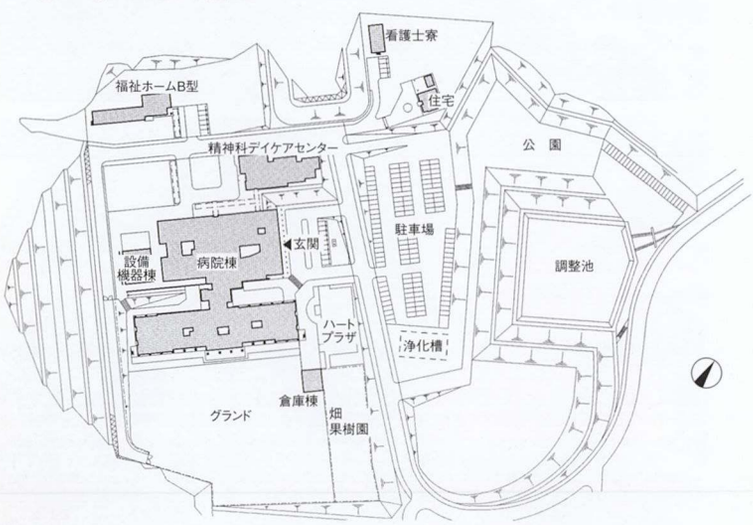


外観東面

聖十字病院

設計監理　伊藤建築設計事務所
施　　工　大林・岐建共同企業体

所 在 地　土岐市泉町久尻2431-160
敷地面積　53,510㎡
建築面積　5,295.29㎡
延床面積　12,567.31㎡
構造規模　RC、5F、一部S
工　　期　2002年９月～2003年９月
最 寄 駅　JR中央本線　土岐駅
撮　　影　エスエス名古屋



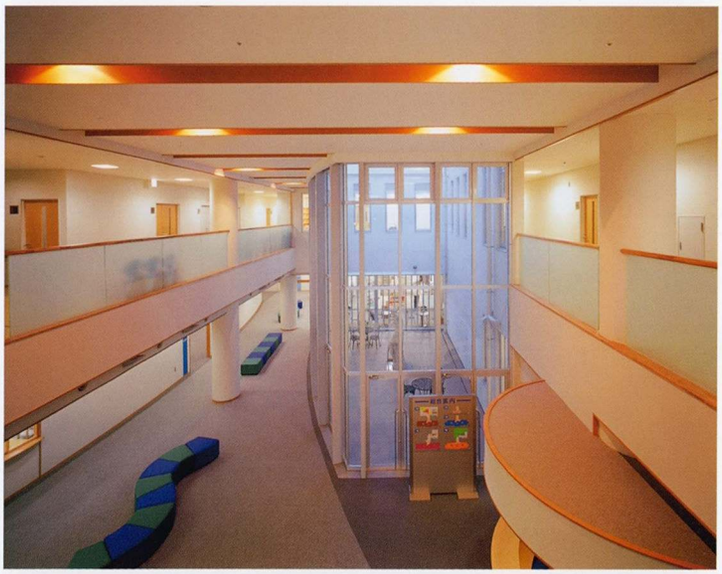
聖十字病院は東海環状自動車道の計画に伴い、291床の病院棟、50人規模の精神科デイケアセンター、20人定員の福祉ホームＢ型を主な施設として見晴らしの良い高台に移転しました。それぞれの建物は病院の理念である「シンパセイン：悩み、苦しみ、喜びを患者さんと共に感じる」をコンセプトに、自然採光・自然換気など、自然との調和を図る手法を効果的に採用し、病室は木質系仕上で統一し、窓には障子を設けるなど暖かみのある素材を使用し、癒しの環境づくりと家庭的な病院を目指しました。

病院棟内には多目的ホール「わいわい」、カフェテリア方式の食堂「もりもり亭」、図書室「ふれあい文庫」、また中庭に面した吹抜けの玄関ホール横にはコンビニエンスストアを設け、アメニティの向上を計りました。全てを新しくするのではなく旧病院のシンボルであった待合ロビーのフレスコ画や広場の石像、ブロンズ像や樹木（メタセコイヤ等）などを新病院に移設し、旧病院の面影を残すことで患者と職員が共に親しみを持てる新病院としました。

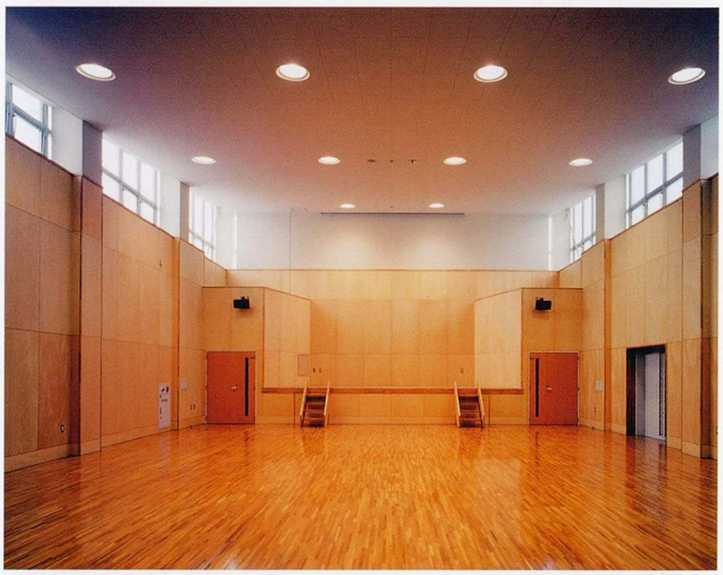
病棟は南側と北側、それぞれ異なったコンセプトを持たせました。南側病棟は医療法の基準の変化や病棟以外の用途への変更など将来的な構成の変化への対応性を重視し、各階とも単純な病棟形状とし、内部は乾式の遮音間仕切壁を採用しました。北側病棟のストレスケア病棟は療養環境の向上を重視し、個室及び個室的多床室により構成されたプライベート空間からパブリック空間への段階的な空間構成を備えた病棟となっています。

設備においてはオンサイトエネルギーサービス方式やＬＰガスＧＨＰを採用し、快適な療養環境と施設運用コストの最適なバランスを実現しています。

（小田義彦・伊藤新一／伊藤建築設計事務所）



1階玄関ホール



多目的ホール〔わいわい〕



1階老人性痴呆疾患治療病棟 デイルーム



3階ストレスケア病棟 病室



精神科デイケアセンター（希望（のぞみ）の家）



福祉ホームB型（ホーリークロスホーム）





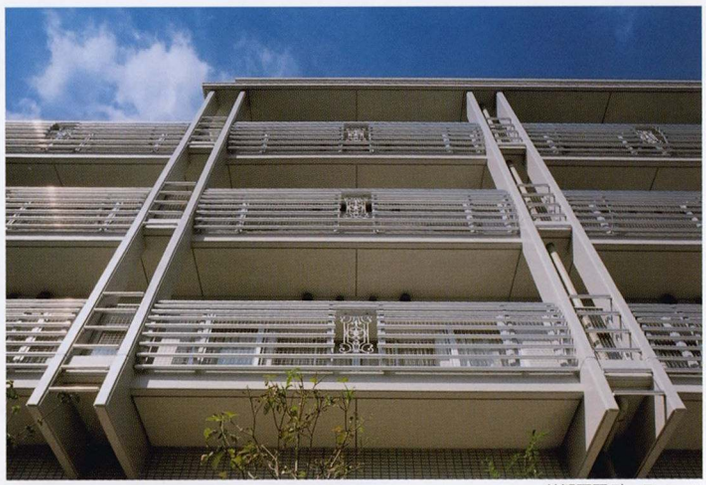




外観



B1談話ロビー吹き抜け



外観西面ディティール



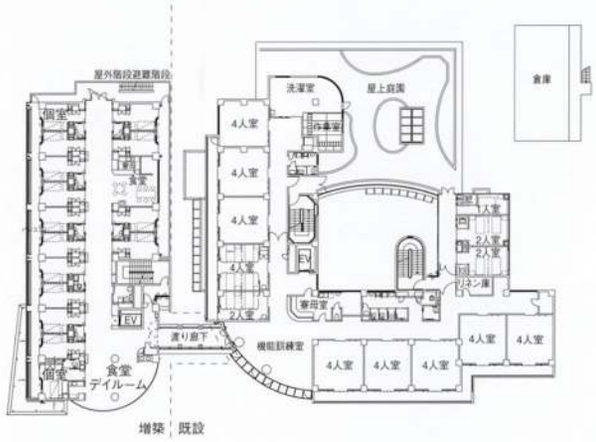
B1喫茶エントランス

所 在 地　愛知県名古屋市天白区高坂町
敷地面積　3,300.99㎡
建築面積　604.00㎡
延床面積　2,642.60㎡
構造規模　RC一部S造、5F、B1
工　　期　2002年９月～2003年７月
最 寄 駅　地下鉄鶴舞線原駅
撮　　影　滝田フォトアトリエ

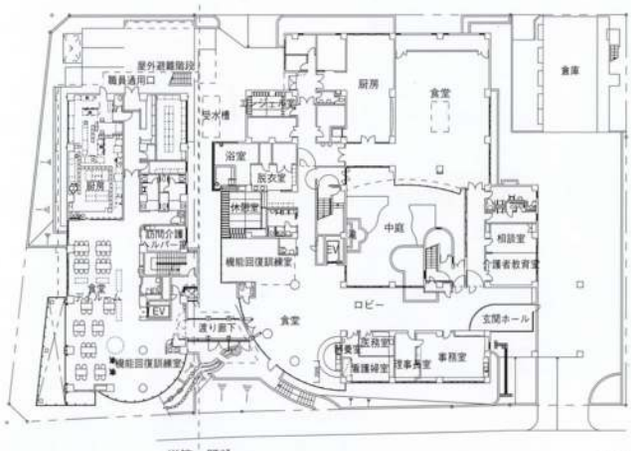
特別養護老人ホーム高坂苑増築

設計監理　安井建築設計事務所
施　　工　飛鳥建設

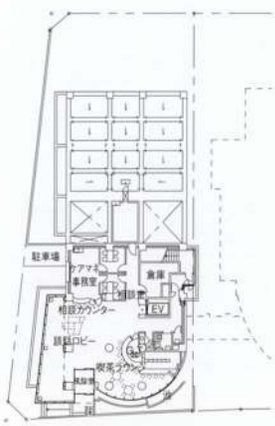
15年前に建設された特別養護老人ホームの増築である。既設の曲面の外壁の雰囲気を活かしながら施設の顔として特別養護老人ホームという用途を感じさせない、西日対策を兼ねた機能性と個室から風景を楽しく眺められるデザインを施した。立ち寄りたくなる雰囲気を持つ建物として地域住民が自由に出入りできる場（B１階喫茶）を提供し、自然にさまざまな交流が生まれることを狙っている。また、入居者が家（個室）から外出する感覚で利用できる空間を目指し、潤いある場として、表情のある空間と生活している人々の心を癒すしつらえを施し、生活が楽しく、この場所が好きになってもらえる建物となるよう工夫した。既設の曲面壁と増築の曲面壁の間のせせらぎでは、ホタルの繁殖を試みている。　（篠原佳則、本梅　誠／安井建築設計事務所）



2階平面図



1階平面図



B１階平面図



1階



B１階

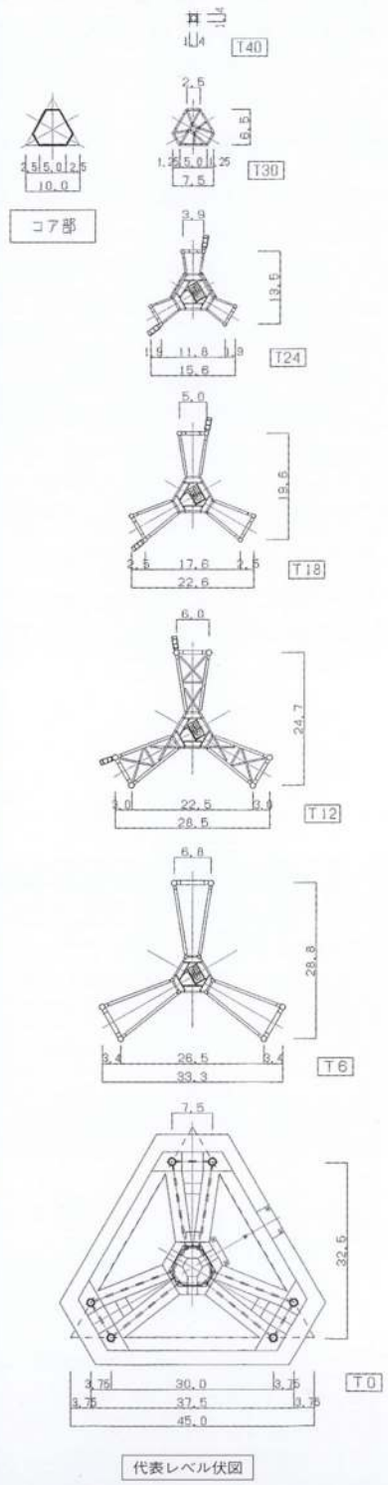


▲居室階

居室▼







代表レベル伏図

瀬戸デジタルテレビ放送所

設計監理　日建設計・伊藤建築設計事務所設計監理共同企業体
施　　工　大林組 名古屋支店

所 在 地　愛知県瀬戸市幡中町211-2
敷地面積　局舎　7,133.24㎡
建築面積　局舎　　964.20㎡
延床面積　局舎　1,967.20㎡
構造規模　放送塔：S 高さ244.70m　局舎：RC、2F
工　　期　2002年５月～2003年11月
最 寄 駅　愛知環状鉄道　瀬戸口駅
撮　　影　エスエス名古屋



NHKと民放５社の共同事業として計画された、地上波デジタル放送施設が瀬戸市に完成し、12月１日から中京圏でのデジタル放送が開始された。
地上高さ245mの放送塔は、従来のタワーとは異なる凸な２次曲線を外形線とする優美でやさしい形状を特徴とし、部材数の少ない透明感のあるデザインとなっている。このデザインは周辺への威圧感を感じさせないことと同時に、短期間に塔体を高く組上げるための設計上の配慮から決定された。
塔体には、各放送会社のパラボラアンテナの他に、FPUアンテナ、情報カメラが、また、頂部約40mのアンテナ塔には送信アンテナが取り付けられている。
塔体の鉄骨は亜鉛めっきによる防錆処理の上に、周辺環境および景観への配慮からオフホワイトのフッ素系塗装を行っている。
この放送塔は展望室を持たないため、建築基準法上は工作物の扱いであるが、極めて重要度の高い施設であると同時に、過去に例のない形状であることから超高層建築物と同レベルの耐震・耐風安全性を確保するよう設計した。
また、施工上は極めて難易度の高い鉄骨工事であったが、建方精度は200mの高さで誤差10mm以内に収めるという高精度をもって無事完成した。
送信施設の局舎はRC造２階建で、１階に電源設備とNHK送信機室、２階に民放５社の送信機室を配置している。
完成した放送施設は、瀬戸市が提案するデジタルリサーチパークのシンボルとして自然と共生しつつ、情報化社会に対応していく街つくりにも貢献できるものと確信している。

（大野富男／日建設計　渡邉國雄／伊藤建築設計事務所）

1. 建設地上空より
2. 夜景（ライトアップ）
3. 昼間全景
4. 送信施設の入った局舎









東海テレビ放送新館

設計監理　日建設計
施　　工　大成・大林・戸田建設工事共同企業体

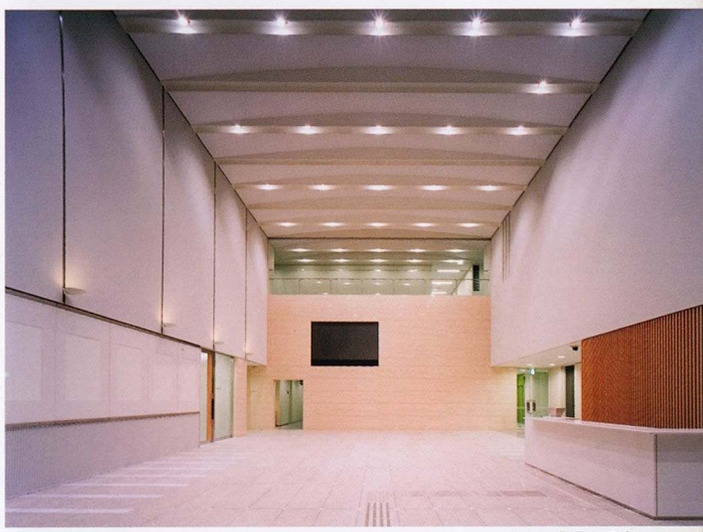
2003年12月より地上デジタル放送を開始した新館は、本館、テレピアの北隣に建設された。
名古屋高速の都心環状線に面して立地することから、円形鉄塔を含めて地上100mに及ぶ新社屋は、ランドマークとなることを意識し、ホワイトを基調にする端正な外観を心掛けた。
間口約40m、奥行き80mの細長い敷地の制約や隣地からの高さ制限の中で、３層分の階高を持つスタジオや２層分の報道スタジオ、適切な奥行きのオフィス空間など、様々な広さ、ボリュームの諸室を容積率を最大限活かすように計画し、東西の廊下を軸に南北のゾーンに分かれる明快でわかりやすい平面構成としている。
地上デジタル放送の多チャンネル化に備えて、低層部には、同じ対称平面形のツインの汎用スタジオを設けるなど、放送関連の諸室を合理的、機能的に配置した。
万が一の地震の際にも放送拠点としての機能維持ができるよう、制震構造を採用すると共に、重要機器のある諸室については免震床を設置した。また、マスター関連諸室は、マスター機器の更新に備えて、将来の遷宮スペースとなる会議室を隣接して設けるなど、将来計画を見越した計画としている。

（若林　亮、田中康範／日建設計）

所 在 地　名古屋市東区東桜1-1412
敷地面積　3,068.96㎡
建築面積　2,815.04㎡
延床面積　25,527.77㎡
構造規模　S、一部SRC、一1十15P1
工　　期　2001年10月～2003年４月
最 寄 駅　地下鉄栄駅
撮　　影　エスエス名古屋



玄関廻り



▲エントランスホール



▼南西方向から見る



名古屋テレビ放送株式会社新社屋

設計監理　日建設計
施　　工　建　　築　清水建設
　　電　　気　トーエネック
　　空調・衛生　ダイダン
　　昇　降　機　三菱電機

所 在 地　名古屋市中区橘2-10-1
敷地面積　5,602.74㎡
建築面積　3,480.83㎡
延床面積　20,811.17㎡
構造規模　SRC一部S、B1、8F
工　　期　2001年9月～2003年4月
最 寄 駅　地下鉄名城線東別院駅
撮　　影　エスエス名古屋



名古屋テレビ新社屋は、2003年12月の地上波デジタル放送開始を機に、新時代に対応した機能の拡充と企業イメージ向上を目指し、旧社屋の南側に隣接して計画された本社屋であり、デジタル時代の情報発信拠点として以下の基本方針のもとに建設された。

1．立地条件を活かした新たな景観の創出

・角地で交通至便な好立地を活かし、1階レベルを大きくピロティとして開放し、開かれた新社屋の顔にふさわしい、透明感のある明るいエントランスとした。またエントランスホールの一部を、オープンスタジオや展示空間として活用できる多目的ロビーとし、外部空間と一体化させ、交差点に新たな賑わいを創出している。

・外観は彫りの深いアルミルーバーとガラスによる構成で、開放感・清楚さ・繊細さを感じさせる、新時代のテレビ局にふさわしいファサードとした。
鉄塔は建物と一体的なデザインで地上80mまでダイナミックに伸びあがる形態としてガラスで被い、情報発信のシンボルとした。

2．創造的な活動を支えるデジタル時代の放送局

・西側にスタジオ空間、東側に執務空間をそれぞれ配置した構成とし、それらを自然光あふれる外側廊下（ペリメーター・アイル）形式を用いて機能的に結んだ、明快で安全性の高い平面計画とした。

3．快適な居住性を確保

・外景を望むリフレッシュコーナー、中庭と一体的なカフェテリアなどのアメニティ空間を充実させ、24時間稼働施設に対応し居住性を高めた。

4．災害に強い放送局

・災害時も電波を寸断させない安全で信頼性の高い施設として、十分な耐震性能を確保するとともに、設備的なバックアップ機能を備えるものとした。

5．環境問題に配慮した放送局

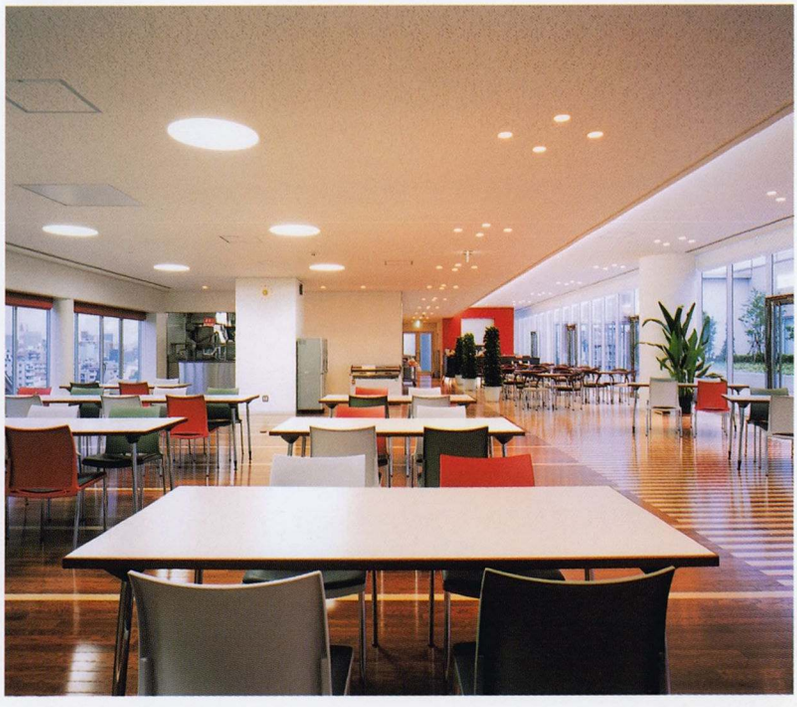
・企業姿勢を明確にした環境問題への配慮として、日射調整ルーバー、水蓄熱、雨水貯留・雨水利用、昼光利用照明制御などの省エネ対策のほか、エコマテリアル採用やロングライフ化など様々な対策を行った。

（高山順行、中辻鉄也／日建設計）













トヨタインスティテュートは、世界各地の人材育成を目標に「トヨタウェイ」と呼ばれる企業の価値観を伝承することを目的とした研修施設であり、浜名湖を眺望する小高い山の上、緑に囲まれた環境に建設された。研修施設は、円形平面の階段教室、三日月型平面の研修棟、東西約130mの宿泊棟からなり、既存の地形や緑を活かしながら配置した。

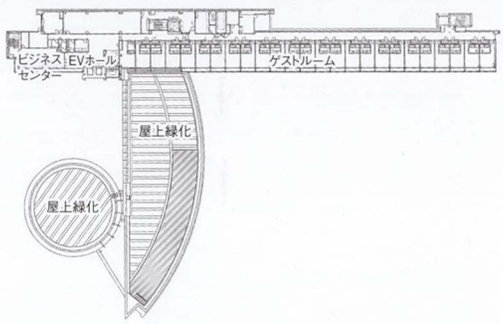
海外の幹部候補生を受け入れることから、「和のもてなし」をモチーフに、種石の色彩をそのまま仕上げに表し、土壁のような風合いを持つ彩色PCを外装に採用した。

また、内部空間の計画にあたっては、湖への眺望や外部の緑、中庭への景観を室内に取り込む「ゆとり」を感じる空間を心掛け、濃い色の木と白壁によるモノトーンのインテリアにまとめた。

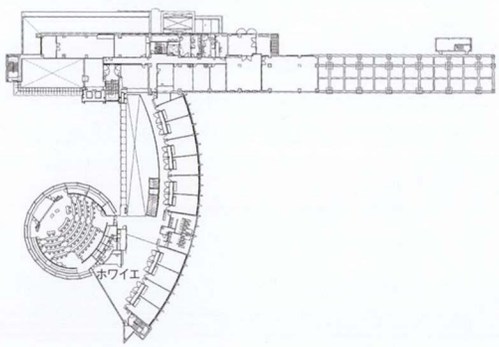
また、討議室の床には照明やスプリンクラーを組み込み、PC自身が天井仕上げとなる「ALL IN ONE」の3次曲面PCを採用している。

一方で環境をテーマとする企業の研修施設として、ダブルスキンや屋上緑化、サーマルトンネルなどの様々な環境手法をゆとりある空間に取り組み、CASBEEのSランクを実現している。

（若林亮、津坂好顕／日建設計）



3階平面図



2階平面図

0 5 10 20km

2 3
1 4

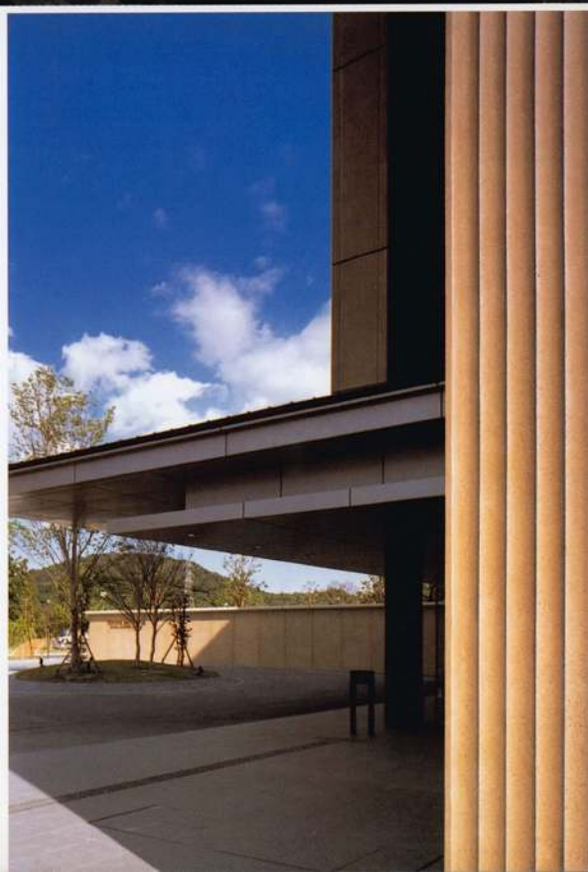
1．土壁の風合いをもつ外装の彩色PC版
2．研修棟屋上緑化
3．エントランスホール
4．天井にPC版を使用した2層吹抜のギャラリー

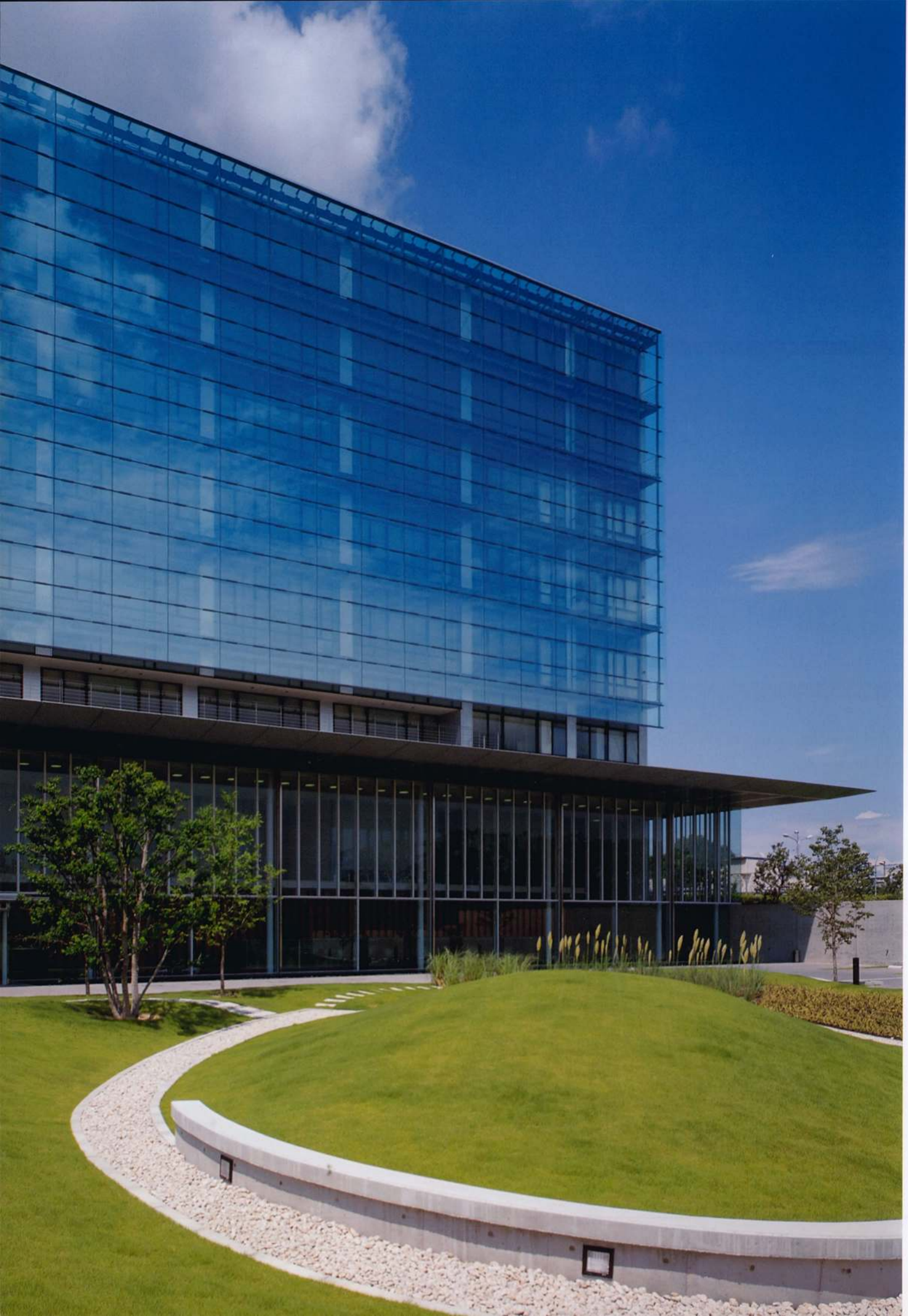


トヨタインスティテュート

設計・監理　日建設計
施　　工　大成建設名古屋支店

所 在 地　静岡県引佐郡三ヶ日町都筑字長坂3666-7
敷地面積　17,307.62㎡
建築面積　 3,735.41㎡
延床面積　10,322.07㎡
構造規模　S、一部SRC、5F
工　　期　2003年2月～2003年8月
最 寄 駅　天竜浜名湖鉄道東都筑駅
撮　　影　スタジオ村井





トヨタ車体 開発センター

設計監理　清水建設
施　　工　清水建設

グローバルで熾烈な競争の時代における、独創的・革新的な車の開発のための環境づくり。それは、単なるIT武装による環境ではなく、アイデアと情熱のコラボレーションをスムーズに行える知的生産性を高める環境である。そこでは、「暗黙知」を共有するためのフェイス・トゥ・フェイスの場とともに、異なるものの相互対比・相乗効果が革新を生むという表現が必要となる。

「TEC & ECO」というデザインプログラムの中で、環境を自然と人工物に二分せず、「自然は人のために演じ、人もエコロジーの一部としてある」とした。TEC（technology）ECO（ecology）はそれぞれが互いに意識しあうように慎重に併置され、場と場のあいだの「見切り」と「ちり」という細部がその意味を担う。

この建物には多くの省エネルギー技術を組込み、一次エネルギー40％減、CO_2 35％減を目指したが、外装タブルスキンは、そのコストシミュレーションで最も償却年限の長かった項目である。アルミグリッド外装の上にもう一枚ガラスのスキンをまとったその表情は、「映」と「透」の間で無限の変化を見せ、企業イメージとしての美を表現している。　（高橋和生／清水建設名古屋支店設計部）

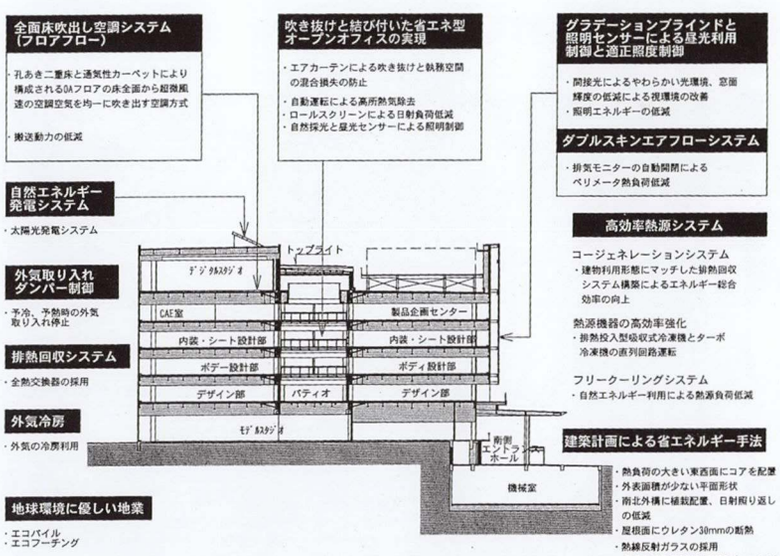
所 在 地　愛知県刈谷市一里山町金山100番地
敷地面積　422,054.32㎡
建築面積　5,231.91㎡
延床面積　24,007.92㎡
構造規模　S、B2F、6F、P2F
工　　期　2002年４月～2003年３月
最 寄 駅　名鉄知立駅
撮　　影　車田写真事務所





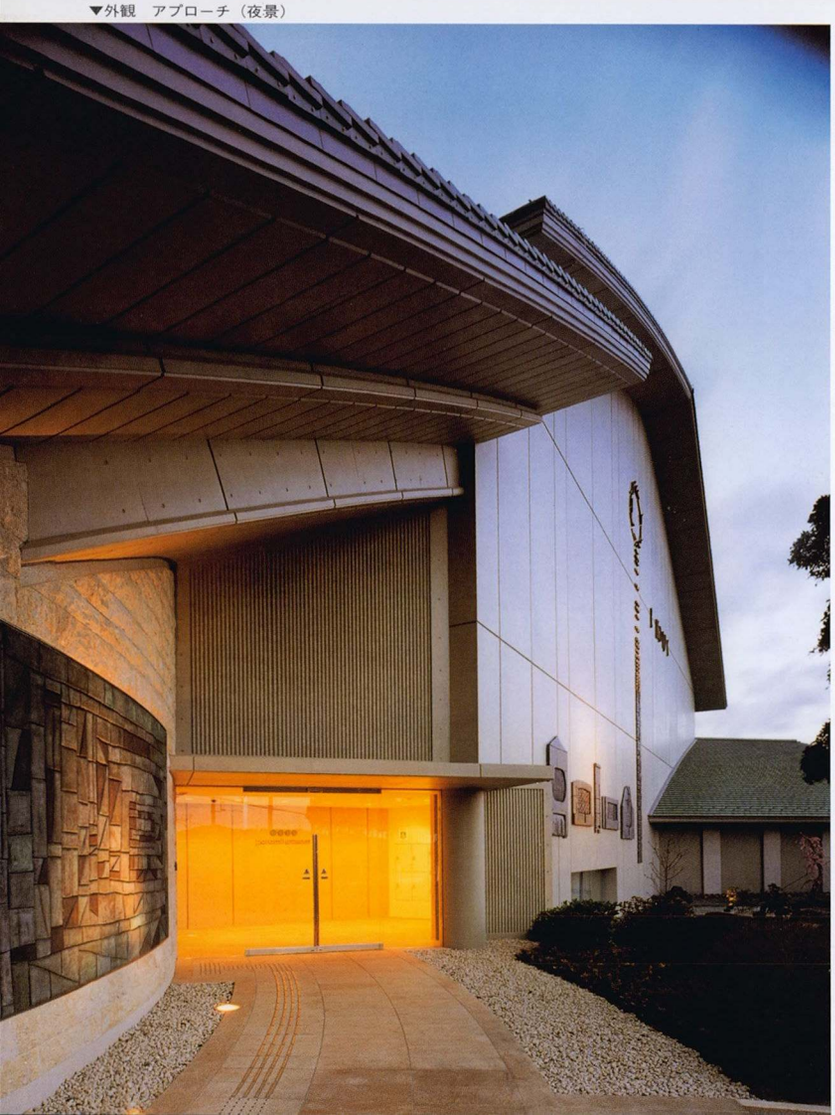


● 省エネルギー手法



▲外観　南東面

▼外観　アプローチ（夜景）



▼外観　paramita gardenより



Paramita museum

設計監理　東畑建築事務所
施　　工　鹿島建設

paramita museumの館名である「paramita・パラミタ」は般若心経の般若波羅蜜多…（迷いの世界である現実世界の此岸から、悟りの境地である涅槃（ねはん）の彼岸に至ることの意）に由来しています。

この美術館は個人の美術愛好家が長きにわたって収集した二千点余りに上る美術品を自然に抱かれた菰野の里山に10年の歳月をかけて計画されたものです。

既存の雑木林を出来る限り残し、地元の造園家による「鈴鹿の山に咲く花木と山草の野趣的な庭」をテーマに1,200坪の自然の原野を手入れし、アートと自然が一体となって楽しめる美術館としました。

施設の中心は１・２階に配置した大小６室の常設・企画展示室です。庭園の木立がいろいろな高さから楽しめる緩やかなスロープと２つの個性的なギャラリーがそれらをつないでいます。さらにサロンからガラス越しに庭園へと導くような自然を楽しむ平面構成としました。

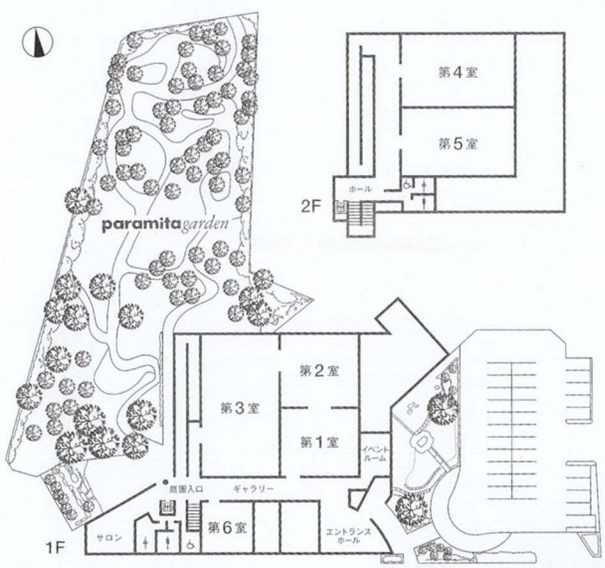
「建物は堅牢かつ簡素で、目立たなくてよい」個性派の美術作品を大切にされるオーナーの要望でした。日本古来からある瓦屋根のもつ簡素で、特徴ある青銅色の大屋根の重なりに雄大な鈴鹿の山並みを重ね合わせ、周辺の風景に調和した建物本来のたたずまいの美しさを目指しました。

外壁は作品を載せる大きなキャンバスであり、建物の内外に取りつけられた個性豊かな美術作品がこの美術館のアイデンティティーとなりました。

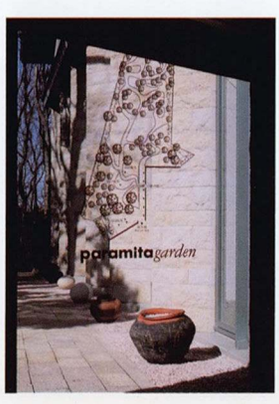
子供時代に本物の文化芸術をと、「目線を下げて見やすく、ゆったりとした展示」は子供や車椅子でも疲れない様に配慮され、スロープ・トイレ・エレベーター・展示等、バリアフリーの精神は施設全体に行き届いています。

この美術館で、多くの人々がアートに触れ、キャンバスである建物に十人十色に何かを感じ、考えるきっかけになれば、これこそが館名であるパラミタに込められた想いです。

（中村行雄・木内瑞佳／東畑建築事務所）



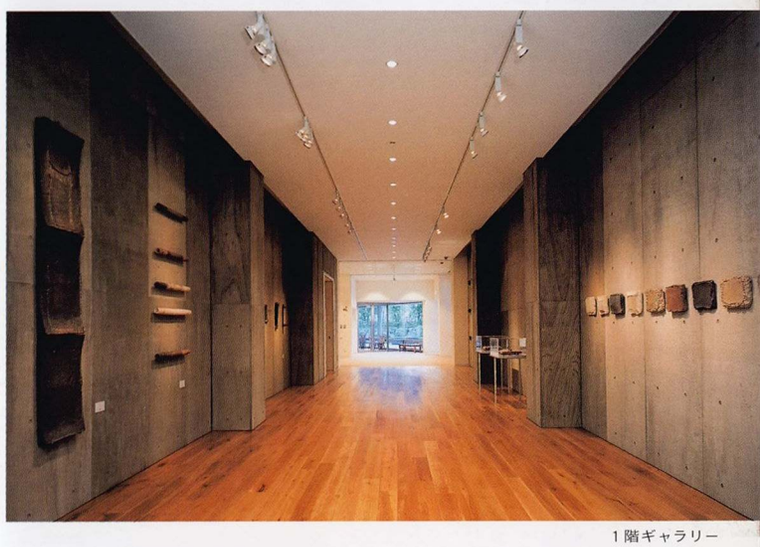
１階平面図　１：1400



所 在 地　三重県三重郡菰野町大羽根園
敷地面積　7,974.30㎡
建築面積　2,163.29㎡
延床面積　3,330.97㎡
構造規模　RC、一部S、2F
工　　期　2001年10月～2002年12月
最 寄 駅　近鉄湯の山線／大羽根園駅
撮　　影　エスエス名古屋　他



中庭スロープ



１階ギャラリー



▲エントランスホール

▼サロン



※

星が丘テラス

基本デザイン　M. Arthur Gensler, Jr. & Associates
設　　計　テック・アールアンドディス、竹中工務店
総合工事監理　服部都市建築設計事務所
施　　工　竹中工務店

所 在 地　愛知県名古屋市千種区星が丘元町16-50
敷地面積　28,838㎡
建築面積　6,164㎡
延床面積　13,094㎡
構造規模　S・RC、B1F・4F
工　　期　2002年5月～2003年3月
最 寄 駅　地下鉄東山線星ヶ丘駅
撮　　影　青山賢三(※)、吉村行雄



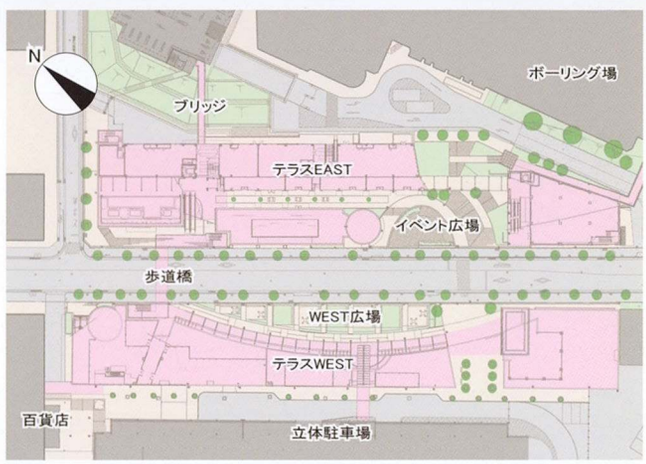


建築地は、名古屋市東部の東山公園星が丘門から地下鉄・星ヶ丘駅に向けてなだらかにくだる道路の両側にあります。当エリアは背後の豊かな緑地環境と丘陵地の地形的特長から、郊外住宅地の中でも高級住宅地として認知され、いくつかの大学と高校が立地する文教地区にもなっており、地域特性にふさわしい施設開発が命題となった。

隣接する百貨店、将来構想の商業ビル、ボーリング場及び立体駐車場の既存の施設からなる一大商業エリアの中核となり、各施設を一体的に利用できるよう開発された。

建物形状は隣接する百貨店の高層建築に対して広がりのある低層建築とし、地形的特長を活かしながら随所にヒューマンスケールの滞留スペースや通り抜け空間を設けた。

中央を通る公道で隔てられた大きな円弧の「テラスWEST」と直線的な「テラス EAST」の構成で、新たな都市景観を創出している。立体回遊空間は上下の視線が交差し、「見る・見られる」という関係を意識させる効果もあり、街の楽しさや賑わいを演出している。　（林　昌明／竹中工務店）



配置図　1：2000





中央制御所 正面

東部丘陵線車両基地

設計監理　伊藤建築設計事務所
施　　工　間・矢作共同企業体

所 在 地　愛知県愛知郡長久手町大字熊張
敷地面積　35,174.33㎡
建築面積　 4,201.66㎡
延床面積　 5,655.75㎡
構造規模　S、2F
工　　期　2002年2月～2003年12月
最 寄 駅　愛知環状鉄道線・八草駅
撮　　影　間・矢作共同企業体

中央制御所 西北面（手前は折返線と測定所）



中央制御所 中庭



2005年春開業予定の東部丘陵線（リニモ）は、本格的な営業路線としては日本初の磁気浮上式システムによるもので、同年開催の日本国際博覧会（愛知万博）会場への鉄道系の輸送手段として利用されます。

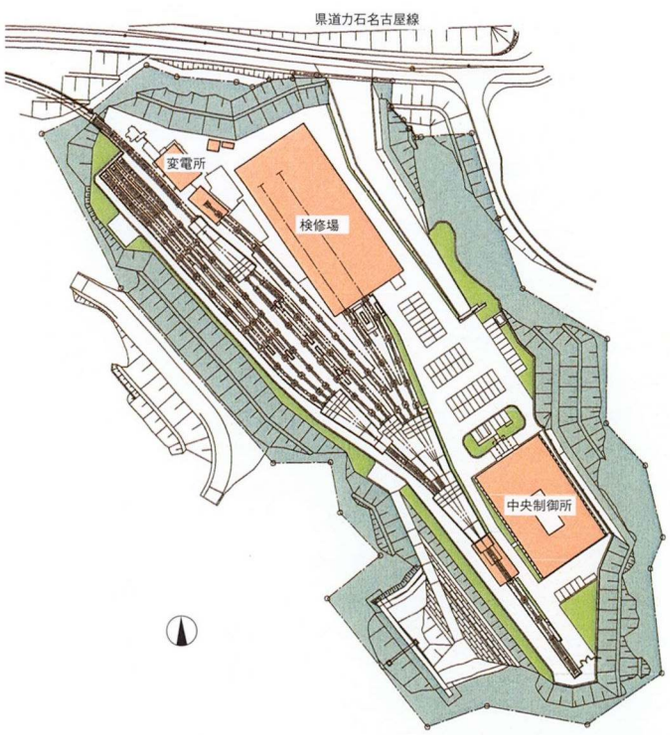
車両基地は車両の留置、検査・整備及び列車の運行制御を行うところで、万博会場となる愛知青少年公園の北東部に隣接し、構内には本社機能と列車の運行や駅務を総合的に管理する中央制御所、車両の定期的な検査・点検・修理を行う検修場、及び変電所など計7棟の建物と、軌道（留置線、洗車線、折返線）が設けられています。基地の建設にあたっては、丘陵地を造成することによる周辺環境への影響を極力少なくすること、また人と環境に優しい建物を目指すことが優先課題となりました。

基地内の軌道は水平に設置するため平坦地を広く確保する必要がありますが、造成面積が最小となるように軌道と建物の配置を考え、周囲の作業ヤード及び通路は、車両や資材の搬入とメンテナンスに必要な最小幅員とし、平坦地の範囲を設定しました。また既存緑地はできるだけ残すこととし、法面など手を加えたところでも緑地として自然が回復するよう、また公園の景観に調和するよう敷地周辺に自生する樹種を選定して植栽しました。特に敷地内の植生については専門家による事前調査を行い、重要種のモンゴリナラやスズカカンアオイは工事期間中には別敷地に仮移植し、工事完了後に再び敷地内に移植しました。

環境への配慮として、中央制御所では屋上に太陽光発電装置（10KW）を設け照明用電源として利用、屋根からの熱負荷を低減するため屋上を緑化、汚水処理水を雑用水として再利用、氷蓄熱システムによる個別空調方式を採用、中庭を設け自然の採光・通風を確保するなど環境負荷低減に努めています。また建物以外でも、車両の洗車には排水の再利用と雨水（検修場屋根の集水）の利用をするなど、資源の有効活用を図っています。

開業後は施設見学者が見込まれることから、中央制御所に展示・見学用スペースと合わせて、車いす対応エレベーターや多目的トイレなどを設け、従業員のみならず施設を訪れる人にも分かり易く、使い易い施設となるようユニバーサルデザインを心掛けました。

（小田義彦、澤村喜久夫／伊藤建築設計事務所）



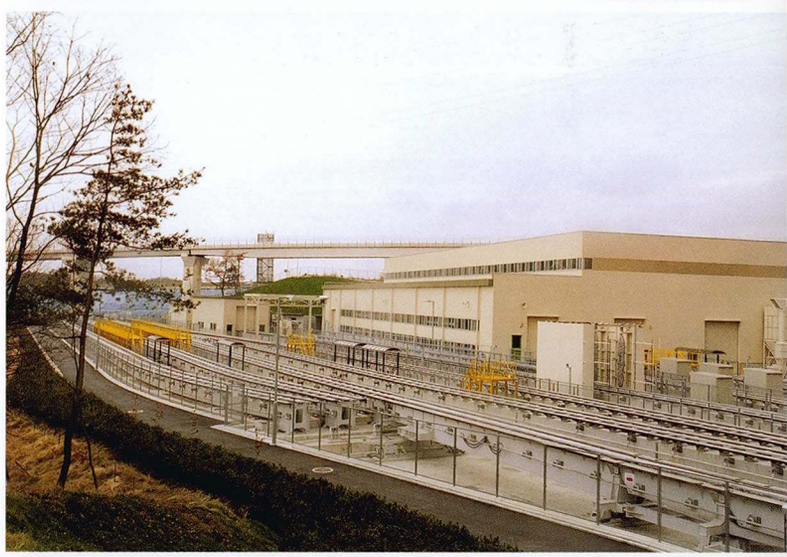
配置図　1：3000



中央制御所２階ロビー



中央制御所大会議室



▲検修場南西面

▼検修場内部







楞厳寺増改築

設計監理　竹中工務店
施　　工　竹中工務店

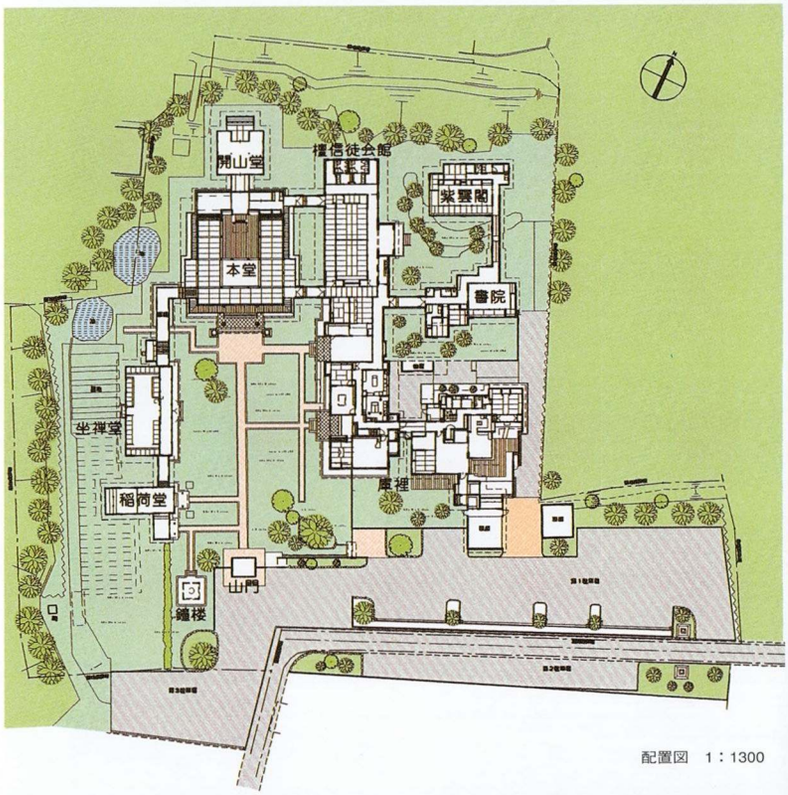
所 在 地　愛知県刈谷市天王町6-7
敷地面積　9,749.8㎡
建築面積　2,001.26㎡
延床面積　1,931.05㎡
構造規模　W、1F
工　　期　2001年11月～2002年11月
最 寄 駅　JR刈谷駅よりタクシー
撮　　影　吉村行雄、加藤敏明

刈谷城主水野家の菩提寺。曹洞宗の古刹で、家康の母「於大の方」ゆかりの禅寺。

繁華街をはずれた住宅街の細い路地の奥、大樹に囲まれた境内は、山門や本堂など由緒ある趣を感じさせるものの、老朽化による荒廃が著しく進んでいた。修復・再建にあたり、禅宗伽藍様式の基本である山門と仏殿（本堂）は、伽藍の中心軸として残し、共に修復。また昭和初期に消失した本堂向拝は方形屋根に合う銅板葺唐破風で再建とした。更に西に僧堂（坐禅堂）・東に庫院（檀信徒会館）を配し、山門の西にある稲荷堂に修復を加えて東司（便所）を新設、庫院の東には書院と客殿を設けて伽藍を完成させた。

常夜灯に続く長い参道を土塀に沿って進み山門を潜って境内に入ると、大樹に囲まれた本堂を中心に広がる伽藍は「凛とした緊張感を感じる空間」である。楞厳寺は雑然とした街中にある異空間であり「地域住民の心の安らぎの場」である事を願って修復・再建された。

（近藤名保彦、宮野　裕／竹中工務店）

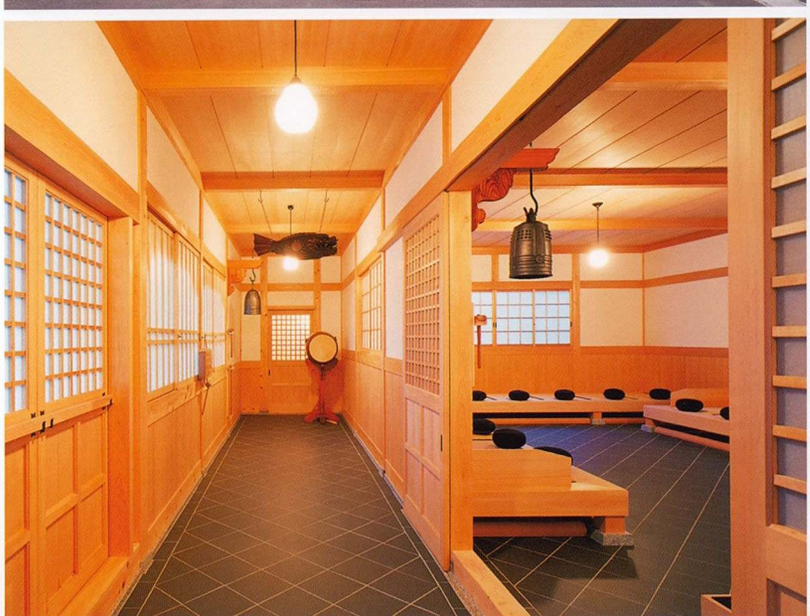


配置図　1：1300





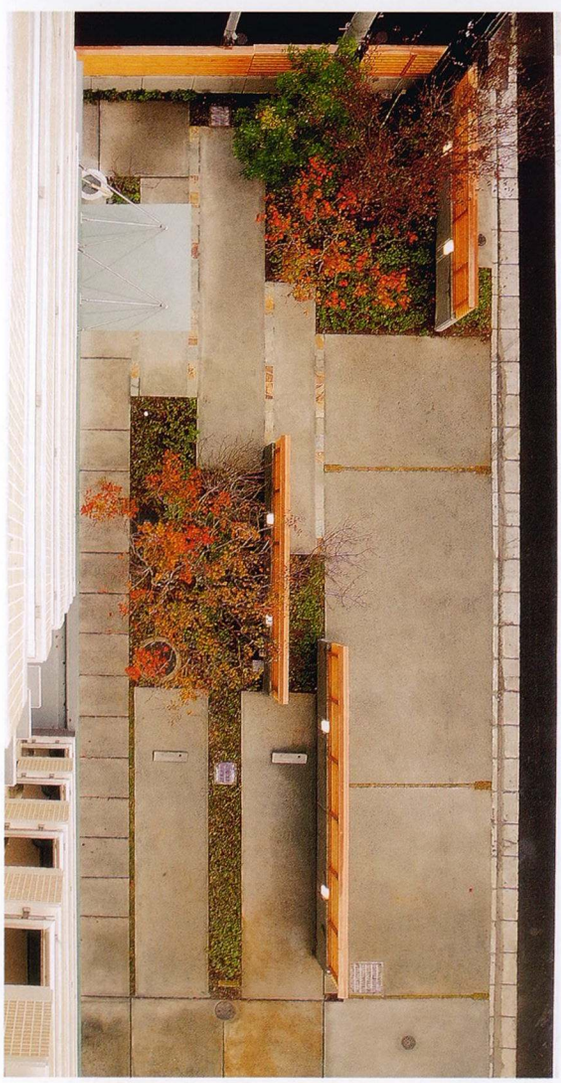








▲アプローチ部分夜景



▲アプローチ部分



▲東面全景

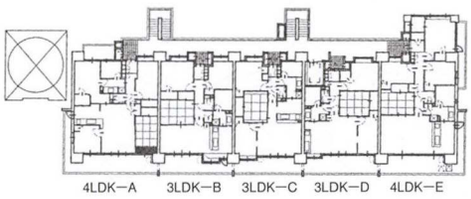
セキスイハイム東海

ル・シェモア　泉町

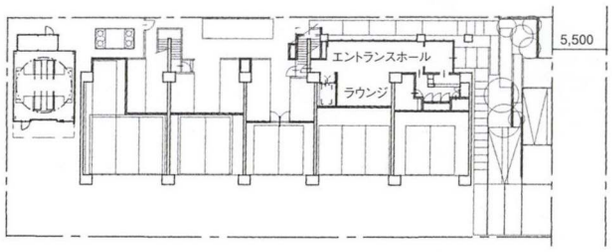
設計監理　東畑建築事務所　名古屋事務所
施　　工　大豊建設　名古屋支店

計画地は、静岡駅から南東へ５分、商店街と住宅と町工場が混在し、職人街の風情が漂う下町である。敷地は、間口が狭く奥行き長の形状で、ここに45戸の分譲マンションを計画する。
デザインコンセプトは、まちへの調和を大切に捉え、和のテイストを生かしたモダンデザイン「和心回帰」を設定。外構アプローチ廻りには、時と共に質感の出てくる無垢の仕上材を出来るだけ選定するとともに、季節感を醸し出す植栽を組み合わせ、都心部における貴重な緑と潤いの空間を創出した。
また、コミュニテイー形成と出会いの場としてエントランスには、ラウンジと地域の名称にも出ている泉の水景を設定し、ここに住まう人や来訪者をやさしい演出で出迎えている。
住まいの専有部には、ライフスタイルやライフステージに合わせての要望に応えやすい様に、自由度の高いプランとした。そのため、ボイドスラブを採用し小梁を減らし、ワイドフロンテージかつ水廻りの集中、オープンキッチン、リビングキッチン、水廻りの２WAY、サービスバルコニー、広いバルコニー、UB窓、主寝室設定、ウォークインCL、シューズインCL、DEN等の組み合わせを行なった。
細やかな工夫とコーディネートされた内装で演出した住戸は、ユーザーのライフスタイルに合った住まいとなり、時と共に地域の文化を育んでいくことを願う。

（坪井俊和／東畑建築事務所）



10階平面図



1階平面図

所 在 地　静岡県静岡市泉町4-8
敷地面積　1,243.81㎡
建築面積　631.35㎡
延床面積　4,709.35㎡
構造規模　RC、10F
工　　期　2002年9月～2003年10月
最 寄 駅　JR静岡駅
撮　　影　スタジオハラダ



▲北側通路からエントランス夜景



▲エントランス夜景



▲ラウンジ夜景



▲リビングキッチン内観

Tokai Sketch Book



半田市立さくら小学校

設　　計　篠田川口建築事務所
施　　工　校　舎：七番組
　　体育館：新美建設
所 在 地　半田市東洋町１丁目12番地
敷地面積　21,490.37㎡
延床面積　校 舎 棟：6,267.79㎡
　　体育館棟：2,289.04㎡
構造規模　RC、3F
工　　期　2001年６月～2002年６月
最 寄 駅　名鉄ちたはんだ駅、JRはんだ駅



天然温泉 丸屋玉ノ湯

設　　計　城設計室
施　　工　清水建設
所 在 地　愛知県東海市元浜12-7
敷地面積　6,632.63㎡
建築面積　1,766.51㎡
延床面積　1,919.73㎡
構造規模　S、2F
工　　期　2002年６月～2002年10月
最 寄 駅　名鉄常滑線尾張横須賀駅



三菱自動車整備専門学校 学校本館

設　　計　竹中工務店
施　　工　竹中工務店
所 在 地　愛知県岡崎市仁木町川越1-1
敷地面積　41,781㎡
建築面積　1,006㎡
延床面積　2,544㎡
構造規模　S、3F
工　　期　2002年６月～2002年12月
最 寄 駅　名鉄本線東岡崎駅



知多信用金庫武豊支店

設　　計　伊藤建築設計事務所
施　　工　七番組
所 在 地　愛知県知多郡武豊町道崎22番地の4
敷地面積　848.39㎡
建築面積　407.09㎡
延床面積　671.57㎡
構造規模　S、2F
工　　期　2002年４月～2002年10月
最 寄 駅　名鉄河和線知多武豊駅

特集

愛・地球博
～2005年日本国際博覧会のめざすもの～

愛知県での日本国際博覧会も2005年開催に向け、インフラ整備から次第に個別の施設建設へと進展しつつあります。

名古屋市と国際博覧会場を結ぶ輸送手段の新交通システム（磁気浮上式システム）も、橋脚・橋梁の頑強な姿は、街を貫く太く力強いラインとして現出しておりますし、郊外の穏やかな自然風景にあっては、新たな様相を創りだしています。

自然保護との対立で揺れた会場決定も、二会場の開催ということになったわけですが、国際博パビリオンの多くが展開されます愛知青少年公園を中心とした長久手会場では、造成工事がほぼ整い、政府・県・市の施設の建設が着工しています。一方、当初会場として予定されていました海上の森の瀬戸会場は、ごく限定的な広さと内容での展開となっていますが、こちらも政府・県の施設建設が進められています。

また周辺の市町村における街づくりや施設整備も、それぞれに計画展開されています。

そこで、市民団体や地域住民との調整を多少残していながらも、ようやく現れてきました国際博覧会の計画の全体像を探ってみたいと思います。

伊勢神宮式年遷宮より始めました東海特集の地区シリーズも、今回で11回となります。

この愛知万博の特集にて一応の節目とできれば良いと考えます。

この特集記事には、ご多忙中にもかかわらず御執筆を頂きました皆様を始め、多くの方々の御支援御協力を頂きました。深く感謝致します。

(東海支部特別編集委員会)

愛・地球博メッセージ

■施設の計画とその意図
会場計画の概要
政府出展事業の計画概要
愛知県施設の計画概要と設計意図
名古屋市パビリオン
魅力が満載　民間パビリオンゾーン
新しい時代における市民参加へのチャレンジ

■関連事業
せと・まるっとミュージアム～愛・地球博を契機として～
博覧会会場における公園事業と博覧会後の公園整備
海上の森の保全と活用
磁気浮上式システム～リニモ（東部丘陵線）～

愛・地球博メッセージ

2005年日本国際博覧会協会経営企画室

20世紀には、新しい地球社会が生まれた。

信じられないほどの科学・技術の進歩・発展、高速移動手段の発達と情報・通信技術の進化が、人・モノ・情報の交流を地球規模で活性化させ、世界を一変させたのだ。

その結果、巨大化した人類の活動は、地球自然の許容量を超え、さまざまな危機を知らせるシグナルが点滅し始めている。

地球上の総ての「いのち」の持続可能な共生を、全地球的視野で追求することが、21世紀における地球社会の構成員総ての課題となった。

この課題を解決するために、私たちは愛・地球博のテーマである“自然の叡智”を縦糸に、豊かな交流を横糸にして、地球社会を包む、柔らかく、豊かさと美しさにあふれる織物を織り上げようと思う。それは地球社会の新しく、美しい装いになるだろう。

「自然のもつすばらしい仕組みと、いのちの力」に感動し、世界各地での自然とのさまざまなつき合い方、知恵に学びながら、多彩な文化・文明の共存する地球社会を創ろうではないか。

国家・地域・企業・自立した市民・NPO／NGO、ボランティアなどの地球社会を支える人々の多様な営みと多彩な参加が、美しい織物を織り上げるだろう。

多様な交流が様々な摩擦を生むこともある。だからこそ、私たちは人類の持つ理性と愛と美しいものへの憧憬を、大切に育てたい。

人間らしい交流の原点とは、何だろう。

それは人が人と出会い、語り合い、理解し合い、尊敬し合い、愛し合うことにあるのではないか。

そのための交流の舞台“EXPO 2005 AICHI, JAPAN”をつくろうと思う。

私たちは世界の人々に呼びかける。

AICHIに集まろう。互いに見つめ合い、微笑み交わし、抱き合い、多彩な知恵の交流する世界を、全身で体験し、全感覚で楽しもう。

地球の総ての“いのちと未来”のために！！

テーマと４つの柱

環境に配慮したエキスポ

最先端の科学技術を通して、生命、宇宙などの未知の自然への積極的なアプローチをはかると同時に、人間は自然の一部であるという原点に立ち、衣・食・住など生活環境の様々な面において自然と調和する豊かさを提唱する。

また、地球環境問題に対応して、会場整備と会場運営の全ての分野で、３Rシステム（リデュース、リユース、リサイクル）の徹底やゼロエミッションを目指した取り組みを実践する外、21世紀に求められる新しいエネルギーシステムやCO_2削減などの最先端の環境技術の導入に挑戦し、環境負荷の低い循環型社会のモデルを提示する。

地球大交流を目指すエキスポ

地球温暖化などの地球的課題の発生は、「かけがえのない、ただ１つの地球」という意識を世界の人々に拡げた。独特の風土と歴史に培われた世界各地の文化・文明は、その多様性をアイデンティティとして継承しながらも、交流を通じて地球規模での＜対話＞を、いま強く求められている。

国際博覧会が有する、「世界の様々な国民・民族や文化・文明の集結と交流」という最大の特徴を生かして、愛・地球博ではできるだけ多くの国々の参加を促進し、地球的課題に対する世界の叡智を結集して、地球大交流という新たな文化・文明の＜対話＞を実現する。

市民が参加するエキスポ

かけがえのない地球を未来に引き継ぐために、いま地球に生きる全ての人々が「地球市民」としての自覚を持ち、地球規模で連携し、考え、行動していくことが求められている。

「愛・地球博」では、これまでの国際博覧会の伝統的な参加形式の殻を破り、国や国際機関、自治体や企業の参加に加えて、これからの地球社会の重要な構成員となる「地球市民」の積極的な参加を促進する。

愛・地球博での市民参加は、計画づくりや会場づくりへの意見提案や会場運営への主体的参加に加えて、自らが企画し自らが展示演出を実践するなど、21世紀型万博の先駆けとなる「参加」と「体験」の実験性に挑戦する。

IT時代のエキスポ

人・モノ・情報の交流が地球規模で活性化し、地球社会を構成する多様な主体が複層化する現在、デジタル情報技術のはたす役割は加速的に増大している。「愛・地球博」は最先端のITの実験場として、これからの日本の社会構造と産業構造の活性化を展望する絶好の機会である。

会場運営、展示、催事、交通アクセスの円滑化など愛・地球博の多様な分野が、インターネットや携帯情報端末技術、さらにブロードバンド時代に対応した映像情報処理技術などの情報関連技術の実証化、実用化の場となるようにする。また、「愛・地球博」がユビキタス社会やユニバーサル・デザインの世界への発信の場となることを積極的に推進する。

（文責／本庄孝志）

会場計画の概要

2005年日本国際博覧会協会会場整備グループ

開催概要

2005年日本国際博覧会は、21世紀の人類が直面する地球規模の課題の解決の方向性と人類の生き方を発信するため、多数の国・国際機関の参加のもと、自然の叡智をテーマとした新しい文化・文明の創造を目指すものである。

開催期間の前後を通じて地球規模での市民参加を得、人類と自然の関係に関する意識の大きな転換点となることにより、子どもから高齢者まであらゆる国の人々が生きる喜びや将来の夢を語り合うきっかけとなり、未来への希望に満ちた博覧会となることを目指す。

以下に、博覧会の概要を示す。

名　　称　正式名称：2005年日本国際博覧会
　　愛　　称：愛・地球博
テ ー マ　自然の叡智（Nature's Wisdom）
　　＜サブテーマ＞
　　①宇宙、生命と情報（Nature's Matrix）
　　②人生の“わざ”と智恵（Art of Life）
　　③循環型社会（Development for Eco-Communities）
開催期間　2005年３月25日～９月25日（185日間）
開催場所　名古屋東部丘陵（長久手町・豊田市、瀬戸市）
　　長久手会場：158ha
　　瀬戸会場　：　15ha
　　合計　　：173ha
目標入場者数　1500万人

会場計画

○会場計画の基本的な考え方

博覧会の会場は、元来、名古屋東部丘陵に見られる典型的な谷地にあり、長久手会場と瀬戸会場から構成されている。

長久手会場は、既に人工的に造成された公園地区と、比較的自然の植生が残されているゾーンから成り、なるべく現地勢への改変の少ない施設配置を行うこととしている。

瀬戸会場は、海上の森につながる丘陵地にあり、沢筋と尾根筋が入りまじった複雑な地形の中に計画されている。

また、両会場とも昆虫、植物などの希少な生物が生息しているエリアが多数点在している環境にある。

会場計画においては、短期間の博覧会開催という考えに基づいて以下のような基本コンセプトにより計画している。

A）現状の地形の改変を最小限にとどめる
B）起伏のある地形の中でできる限りバリアフリーを実現する
C）希少な動植物の生息に配慮する
D）資材、部品、備品などの３R（Reduce, Reuse, Recycle）を実現する
E）会期後の都市公園としての利用計画を十分に配慮する

○長久手会場の会場計画

長久手会場は、比較的高度に活用されている北西部と、希少種等の生物や森林を多く残す南東部に大別できる。高低差が約40ｍと大きく、変化に富んだ地形の各所に水面が存在し、まとまった平場の確保は困難な状況にある。

反面、長久手会場は多数の来場者を迎え入れる必要があり、緑地や地盤への影響を最小限に止めつつも、国際博覧会として所要の施設配置及び動線確保等の要件を満足するための計画が必要である。

したがって、まず希少種の生物がまとまって分布する地区や森林地区を回避し、北西部を中心に利活用を図ることが必要になる。また、外から会場へのアクセスルートの制約から北部及び西部にゲートを設けることが適当と考えられる。

以上のことを踏まえ、散在する活用可能な敷地相互を、安全で快適な動線で連結させることを中心的な方針として会場計画を行っている。

長久手会場内の施設配置にあたっては、観客の主動線である「グローバル・ループ（空中回廊）」と、各国や国際機関の出展施設群と共用広場で構成する「グローバル・コモン」を基本骨格としている。この点在するグローバル・コモンとそれを結ぶグローバル・ループが会場計画の特徴となっている。

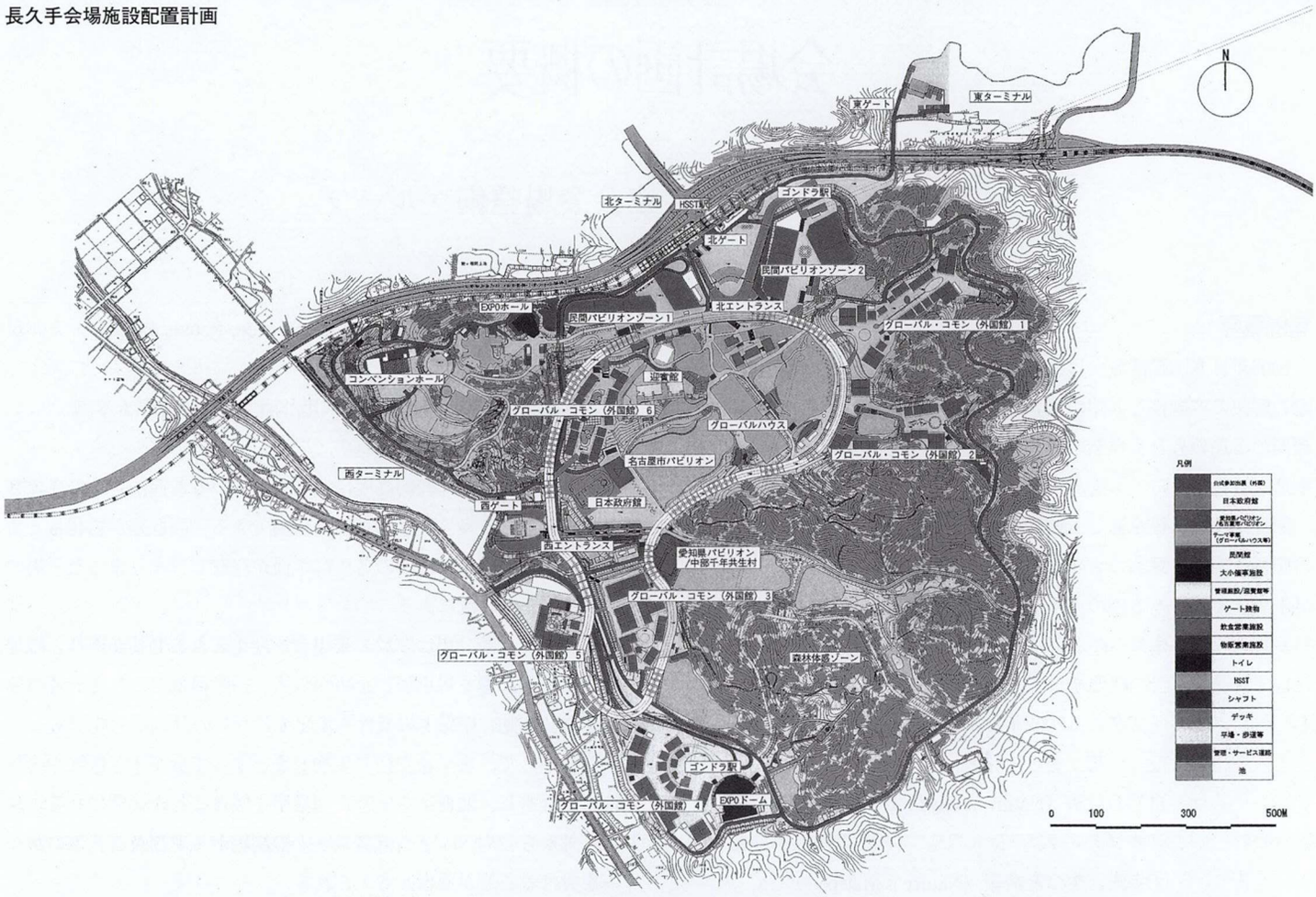
グローバル・コモン

グローバル・コモンは会場内に６つ配置し、展示施設群、共有の広場や飲食・物販施設で構成し、参加者同士の国境を越えた交流や、来場者との賑わいに満ちた交流を繰り広げ、多様な文化や価値観が共存する空間とする。

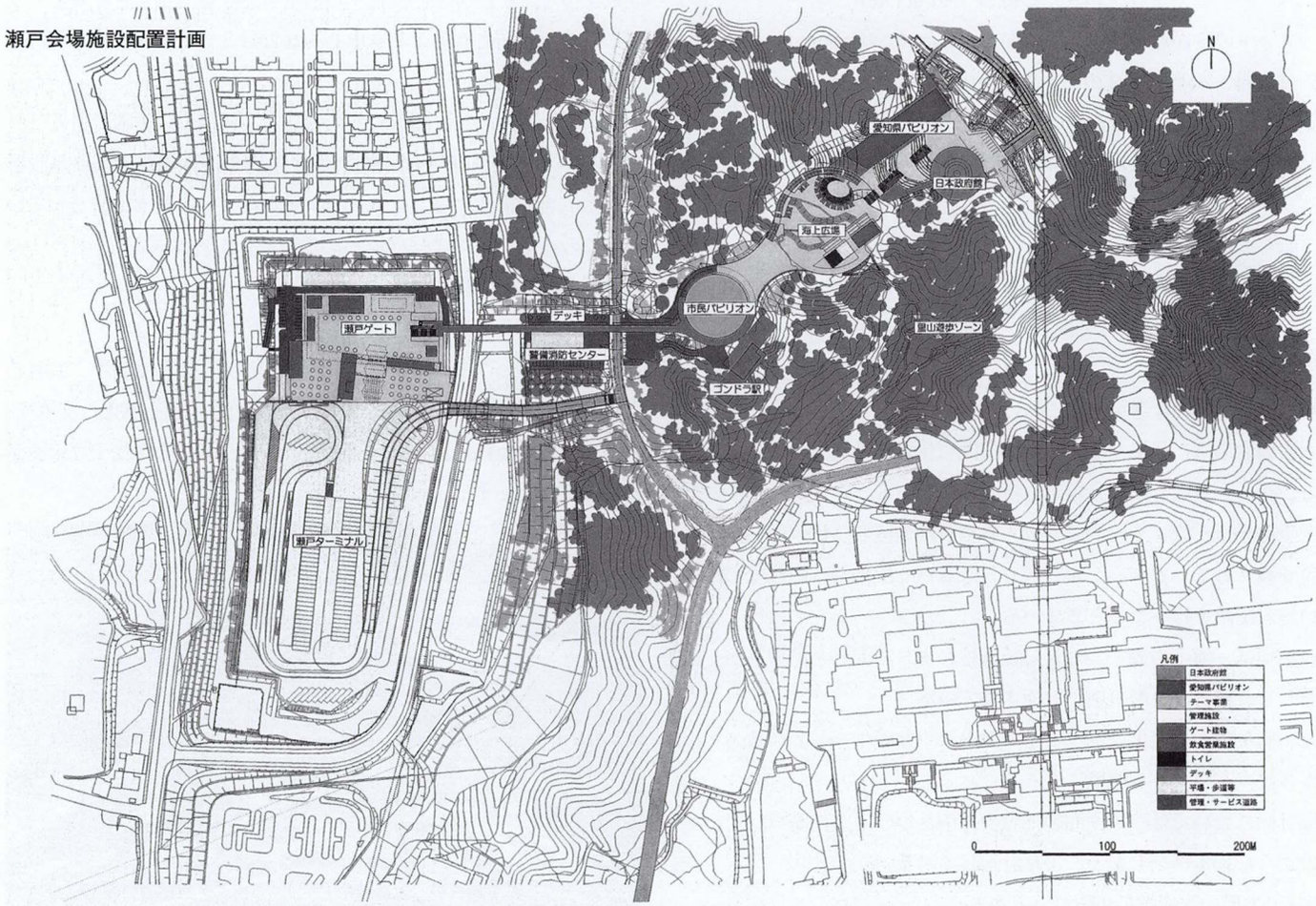


長久手会場イメージ

長久手会場施設配置計画



瀬戸会場施設配置計画



それぞれのグローバル・コモンは、原則として地域別とし、グローバル・コモンを巡ることにより地球一周の疑似体験が得られ、地球大交流が実現できるように考えている。

グローバル・コモンに配置する参加者の出展施設は、モジュール形式（規格化された単位空間の組み合わせ）で計画している。１モジュールは18ｍ×18ｍ×９ｍ（高さ）とし、各国や国際機関は最大５モジュールまで出展が可能となっている。

グローバル・ループ

長久手会場における観客の主動線として、全長2.6km、標準幅員21ｍで会場をほぼ一周できる空中の回廊であるグローバル・ループを計画している。グローバル・ループは、６つのグローバル・コモンや各施設を結んでおり、①約40ｍの高低差のある会場をバリアフリーでつなぐ役割を果たす②シンプルなループ構造によって会場の施設配置がわかりやすくなる③土地の改変を少なく抑えることができ、環境への負荷を軽減できる――等の特徴を有している。

ゾーン構成

①センターゾーン

グローバル・ループに囲まれたゾーンで、グローバル・ハウス、こいの池、愛・地球広場で構成されている。グローバル・ハウスは既存の建物を活用したメイン展示施設、こいの池は「水」をテーマとしたスペクタクル・イベント空間、愛・地球広場は最先端のＩＴを駆使した情報受発信による地球大交流イベント空間とする。

②日本ゾーン

西エントランスに隣接したゾーンで、こいの池のほとりに日本政府館と名古屋市パビリオン、かえで池に面して愛知県パビリオン／中部千年共生村が配置され、次代の日本のアイデンティティを再発見・再認識する場となる。

③民間出展ゾーン

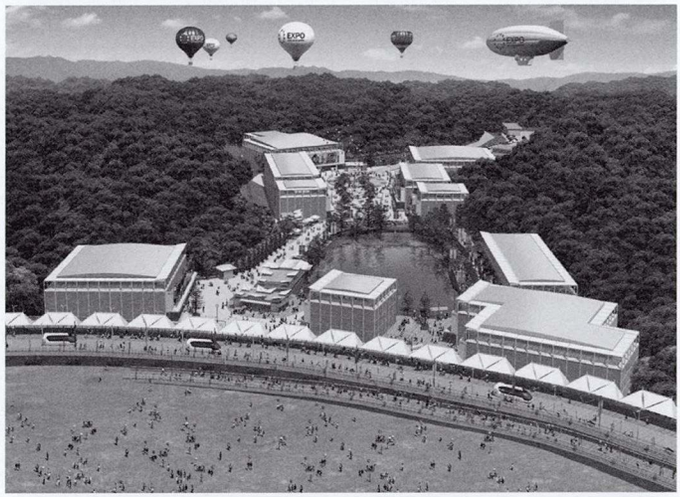
北ゲートに隣接して民間企業等による出展ゾーンを２ゾーン計画している。北ゲートをはさんで西側のゾーンには電気事業連合会、ＪＲ東海、日本自動車工業会、三菱愛知万博綜合委員会、東側のゾーンにはトヨタグループ、日立グループ、愛・地球博三井グループ出展者会、中日新聞プロデュース共同館組織委員会、㈳日本ガス協会が出展する。

④ゲート・エントランス

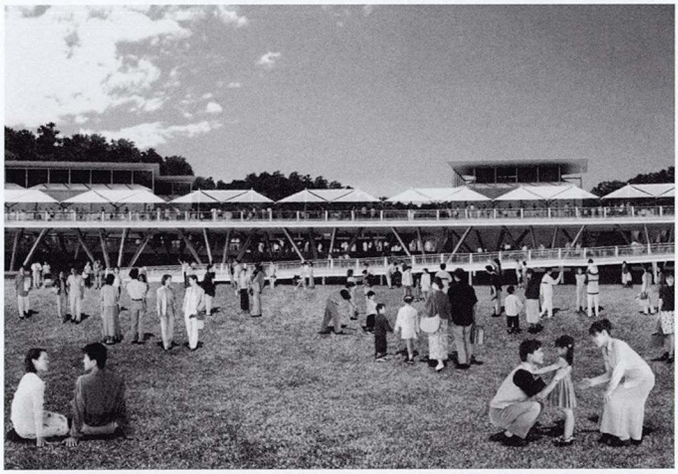
ゲート及びエントランスは、様々なサービス機能が複合した施設構成とする。北ゲートは主に東部丘陵線による来場者が利用するゲート、東ゲート及び西ゲートは主要駅や駐車場からのシャトルバスによる来場者が利用するゲートとなる。

⑤森林体感ゾーン

既存樹林を活用しつつ、季節の変化を見せる多様な自然と触れ合えるゾーンであり、自然環境への影響を抑えながら自然にかかわりの深い施設を配置する。



グローバル・コモン　イメージ





グローバル・ループ　イメージ

⑥遊びと参加ゾーン

既存施設の愛知県児童総合センター、愛知国際児童年記念館や屋外空間を活用して、子どもも大人も体験楽習できるゾーンとして構成する。

○瀬戸会場の会場計画

瀬戸会場は、起伏に富んだ敷地であるため、地形に沿った造成を行う必要がある。主要施設は裸地部分への配置を行い、既存地勢を読み取った計画として自然への影響を少なくしている。また、海上の森を将来、人と自然のかかわり合いを学び、体験することができる地域として創り上げていくための拠点とする視点から、それぞれの施設を計画する。

市民パビリオン

市民の参加・交流活動を支援する展示・催事施設で構成される協会のパビリオンである。

海上広場

「棚田」をモチーフにしたテラス状の円形広場で、国内外の観客や様々な市民の交流活動の場、催事の場となる。

日本政府館

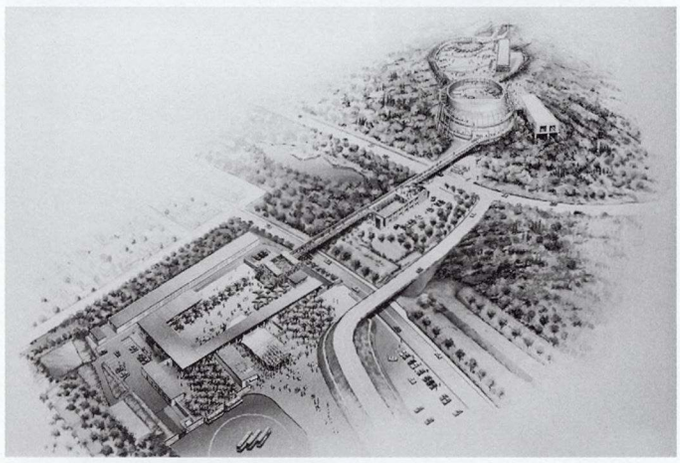
『自然と生きる、日本人の「知恵・技・こころ」』を出展テーマとし、日本人が古くから育んできた自然との良好な関係を作り維持する知恵を紹介する空間とする。

愛知県パビリオン

「森の鼓動と呼吸」を出展テーマに、森の生命活動や生命連鎖のありようを再発見する展示と、自然と共生する社会づくりをめざす県民の活動を紹介する空間とする。

里山遊歩ゾーン

海上広場から遊歩道を自然環境に配慮しながら整備し、この地が生んだ陶磁器の歴史を今に伝える古窯など里山の体感を通し、優れた環境共生の仕組みや先人の知恵・技術などを体験する空間構成とする。



瀬戸会場イメージ

あとがき

博覧会の会場は、長久手会場、瀬戸会場ともに既に造成工事は完了し、グローバル・ループや各パビリオンの姿が次第に明らかになりつつある。日本政府、愛知県、民間９団体のパビリオンは工事に着手しており、海外からの参加国や国際機関については秋以降にモジュール型パビリオン内の展示工事に入っていく予定となっている。今後、2005年３月25日の開催に向けて、21世紀最初の国際博覧会にふさわしい地球大交流の舞台が着々と整っていくこととなる。

（文責／藤本俊樹）

政府出展事業の計画概要

小池雅行

政府出展事業の課題

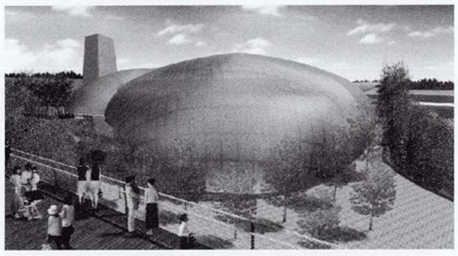
愛・地球博のメインテーマである「自然の叡智」並びに３つのサブテーマである「宇宙、生命と情報」「人生の“わざ”と知恵」「循環型社会」を受けて、愛・地球博のホスト館として政府出展事業では「人間社会と自然の新たな関係を創造する」を基本コンセプトに、これからの人間と自然との共生のあり方について、自然や環境に関わる知恵や技術、人間の意識や価値観を問い直し、21世紀における人間社会と自然との新たなる関係の創造を目指すことを掲げている。それを出展施設及び出展内容の政府出展事業全体で如何に体現するかが大きな課題と考えている。

政府館の構成及び概要

政府出展事業は、長久手会場日本政府館（仮称）と瀬戸会場日本政府館（仮称）の実際に建設される２つのリアルパビリオンと、それをあらゆる側面から補完する、インターネット上で展開するサイバー日本館（仮称）の３つの柱により構成されている。

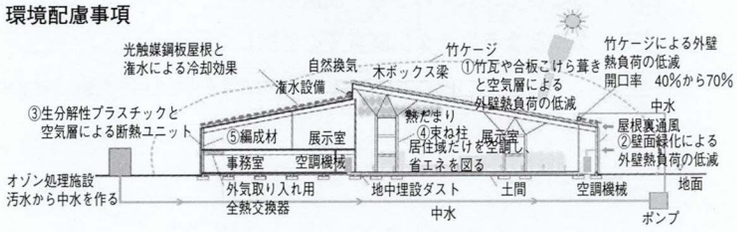
長久手会場日本政府館（仮称）は、新技術の導入、バイオマス建築及び環境負荷低減を考慮した知恵の建築を設計コンセプトに先進的な技術を建築に応用することにより、自然との共生を図る21世紀型の建築モデルを示すこととしている。

具体的には、新技術の導入としては、100％新エネルギー（太陽光発電、燃料電池等）による電力供給、光触媒鋼板屋根への潅水による冷却効果及びオゾン処理施設による汚水の中水利用を行うことを考えている。また、バイオマス建築としては、間伐材を利用した木造大空間建築、竹や合板の瓦屋根の利用及び生分解性プラスチックの壁面活用を行うことを考えている。さらに、環境負荷低減を考慮した知恵の建築としては、建物全体を竹で編んだかご状のケージで覆うことによる日射の低減、壁面緑化による熱負荷の低減及び居住域のみを空調する省エネルギー対応を検討している。

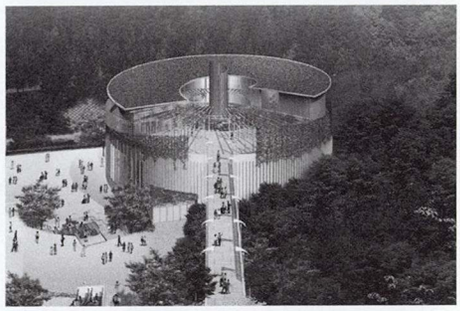


長久手会場日本政府館

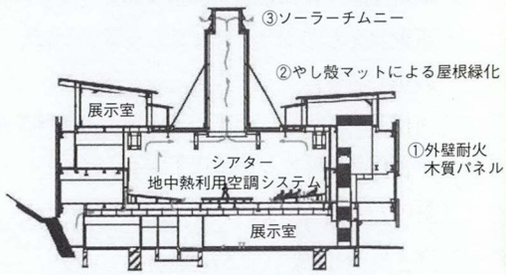
環境配慮事項



瀬戸会場日本政府館（仮称）は、自然と融合した建築、対比的な調和をつくる円形の外観及び環境変化の極小化を設計コンセプトに日本人が古くから育んできた、自然との良好な関係を作り維持する知恵を活かした建築モデルを示すこととしている。



瀬戸会場日本政府館



環境配慮事項

具体的には、自然と融合した建築としては、自然環境に調和する外壁耐火木質パネルの採用、在来種を用いた屋根緑化（やし殻マット）による熱負荷の低減、風の塔（ソーラーチムニー）による自然通風の確保及び自然エネルギー利用（外気冷房・夜間換気による蓄冷）による消費エネルギーの低減を行うことを考えている。また、対比的な調和をつくる円形の外観としては、中心性をもつ円形により、風景にフォーカスを与え、隣接する愛知県館（長方形）と対比的調和を形成しながら、場所を活かした景観を創造することを考えている。さらに、環境変化の極小化としては、４本の鉄骨組柱で建物を支え、自然の地形改変や土地への負荷を極力抑制することを考えている。

出展内容の概要

長久手会場日本政府館（仮称）は政府出展事業のメインパビリオンとして、「日本の経験、20世紀の豊かさから21世紀の豊かさへ」をテーマにしている。ゾーン１からゾーン３の展開構成により、現在地球上に起こりつつある環境をはじめとする諸課題を人類への警鐘として示すとともに、20世紀後半に日本が直面してきた様々な経験についての検証を行う。そして、その経験を踏まえて21世紀の諸課題を克服していくため、未来に向けて最先端の科学技術の活用や新たな生活様式、社会システムなどを提案することとしている。

ゾーンごとの具体的展示構成は次のとおりである。

○ゾーン１

現在人類が直面している「自然との関わり」や地球規模の諸問題について、その広がり、緊急性、深刻さを視覚的・感覚的に表現し、

問題を提起する。

○ゾーン２

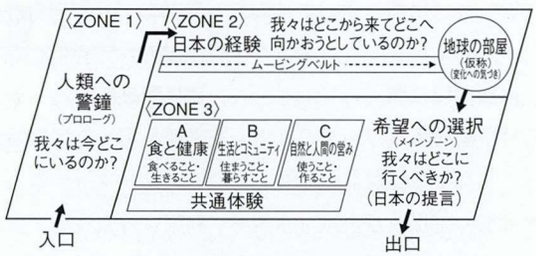
来館者にとって最も身近な20世紀後半に日本が達成してきた豊かさや環境問題などの諸問題とそれを克服する過程を振り返るとともに、新たに発生してきた地球規模の様々な課題を問いかける。

○地球の部屋（仮称）（世界初の360度全天球型映像システム）

現在の地球の姿を直径12.7ｍの地球に模した球体の内部スクリーンにより地球環境の変化を映像、音響等の演出によって印象深く表現するとともに、地球規模で始まっている環境への取り組みを提示する。

○ゾーン３

日本の「提言」を生活者の関心・興味を踏まえて３つの側面から未来のシナリオとして提案する。



長久手会場政府館展開構成図

瀬戸会場日本政府館（仮称）は「自然と生きる日本人の智恵・技・こころ」をテーマにしている。１階から４階の展開構成により日本人が古くから育んできた災害の防止、衛生の管理、快適な生活、資源の有効利用などの様々な面での自然との折り合いや、日常生活に心の豊かさを発見する日本人の「知恵・技・こころ」に着目し、日本人の「知恵・技・こころ」が、科学や技術のみでは解決することができない21世紀の諸課題に対し、その解決の糸口を提示するとともに、新たな自然との共生のあり方、生活の豊かさを作り出すことが可能であることを示すこととしている。

各階ごとの具体的展示構成は次のとおりである。

○１階

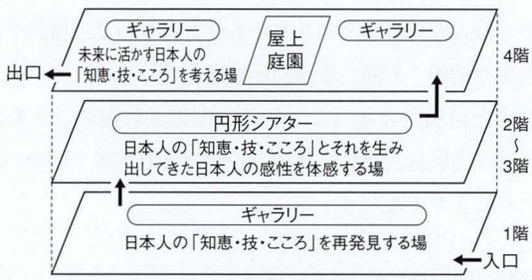
日本人の生活の周りにある道具や技術、生活様式を素材に、日本人の「知恵・技・こころ」の原点を提示する。

○２階～３階

日本人の根源的感性を呼び覚ます仕掛けとして、来館者の想像も巻き込み、共感・感動できる円形シアターを設定し、パフォーマンス、映像、音楽が一体となった演劇を展開する。自然と共生するための日本人の「知恵・技・こころ」、さらにはその背景にある日本人の自然観や感性を再発見、再認識するとともに、その両者の関係性を示す。

○４階

日本人の「知恵・技・こころ」が現在の、そして将来の諸課題の克服に役立つことを提示する。



瀬戸会場政府館展開構成図

サイバー日本館（仮称）では、「人の交流、知恵の交流」をテーマに、２つのリアルパビリオンへの興味の喚起と事前学習の契機と提供することを考えている。また、来館者自身の「参加・体験」を可能とするプログラムを通じて、来館者の関心・アイデアなどを政府館の展示・催事に反映したり、来館者が関心のあるテーマ、展示について知識・関心の深化を促す役割を担う。

政府出展事業の意図

愛・地球博のメインテーマである「自然の叡智」は、自然や環境あるいは生命等を扱い、来場者の意志や思考をターゲットに展開するものであり、今までの博覧会で扱ってきた科学や技術といった解りやすくメッセージしやすいテーマではなく、人の思考や意識に訴えることを必要とする。

政府出展事業では、自然と人間との関わりを象徴する記号として、五音階のキーサンドを設定した。これは“空・風・火・水・地”という地球の五元素を意味し、音をＥarthという言葉から導き出したものである。現在、政府出展事業の総合監督で世界的ジャズ・サックス奏者である渡辺貞夫氏により、その五音階をキーサンドに政府出展事業のメッセージソングを制作中であり、エンタテイメント性の高い展示空間や演出と連動させ、「楽しくて、ためになる」政府館にすることで、人々の思考・価値観・ライフスタイルの転換を促すきっかけとなるような出展事業を目指している。

（こいけ　まさゆき／経済産業省商務流通グループ博覧会推進室）

愛知県施設の計画概要と設計意図

浦野設計／第一工房

長久手会場パビリオン
（中部広域交流館併設）
～お祭りを演出する場として～

ホスト県のパビリオンとして〈祭りの空間〉

自然の叡智、地球大交流という壮大なテーマの博覧会にあって、ホスト県である愛知県は長久手会場では、世界各国日本各地から訪れる人々をあたたかく迎え、大いに楽しみながら環境について考える場を用意することとした。

県内の市町村はもちろん、県内各団体や友好提携自治体の人々が185日間の会期の初めから終わりまでさまざまな趣向で盛り上げる祭りの場とする。

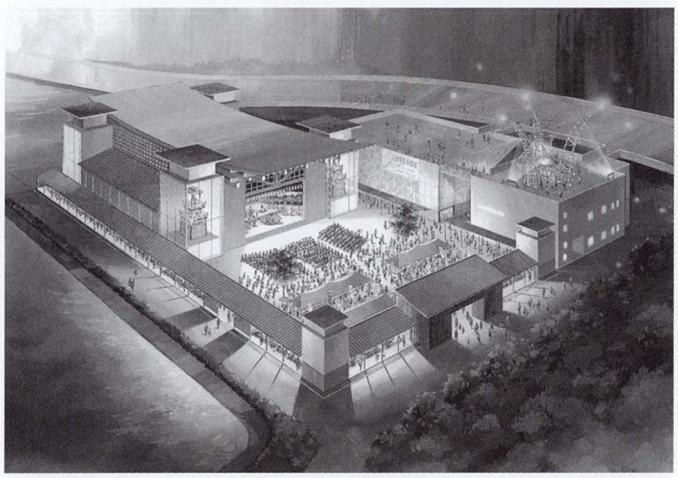
二つのパビリオンと祭りの広場

愛知県サイトは県の出展施設、中部九県の出展施設と県民参加の場であるおまつり広場で構成される。この二つのパビリオンは同じ敷地にありながら、それぞれが別のプロデューサーによる独立した展示プログラムを持つ出展施設である。それぞれの個性を生かしながら連続感ある空間に仕上げるために、おまつり広場を触媒的な空間として利用している。

祭りの多義性

祭りの空間は長い伝統のなかでさまざまな意味性を吸収しできあがった、聖俗混合の多様性を包含する空間である。したがって、ここでは今までのパビリオンにありがちなシンプルでストレートなメッセージの表現ではなく、祭りの多義性を織り込むことをめざした。

風水の考えを取り入れた配置計画から寓意に満ちた細部の意匠までさまざまな仕掛けを凝らす。



長久手パビリオン

あいち・おまつり広場

あいち・おまつり広場は八十八間（約160ｍ）の「愛知八十八回廊」に囲まれた空間で、朱塗りの和舞台と客席さらに観光PRや特産品、伝統工芸品の販売を行う催事スペースで構成される百尺角の広場である。中央には33尺四方の瓦文様を置き愛知県サイトの中で最も象徴的な場所とする。

取り囲む回廊は三河の杉と三州の瓦で造り、長い床机を置いて入場者がくつろぎながら待てる場とする。

山車（だし）の象徴としての愛知県館

このサイトの主人公である愛知県館はかえで池に面して建ち、山車に支えられた愛知の祭りを象徴する建物とする。お祭り広場に面した両端にはガラスボックスを置き、実物の山車を交替で展示する予定である。

ガラスボックスの間の和舞台上部には、幅十一間・出七間の大庇が掛かり客席をゆったりと覆う。庇は伝統的な持ち送りの構造とし、軒下空間を大切にしてきた和風建築の力強さを表現する。軒を支える大梁は杉材を束ねた意匠とし会期後はリユースが可能である。

また愛知県館の外壁は三河杉による板倉造りとする。ビスや釘を極力用いない造りなのでこちらもリユースが容易である。

建物の側面は提灯で飾る予定である。日が西に傾く頃、数百個の提灯がゆったりと点り、風に揺らぐ灯明が浮き立つような祭りの夜を盛り上げる。

和紙の外壁　中部広域交流館

もうひとつのパビリオンである中部広域交流館は、愛知県館とグローバル・ループの間に位置する。西ゲートゾーンから正面に見える顔となる。

ここでは外装材として和紙を使う。和紙は中部九県の文化を横断する素材である。

風土によって微妙に異なる風合いを生かし、蒟蒻糊や柿渋といった伝統的な手法によって薄く繊細な和紙を防水し、強化する。

光を透す和紙は夜間には巨大な行灯と化し、愛知県館の提灯と呼応しながら夜のサイトを彩る。

日本庭園の展望の場として

愛知県サイトは「かえで池」をはさんで東に広がる日本庭園の入り口にあたる。

中部広域交流館等の屋上をグローバル・ループと繋げ、木製デッキの広場とすることでこの風景を充分楽しめる展望の場とする。

（文責／岡部六弥　株式会社浦野設計計画部部長）

瀬戸会場パビリオン
～自然と人がつくり出す場として～

平成14年に、「海上地区愛知県館（仮称）基本設計プロポーザル」が行われた。我々は敷地のある海上の森を幾度か歩き、ひとつの方向性を見い出した。

敷地は海上の森の入口に位置しているが、この地域の自然生態は微妙な均衡の上に成り立っている。この地で人が行う行為は、多かれ少なかれこの自然の生態系に何等かの変化を及ぼすことになる。我々はこの事を十分に認識し、自然と人が作り出すものとの相関をどのようにすべきかというところに発想の基点をおくこととした。

3000㎡のパビリオンは、博覧会後1500㎡に縮少され恒久施設となり、「海上の森」の拠点施設となることが決められていた。このため博覧会後のこの施設の有り様が重要であると思われた。それは自己を主張するものではなく、自然に抱かれ、その一部と化した佇まいである。

プロポーザル時は、すり鉢状の敷地の平坦地を抱きかかえるようなE字形平面であったが、敷地内に政府館が建てられることになり、S字形平面とし、北側にコンパクトにまとめることになった。形状の変化はあったものの基本理念に変わりはない。

敷地は高低差約30mの東斜面で、南北と西が山、東に吉田川が流れており、中央部に矮小な平坦地がある。建物の配置は、土地との融合と調和を実現するために、北側寄りの傾斜にあわせた雛壇状の三層構成とし、半ば埋もれるような配置とした。北東の傾斜部は不安定で崩落の危険があるため、建物本体による崖地の修復と保全を図った。周囲の地面と連続させた屋上植栽の表土は、この地の植生が自然に復原するように根切時の表土や砂利を再利用する。また異種混入を防ぐことにより形態的にも植生分布上も土地に馴染ませることを意図している。

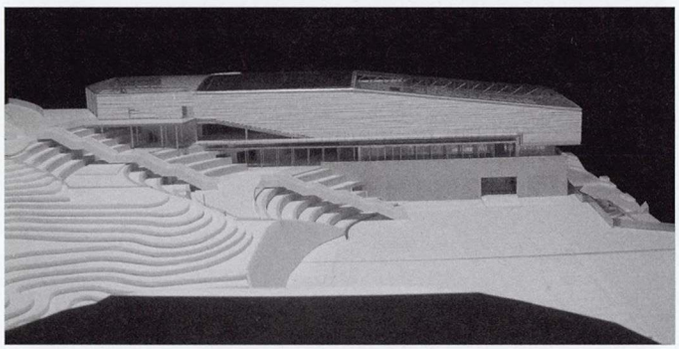
建物の主な外部仕上として、仮設部分を県産の木材、恒久部分を県産の陶磁器タイルとしたのは、地産地消、3R（リデュース、リユース、リサイクル）を考慮した結果である。外構には石をつめたメッシュ籠を用いることで崖地や斜面対策を講じると共に、時間を経て自然に溶け込み棚田状の景観を形成することを期待している。これは明治38年、瀬戸市内において施工されたホフマン工事と呼ばれる治山施設に類似したものである。

博覧会時には建物に貫入する棚田状部分に水が湛えられ、2m間隔に配された水路によって水が流れ落ちる。会場のざわめきの中で水音が響き、水の上を流れた空気が涼風となって建物内部に流れ込む仕掛けである。

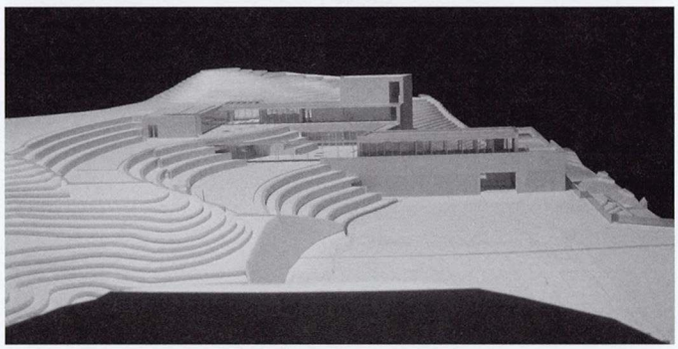
1500㎡の仮設部分は、恒久部分の上部に大屋根をかけ、屋上をインテリア化して利用する計画である。この大屋根は、上弦、下弦に異形鉄筋、束材に鋼管を用いた立体トラスによって約1500㎡、最大12mスパンの空間を覆っている。トラス上弦は円弧、下弦は曲げモーメントに対して決定した形状を、曲げ加工することなく曲面が構成でき、異形鉄筋自体の形状を利用したジョイントを用いている。これらの部材は一度に大量の輸送ができ、解体後の再利用も可能である。

博覧会時には西の尾根がエントランスとなり、建物内に設けられた斜路を下りながら展示空間を体験する。3階のエントランスロビーでは、危険にさらされた絶滅危惧種の紹介から始まり、2階へと続くシアターを経て、スロープを歩きながら膜天井からの光を充たした吹抜の展示室を1階へと下りていく。吹抜にはコナラが移植される予定である。博覧会後ここは中庭となり、移植木はこの施設のシンボルツリーとなるであろう。吹抜の傍らには胎動する繭型の展示室が設置される。

祝祭性の高い博覧会の会期後に、今回の計画がこの地に始めて自然と人間との共生を可能とするような施設であることを願っている。



瀬戸パビリオン会期中



瀬戸パビリオン会期後

名古屋市パビリオン

安田裕樹

2005年日本国際博覧会、愛・地球博の開催まで1年あまりとなった。名古屋市では、愛・地球博を代表するホストシティとして、また、名古屋が世界に向けて情報発信する絶好の機会として、独自に出展参加することとし、準備を進めているところである。いよいよこれから現地でのパビリオンの建設に入るなど、準備作業も佳境を迎えようとしている。

出展参加の基本構想・基本計画

本市では、博覧会への出展参加に当たり、名古屋のローカリティなどの枠にかかわることなく、全国の色々な分野の第一線で活躍している方々17名をメンバーに懇談会を設置し、2002年3月にテーマを「日本のこころ、地球のいのち」とする出展参加の基本理念を提言いただいた。これを受けて、

①人々の心を揺さぶるような「驚き」とダイナミックな「感動」を生みだす。

②ぬくもりのあるふれあいと安らぎを与え、幸運な一瞬を経験できるようにする。

③知的好奇心を満足させ、人類の進歩と将来の展望を示す。

④豊かな物語性をもって人々の記憶に深く刻み、永く後世に伝える。

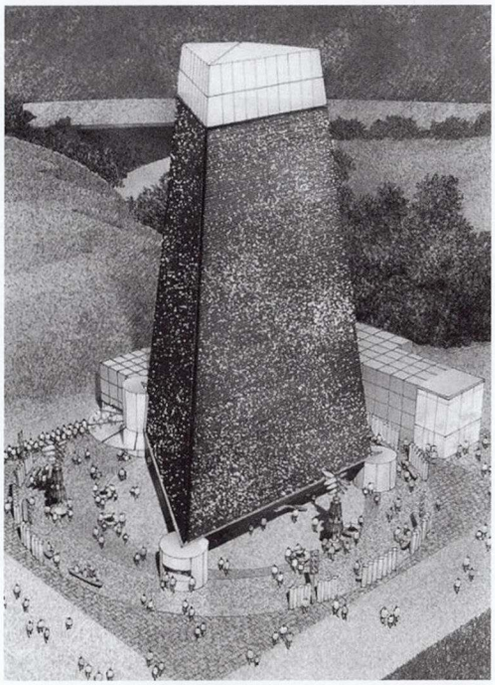
を展開コンセプトとした出展参加の基本構想をまとめた。また、懇談会のメンバーから、歌手でその他の芸術活動にも幅広く活躍されている藤井フミヤ氏をパビリオンの総合プロデューサーに推薦いただき、これを受けて本市から正式に依頼をし、以降、プロデュースをお願いしているところである。

総合プロデューサーのもと、パビリオンの具体的な内容について検討を進め、光・風・水の自然を感じながら現代人の忘れかけているスローライフを提案するパビリオンとして、光が奏でる“世界最大の万華鏡”と市民参加で作られる“ライティングウォール（切り絵灯篭）”、風が奏でる“風の音具”、水が奏でる“アクアウォール（壁泉）”での演出を基本計画として打ち出した。

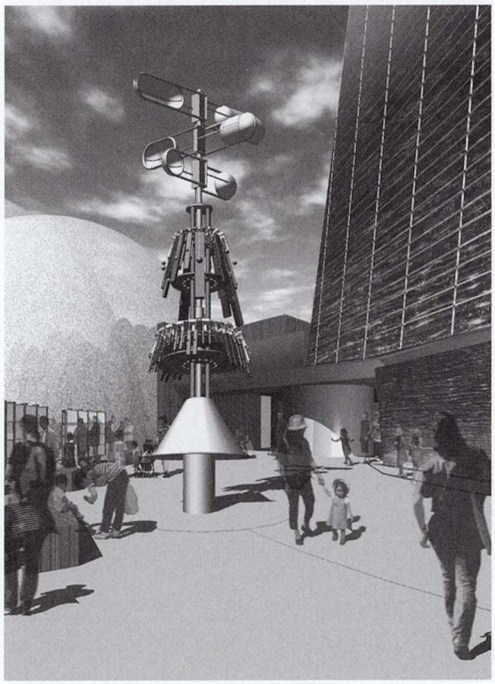
本市のパビリオンは、映像、展示等による学習型の展示内容ではなく、言葉や文字、映像などの説明によらず直接人の感性に訴えるようなものとした。学習型のパビリオンはその意義により評価を受けることができる中で、本市のパビリオンは、行政機関としては大きなチャレンジである。ただ、結果的には長久手会場において政府館、愛知県パビリオンとともに日本ゾーンの一翼を成し、展示施設の役割分担が行われ、多様な展示が展開されるだろうと思っている。

名古屋市パビリオンの内容

本市のパビリオンは、「自然の叡智」をテーマとする万博のパビリオンとして、ＣＧなどの人工的な造形の展示とせず、できる限りアナログにこだわり、また、自然の光や力を用いたパビリオンとして計画した。夜間以外は自然光を用い瞬間ごとに姿を変える世界最大の万華鏡を中心に、風の強さによって奏で方を変える音具、次々と変化する水の流れを見せるアクアウォールなどにより、来場者の心を癒し、“ゆとり”と“優しさ”を生み出すことを目指している。



名古屋市館（イメージ）



風の音具（イメージ）

（1）万華鏡

万華鏡は名古屋市パビリオンの中心となる展示施設である。高さ47m、三角形の底辺1辺の長さが26m、上辺の1辺の長さが15mの三角錐台の形をしている。現在、ギネスブックに登録されている世界最大とされている万華鏡でも長さと径が数m程度と聞いており、そのスケールは型破りと言えるだろう。

万華鏡の観覧スペースは2階に相当するところにあり、滞留スペースとなっているピロティから階段で上がり、暗い廊下を20mほど歩いて入る。すると、上部約35mの位置に、色や模様が変化する、直径約40mの球体の像が見える。像は、塔の天井近くに設置した、着色オイルなどを活用した装置によって構成する。電子的につくられた模様ではなく、自然・偶然に生み出される模様である。像が球体となるのは、鏡の面が上部に行くほど絞られた形態となっているためである。なお、観覧スペースは1辺が約17m、約120㎡の正三角形の部屋で、一度に最大150人程度の収容が可能である。

観覧時間は原則的に自由であり、混雑している時には難しいが、のんびりと夕日を見るような贅沢な時間を過ごしていただければと考えている。

（2）風の音具

音具は風を受けて独自の音階を奏でる楽器である。高さ8mという大きなもので、万華鏡の塔の周りに、3基設置する計画である。

音具は上部の風を受ける部分と、その下部の音を発する部分から構成される。風による回転力でバチを動かし、木琴を叩く仕組みになっている。風の無い時には、直接人が回すことによって音を奏でるので、多くの人が回して楽しむものと期待している。

なお、この音具の音づくりは、イギリス在住の音楽プロデューサーの屋敷豪太氏にお願いしている。

（3）アクアウォール（壁泉）

万華鏡の塔の外壁は、凹凸を施した押出成形セメント板で構成した高さ40mほどを落下する巨大な壁泉としている。凹凸を辿る水の波形や泡が光にきらめき、都会では忘れられているせせらぎなどの水の味わいを再現したいと考えている。

（4）ライティングウォール（切り絵灯篭）

ライティングウォールは、万華鏡の塔の周りを囲む光の灯篭である。これは、このパビリオンにおける市民参加のプログラムと位置づけており、市民が制作した切り絵をはめ込んで制作する。高さ約2m、1辺が50㎝の四角柱の1面あたりに4つの切り絵を装着し、合計で100本以上の灯篭を設置する予定である。

それぞれに個性的な切り絵模様の灯篭を楽しんでいただくとともに、市民がパビリオンに愛着を抱いていただける仕掛けとして期待している。

＊

名古屋市パビリオンはこれまでの博覧会のパビリオンの枠におさまらないものであり、試作・模型実験等に基づき描かれた図面により制作していくが、制作しながら実験し、調整しながら完成させていくものである。最終的にどれだけの魅力が出せるのか、精一杯頑張っていくので、是非、会場に足を運んで、ご覧いただきたい。

（やすだ　ひろき／名古屋市総務局国際博覧会推進室　主査）

魅力が満載民間パビリオンゾーン

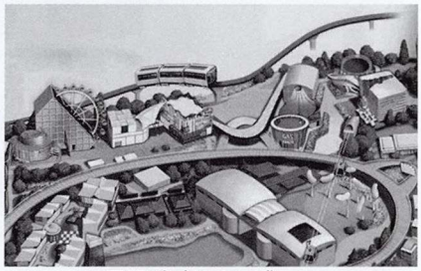
2005年日本国際博覧会協会出典グループ

平成17年3月・・・

『平成17年春、暖かい春の朝日が降り注ぐなか、世界で初めて実用化されたばかりの常電導磁気浮上式リニアモーターカーは、万博会場駅に停車した。駅舎から出てくる乗客たちは、たった今、降りたリニアモーターカーの浮上走行の感想を語り合いながら、併設された「2005年日本国際博覧会（愛・地球博）」の長久手会場北ゲートを潜っていく。乗客たちが真っ先に目指すのは、北ゲートに隣接するように左右に展開した民間パビリオンゾーン１と２である。

愛・地球博は、平成17年３月から９月までの185日間にわたって開催される今世紀初の国際博覧会である。“自然の叡智”をテーマとし、これまでに人類が獲得してきた経験と知識と知恵のすべてを傾けて、21世紀の人類が直面する課題の解決の方向性と地球や人類の将来の姿を見出す場である。130を超える参加の国・国際機関に伍して、わが国を代表する世界的企業各社や団体が各パビリオンを展開している・・・』

愛・地球博の開幕まであと１年と迫った平成16年３月、開催準備業務に終われる手を休めて、開催時の会場の光景を想像してみた。



民間パビリオンゾーン

出　展　者	パビリオン名	出展テーマ等
民間パビリオンゾーン１		
電気事業連合会	ワンダーサーカス 電力館	Powerful Imagination ～想像力は豊かな未来を創る活力～
東海旅客鉄道株式会社	ＪＲ東海リニア館	“超電導”リニアという日本先駆の先端技術を紹介し、次世代鉄道実現に向けての跳躍台
社団法人日本自動車工業会	ワンダーホイール 展・覧・車	人・クルマ・地球▶未来へ
三菱愛知万博綜合委員	三菱未来館@ earth もしも月がなかったら	「いまこの地球に生きている不思議、その奇跡へのまなざし」（宇宙的視野から見た地球環境の維持）
民間パビリオンゾーン２		
トヨタ自動車株式会社	トヨタグループ館（仮称）	21世紀の『モビリティの夢、楽しさ、感動』
株式会社 日立製作所	Nature Contact 日立グループ館　ネットワーク・エンターテインメント・ライド	Nature Contact ～日立のＩＴで蘇る希少動物たちとのふれあい
愛・地球博 三井グループ出展者会	三井・東芝館	『地球　生命（いのち）の輝き』～新しい地球を次世代へ～
中日新聞プロデュース共同館組織委員会※1	中日新聞プロデュース共同館（仮称）	21世紀のちから
社団法人 日本ガス協会	ガスパビリオン 炎のマジックシアター	ゆめエナジー　人へ、地球へ

※１）出展企業：シヤチハタ、積水ハウス、日本ガイシ、ブラザー工業、中部日本放送、東海テレビ放送、中日新聞社

来年３月から半年間、愛・地球博を訪れる来場者の大部分が目当てに訪れるであろう、愛・地球博の人気ゾーン、民間パビリオンゾーンの各出展者の魅力について紹介する。

環境を考慮したパビリオンの建設・運営

“自然の叡智”をテーマとする愛・地球博では、出展内容はもちろんのこと、各出展者が環境を第一に考慮して仮設建築物であるパビリオンの設計・建築・解体までを一体的にとらえ、循環型社会の範となる整備計画を立案している。その主な内容は以下のとおりである。

①３Ｒなどを考慮した資材活用

・徹底した３Ｒ（Reduce；最終処分量の最少化、Reuse；再使用、Recycle；再資源化）による建設

・企業活動から発生する廃棄物をリサイクルしたエコ素材の活用

・岩、ペットボトル、植物などの素材を活用した環境を考えさせる壁面の仕上げ

②工法の工夫による環境負荷低減

・現場工事量縮減、建設解体の簡素化・工事量縮減、コンクリート廃材発生低減

③エネルギー利用による環境負荷低減

・外壁、屋根の断熱強化、屋上緑化、雨水利用等による熱負荷抑制による空調負荷低減

・高効率エネルギーシステム、局所冷房の推進、アクア・ウォールの採用

④新エネルギー等自然素材の活用による環境負荷低減

・太陽光発電、風力発電、燃料電池発電による新エネルギーの利活用

・自然通風、自然採光の採用

⑤オオタカ等野生動植物への配慮

・オオタカの衝突防止を配慮した設計・運営、野生動物に配慮した外装照明

・植生、植物への影響を最小限に食い止める建設・運営

⑥CO_2排出削減促進のための取り組み

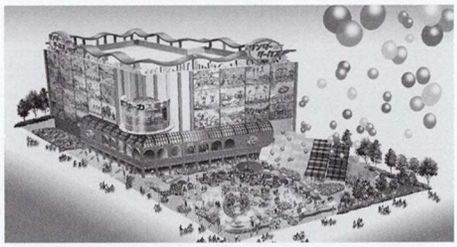
・パビリオン建設・運営時に排出される温室効果ガスを補う量の排出削減量（熱帯等の森林保護プログラム）の購入

多彩な出展内容

〈ワンダーサーカス 電力館〉

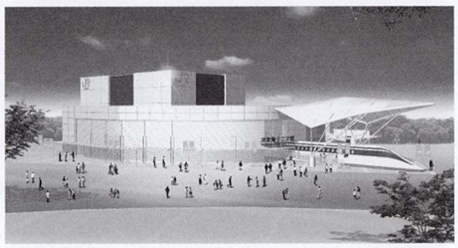
全国の電力会社10社参加の電気事業連合会出展のパビリオンは、未来を担う多くの子供たちとの交流とその想像力を全身で世界に向けて発信する。子供たちによる、人と自然への優しさを表現した

各々縦５m、横７mの30点の絵が外壁を飾る。



総合アドバイザー兼音楽プロデューサーである作曲家・三枝成彰氏により、「科学技術」「自然との共生」「人の心」をベースに「地球と人と夢、この素晴らしい世界」を表現した「銀河の駅」等８つのシーンを、４両編成の電車型ライドで全長約300ｍの軌道を約10分で巡る。

〈ＪＲ東海リニア館〉



平成15年12月に有人走行の世界最速時速581kmを記録した超電導リニアモーターカーの実物車両が、山梨県内のリニア実験線から愛・地球博会場に運びこまれ、車両内部も公開展示される。

パビリオン内の映像シアターでは、最新映像を駆使した大画面映像で山梨リニア実験線を舞台とする様々な走行試験が紹介され、時速500km超の次世代鉄道の魅力と実用化への期待感を一層高めてくれる。

〈ワンダーホイール 展・覧・車〉



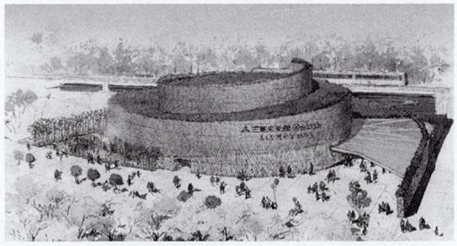
㈳日本自動車工業会が出展する地上約50ｍにも達する「展・覧・車」は会場の内外のランドマークとなるであろう。

「展示」「博覧」「観覧車」「クルマ（車）」を組み合わせた造語「展・覧・車」は、パビリオン内部の巨大演出空間を上昇する４人乗りキャビンで展開される様々なアトラクションによる驚きと、パビリオンを飛び出すと前方の視界が開け地上50ｍの天空から愛・地球博会場を眺望する爽快感を提供してくれる。

パビリオンとして、50ｍ級の大観覧車を演出装置として使うのは国際博覧会史上初。

〈三菱未来館@earthもしも月がなかったら〉

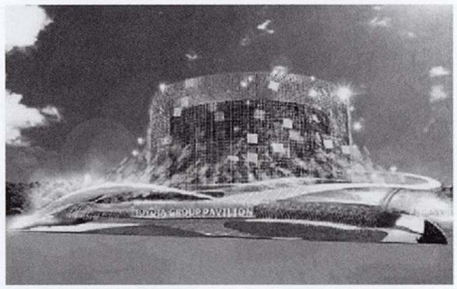
１枚の壁をグルグル巻くことにより無限に続いていくイメージを表し、空間が連続していくユニークなデザインが特徴である三菱グループ32社が参加するパビリオンである。



パビリオン内では、ロボットアテンダント「wakamaru」を多数配置起用し、来館者がわくわくするような、ロボットによる出迎え・案内体制が構築される。

映像、鏡、音響を複合した未体験映像空間（ＩＦＸシアター）では、米国の天体物理学者・ニール・Ｆ・カミンズの著書「もしも月がなかったら」をベースに、宇宙的視野から見た地球環境の維持の大切さを訴える。

〈トヨタグループ館（仮称）〉



トヨタ自動車㈱などトヨタグループ17社の参加により、愛・地球博のテーマ「自然の叡智」の観点から『地球と共生するモビリティのあり方』、コンセプトである「地球大交流」から『地球規模で移動する喜びや夢、モビリティの魅力』を提供する。

パビリオンの基本設計は、建築家ユニット“みかんぐみ”が担当。

総合演出は、壮大なスケールでのファンタジックなスペクタクル演出を得意とするイヴ・ペパン氏（仏）を起用。未来の乗り物「i-unit（アイ・ユニット）」を始めとする、様々な技術や未来ビークルが存在する社会をエンターテイメント性豊かなモビリティ・パフォーマンス・ショーで紹介する。

〈Nature Contact 日立グループ館 ネットワーク・エンターテインメント・ライド〉

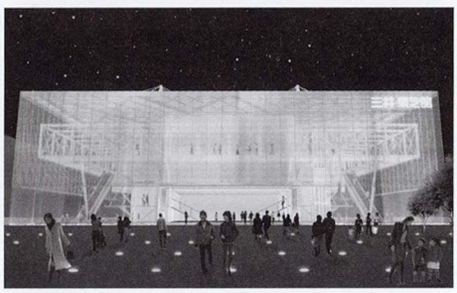


敷地空間を最大限に活用した立方体の一部を削り、渓谷を流れる川をイメージさせる人間・文明・自然の調和した世界観を表現する外観を有する。

いつでも・どこでも・だれもが利用できるユビキタス社会の主要な手段である高度情報通信技術を活用して、映像上で蘇った絶滅の恐れのある希少動物とのふれあい体験ゾーンを創出する。メインショーでは、非接触ＩＣチップを組み込んだ愛・地球博入場券を活用

して、来館者一人ひとりに合わせた数々の双方向性を有する演出も施すことにより、環境の重要性とＩＴ社会の利便性の双方を体感できる。

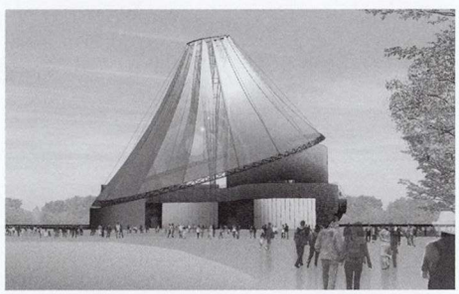
〈三井・東芝館〉



建築家・大江匡氏設計による16ｍの高さからパビリオンのルーバーにつたわる水と、4.5ｍの高さからの滝のようなアクア・ウォールによる清涼感あるパビリオン・イメージ。

出展テーマは、地球そのものが、多くの生き物の微妙なバランスの上に成り立つ一つの生命体であるとして、来館者一人ひとりが、地球が健康で豊かに暮らせる道を探ることの必要性を感じるよう、ストーリー展開仕立ての演出により訴える。最初は20人ずつの小シアターから、ストーリーの経過とともに、最後は240の来館者が一堂に会する大シアターに変化する機構と来館者自身がそのままシアター画面に登場する世界初のシステムによるシアターを実現する。三井グループ51社が参加。

〈中日新聞プロデュース共同館（仮称）〉

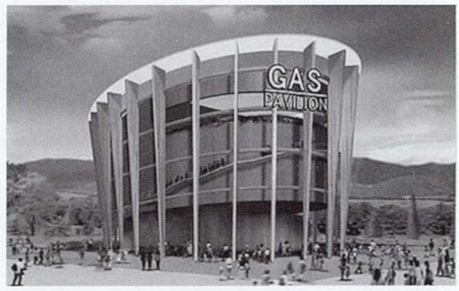


７社の共同出展により１つのテーマゾーンと３つのオリジナルゾーンを有し、４つのゾーンを一体感あるものにする日本の代表風景の富士山をイメージさせる大屋根で覆ったパビリオン。

積水ハウス・中部日本放送・東海テレビ放送・中日新聞社の４社で構成するテーマゾーンでは、約600㎡の世界最大級の床面映像も駆使し、壁面や頭上も含めて、毎日毎回異なるシーンの組み合わせによる映像が広がり、音響との組み合わせで人間の感覚に訴える体感型映像空間が出現する。総合演出は、世界的なアニメ・映像監督の押井守氏が担当する。

オリジナルゾーンでは、シヤチハタによるエンターテイメント性のあるワークショップ空間、日本ガイシによる“水”をテーマにした子供たちの自然や科学に対する好奇心を喚起する立体映像とライブショーの融合シアター、ブラザー工業による想像力を膨らませる参加体験型の展示が実施される。

〈ガスパビリオン 炎のマジックシアター〉



㈳日本ガス協会が出展するリズミカルに楕円を描いて林立する列柱と外周に沿って伸びる緩やかな階段が特徴のパビリオン。パビリオン外壁への木材利用や屋上緑化など、愛・地球博会場のメイン動線である木製の幅21ｍの空中回廊「グローバルループ」や周辺の緑との一体感を醸し出す。

また、１階には広いピロティを設け、雨天時や酷暑期でも来場者が過ごせる“やさしい”空間が提供される。

展示では、「天然ガス」の多様性、可能性、炎をテーマにしたシアター形式で、来館者に驚きや楽しさを交えながら分かりやすく演出する。ガスエネルギー資源の有効活用に関する展示では、家庭用燃料電池や、“燃える氷”メタンハイドレードなども紹介してエネルギー資源に対する理解を深める展示を実施する。

愛・地球博は「環境万博」「IT万博」

以上、民間パビリオンゾーンの各出展者の魅力について記したが、これらはあくまでも“一部”である。今も各出展者の内部では、連日、慎重な検討、研究がなされ、部外の者では知る術もない驚くべき新しい技術の展示内容が、愛・地球博の開幕が近づくにつれ、日々公表されていくことになるであろう。それらの出展内容を早く知りたい、間近で見たいと熱望するのは、博覧会協会職員である私一人では無いはずである。

会期中に1500万人の方々をお迎えする愛・地球博は、「環境万博」であると同時に、「ＩＴ万博」でもある。魅力あるパビリオンが林立する会場内で、来場者の方々にスムーズかつ十分にご覧いただくことが博覧会協会の務めである。博覧会協会では、ＩＣチップが組み込まれた入場券を活用し、事前に来場予定日のパビリオンの入場予約を行ったり、来場当日に会場内でお目当てのパビリオンの入場予約が可能となる予約サービスの構築を進め、来場者の方々に質量ともに満足いただきたいと考えている。

大阪万博以来35年振りに我が国で開催される愛・地球博。この愛・地球博を契機にどのような新しい技術が我々の生活を豊かに、便利にしてくれるのか、また、会場でのどのような出会いやふれあいが感動を沸き起こしてくれるのか、今から待ち遠しいものである。

（文責／桐山敏通）

新しい時代における市民参加へのチャレンジ

2005年日本国際博覧会協会市民参加促進グループ

市民参加は環境問題から始まった

21世紀最初の国際博覧会となる愛・地球博（愛知万博）は、6,000万人を超える来場者を集めた大阪万博について日本で行われる2回目の大型国際博覧会である。しかし、この国際博覧会は準備段階から多くの議論を呼び起こした。愛・地球博はその当初計画について、「自然の叡智」というテーマの具現化と会場自体の自然環境の保全策が両立しがたい矛盾点を内包しているとの批判があった。この点が議論を呼び、多くの市民や団体がその議論に関わってきた。議論の中心となったのが、いわゆる「海上の森」といわれる瀬戸市にある会場であった。そして、問題点を明確に指摘したのが、貴重種「オオタカ」の出現である。

環境問題で混迷を深めた愛・地球博の扉を開いたのは、「愛知万博検討会議」であった。この会議は2005年日本国際博覧会協会と、愛知県、経済産業省をはじめとする主催者側と地元関係者、自然保護団体、有識者等の市民たちが一つのテーブルについて会場計画を議論・検討したものである。市民的視点から見れば、多様な市民の参加と合意により、当初海上の森540haの計画案から、現在の瀬戸会場（海上地区）15ha＋長久手会場158haと計画が変更され、自然破壊を回避し、開催を可能にしたということができるだろう。まさに、一度は開催が危ぶまれた段階から、会場の計画自体を変更させることになったのは、こういった市民の力が集結したことは明らかであり、このプロセスが後々に大きな市民参加のムーブメントにつなげていくことになる。

ＩＴが加速度的に普及し、設備さえあれば誰でもいつでも情報が入手できる時代となったため、１つの会場に大多数の来場者を迎える博覧会の果たす役割は変化してきたであろうし、また今後も変わり続けていくだろう。去る1994年、フランスのパリに本部を置く「ＢＩＥ」（博覧会国際事務局）の第115回総会において、今後の国際博覧会は、それまでの開発型の産業博でなく、その時代における地球的課題の解決に取り組む内容とすべきとの方向性が示された。

このような経緯から今回の愛・地球博は、過去の博覧会とは大きく違う新たな柱ができあがった。それは、「市民」の参加である。国際博覧会は今までに、その時代を動かすエンジンを紹介する場である。19世紀から20世紀前半には「国家」を見せたために、「万国博覧会」と呼ばれ、20世紀後半には「産業」と「経済」を見せる「産業博」の色合いを強めてきた。そして始まったばかりの21世紀、今回の愛・地球博では３つめのエンジンとなる「市民」のパワーを見せていこうというものである。

市民が主役の時代へ

20世紀最後の国際博覧会となった2000年のドイツ・ハノーバー博では、初めてNGOが出展参加した。いよいよ21世紀最初の国際博覧会「愛・地球博」では、NPO／NGOに加え、市民としての「個人」が、運営サポートとしてのボランティアをはじめ、催事・パフォーマンスや市民によるプロジェクトへの参加などと、幅広いフィールドにおいて参加する機会が与えられている。

まさに「愛・地球博」は、過去の経緯から「環境博」というスタンスに加え、「市民博」という側面を持ち合わせた今までにない、「21世紀博」としての新しい国際博覧会に向けた新たな実験にチャレンジすることになった。そして、以下に記す様々な市民参加型の事業が提案されることに至ったのである。

【博覧会協会事業】

１．市民プロジェクト

瀬戸会場では、国際博覧会初めての試みとして、市民が主役となって地球的課題の解決に取り組む「市民プロジェクト」を実施する。市民パビリオンには400名のホールと330平方メートルの展示室、海上広場には棚田状のオープンステージがある。一次公募のメンバーが企画した50のテーマ・プロジェクト、および二次公募で集まったメンバーによる新規プロジェクトが、今春にはほぼ出揃うことになった。2005年には、参加市民のミッションを発揮した対話イベントを中心に、催事や展示やワークショップが実施される。

２．地球市民村

国内外の「自然・環境」「国際交流・協力」その他「持続可能性」関連のNPO／NGOが、「参加体験楽習プログラム」を企画・制作し、会場で実践（展示・発表）する。ホストとなる国内NPO／NGOとそのパートナーとなる海外のNPO／NGOを協働ユニットとして募集を行った。１カ月交代で毎月５ユニット（10団体）を６カ月、約30ユニットが参加する。日本が提案して国連で採択された2005年から始まる「国連持続可能な開発のための教育の10年」の動きと連携していく。

３．EXPO参加催事

団体、企業、NPO／NGO、クリエーターなどが自主的に企画を立て、主催者として開催する催事を100プログラム程度展開していく。

４．自然体感プログラム

来場者に愛・地球博の豊かな自然を楽しんでいただくと共に、来場者自らの参加・体験による「気づき」を通して「自然の叡智」を考え、学ぶ機会を提供する。具体的には、「森の自然学校」「里の自然学校」「グローイング・ヴィレッジ」「サツキとメイの家」として４つの特色ある個別プログラムを展開する。

【ボランティアセンター】

1．愛・地球博ボランティアセンター

延べ10万人の市民が会期中185日間にわたって、博覧会運営を支援するボランティアとして活躍する。想定される活動としては、

①ゲート周辺活動(高齢者･障害者案内、誘導、迷い子ワッペン配布)

②障害者・高齢者対応活動（車椅子の貸し出し、移動介助、手話・筆記通訳、その他ケアセンター内業務）

③迷い子対応等

④外国人対応等

⑤ベビーカーの貸し出し等

⑥サービス巡回活動（案内・誘導・介助等）

⑦環境・美化活動（ゴミ分別案内、エコツアーガイド）――などを検討している。

去る1月26日より、ボランティア15,000人の募集を開始した。本年7月からはボランティア登録者に対する研修を開始する予定である。

【愛知県事業】

1．愛知万博地域連携プロジェクト

名古屋市を除く愛知県内の市町村と地域住民が連携・協働して行う博覧会関連事業・催事の実施を推進して、博覧会の盛り上げと地域の振興・発展を図る。

2．あいち・おまつり広場

長久手会場のパビリオンには、催事・交流空間として「あいち・おまつり広場」を設け、愛知の各地域にある祭り、伝統芸能、芸術・文化など、会期中185日間にわたり、様々な「あいちの魅力」を発信していく。

3．瀬戸会場愛知県パビリオン県民参加プロジェクト

瀬戸会場のパビリオンでは、県民が主役の空間を設け、「県民参加ムーブメント」を展開する。パビリオンのテーマにあるエコ・コミュニティ活動を、博覧会を通して県全体に広げていこう、その成果をパビリオンで発信しようというものである。具体的には、

①愛知グリーンマップ2005（展示・催事）

②あいち環境絵本（展示・催事）

③愛知自然と暮らしの暦（展示）

④愛知エコ・コミュニティ活動紹介（催事）

⑤エコの知恵袋（催事）――について展開する。

4．一市町村一国フレンドシップ事業

愛知県内市町村を公式参加国のホームシティ、ホームタウンと位置づけ、地域を挙げたホスピタリティ溢れた公式参加国の受け入れや博覧会の盛り上げ、さらには草の根の交流を含めて幅広く国際交流の推進を図る。

5．おもてなしボランティア活動事業

博覧会の開催を契機として、愛知県下全域で県民の幅広いボランティア活動を促進するための環境づくりに取り組むとともに、開催地元として来場者を温かいおもてなしの心で迎えるボランティア事業を展開する。

6．里山学びと交流の森づくり

海上の森では、愛知県民主体による「里山学びと交流の森づくり」を進めるため、愛知県と県民参加組織「里山学びと交流の森づくりの会（仮称）」との協働・連携により、人と自然の関わりを探求する様々な活動プログラムの展開を目指す。

【名古屋市事業】

1．N-expo city（ネキスポシティ）シンフォニー

愛・地球博の成功に向け、「環境」「感性」をキーワードとして市民、企業、行政の協働により、まち中を舞台に様々な取り組みを展開する。

2．ささしまサテライト会場（市民企業参加ゾーン）

開催期間中、市と市民、企業等が一緒になって、名古屋を舞台に21世紀にふさわしい新しいライフスタイルを発信する。N-expo city シンフォニーに参加されている方を中心に「スローライフ・スローフード」「エコグッズ・環境技術」「なごやの技・まち自慢」などをキーワードとした取り組みや研究開発、芸術・文化活動の発表など幅広いプログラムをリレー展開する。

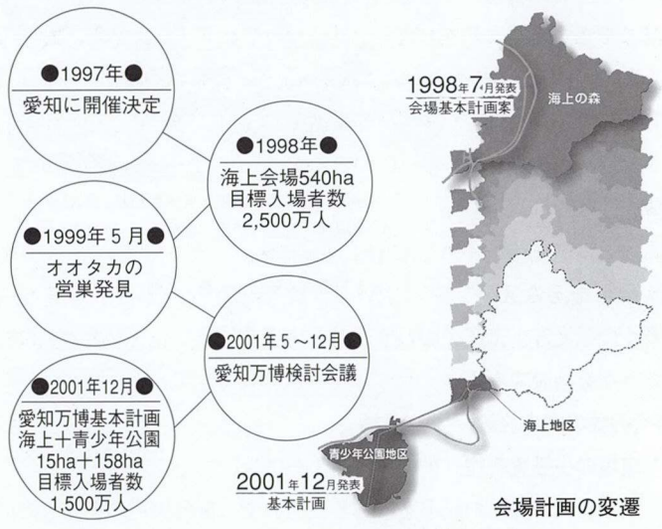
*

以上のように、愛・地球博における市民参加は様々な事業の中で実施されることになっている。

新しい時代の市民の役割は、21世紀の地球的課題や社会的要望に対して、従来の枠組みとは異なった柔軟な対応ができる潜在的能力にある。また、立場を超えた市民の参加は、視点を変えること、お互いの立場を認めること、そして問題点を見つけ解決策を見出すことができる。21世紀最初の国際博覧会「愛・地球博」では、今までの「公式参加」「営業参加」に加えて国際博覧会として初めての「市民参加」を、新たな出展者に位置づけ、幅広い参加の展開を目指す。今までは「見る」ことで感動をした博覧会が、これからは「参加」することでも感動を得られる時代である。市民自らが国際博覧会という新たなステージに挑戦することのできる時代が、もうそこまで見えてきた。

2005年3月25日 ―― 新たな歴史の1ページが始まる。

（文責／越野正孝）



会場計画の変遷

せと・まるっとミュージアム
～愛・地球博を契機として～

瀬戸市企画部国際博覧会推進課

せと・まるっとミュージアムとは

瀬戸市は1300年の歴史を持つ陶磁器の都であり、その歴史、文化を感じさせる街並みや人々の営みを市内の各地で見ることができるまちである。「せと・まるっとミュージアム」は、市域全体を博物館、美術館に見立て、さまざまな地域の資源を結びつけ、まちの魅力を高めていくことで、国内外からの来訪者を迎え入れ、豊かな交流を生み出すことを目的としているもので、産業観光都市・瀬戸のまちづくりを進める上での指針となるものである。

せと・まるっとミュージアムの骨格となる都市基盤整備

現在、ミュージアムの骨格となる、さまざまな地域整備が愛・地球博を目標に急ピッチで進められている。

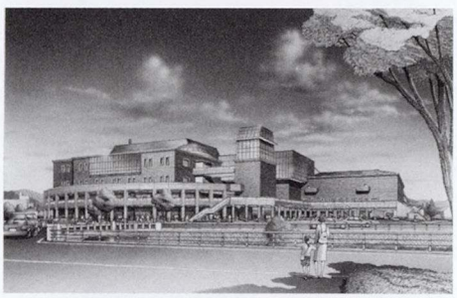
〈パルティせと〉



名鉄瀬戸線尾張瀬戸駅前に博覧会の開催される2005年２月にオープンする再開発ビルは、新しい瀬戸の顔としてまちに賑わいをもたらすだけでなく、市民活動センター、国際センターに大学コンソーシアムや生涯学習施設としての機能を加え、博覧会開催を経て、市民活動の拠点としての大きな位置づけを持つ施設となる。

Ｓ造一部ＳＲＣ造、地下２階地上６階建
延床面積　13,590.68㎡
設計　㈱黒川紀章建築都市設計事務所
施工　清水・矢作・沢田ＪＶ他

〈瀬戸蔵〉



2005年３月にオープンする瀬戸蔵は、やきもののまち瀬戸の産業の歴史と文化を体感できる博物館機能を持つとともに、市民ホールや物販、飲食店をそなえ、多くの観光客、市民で賑わう「せと・まるっとミュージアム」の拠点となる施設である。

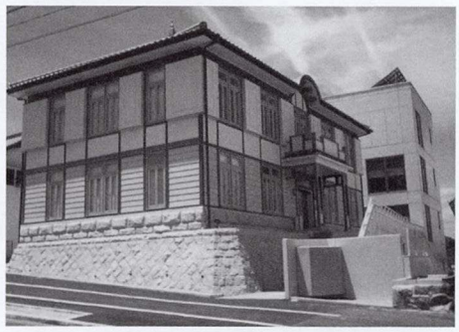
本館棟：ＲＣ造５階建、延床面積11,125.12㎡
駐車場棟：Ｓ造５階建、延床面積 5,092.94㎡
設計　㈱梓設計
施工　大成・松村・大数ＪＶ他

〈その他の拠点施設〉

①窯垣の小径資料館（平成７年度オープン）

明治時代の窯元の民家を改修したもので、洞町周辺のやきものの歴史や、文化を伝える資料館と、休憩所としての機能を持つ拠点施設である。

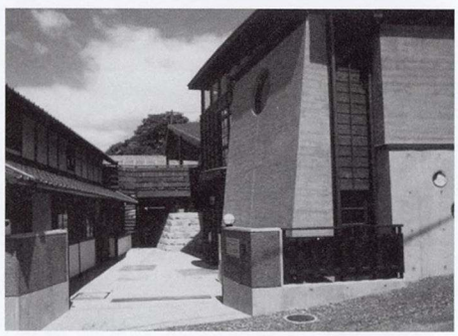
②新世紀工芸館（平成11年度オープン）



次世代の産業、文化の発展を図ることを目的として、若手工芸家の育成を行う工房棟、展示棟、情報・交流サロンのある交流棟からなる観光拠点である。

展示棟は、大正３年６月30日建造の瀬戸陶磁器陳列館（大正モダン建築物）を復元し、交流棟は、昭和初期に使われた陶磁器工場を大規模改築して建造した。

③マルチメディア伝承工芸館－瀬戸染付研修所－（平成12年度オープン）



やきものの伝統技法である「瀬戸染付」をテーマにした施設で、５名の研修生によるロクロや絵付などの作業風景の公開、瀬戸染付の歴史的名品の展示を行っている。この施設は、本館・交流館・古窯（こがま）館から成り、この場所はもともと磁器生産の窯屋さんだったところであることから、古窯は昭和39年まで現役で焚かれていた登り窯が瀬戸市指定文化財として保存されているものである。

また、交流館はかつての窯屋時代の作業場を再現した木造建築で、一方、本館は伝統的な雰囲気の中にモダンなデザインを取り入れた建物となっており、平成12年度「愛知まちなみ建築賞」を受賞している。

④無風庵（平成13年度オープン）



瀬戸ゆかりの工芸家藤井達吉の工房であった古民家を、ギャラリー・休憩所機能をもつ施設として改修したものである。今ではあまり見ることのできない萱

葺き屋根が特徴で建築内部からもその伝統技術を見ることができる。

⑤ノベルティこども創造館（平成15年度オープン）

高い技術力を誇る瀬戸市のノベルティや土を素材として、子どもたちの創造力を豊かに育み、ものづくりの楽しさを伝える施設である。ノベルティを製造していた工場を改修したもので、内装は柱をテーマカラーで塗装するなど子どもの施設らしく仕上げている。

＊

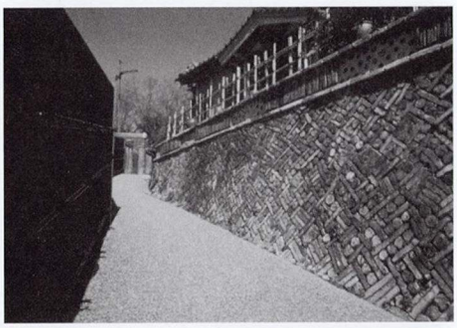
こうした中心市街地の新しい拠点施設と、瀬戸市の歴史的な地域資源を結び付ける「陶の路」と名づけられた遊歩道の整備も進めており、博覧会開催時に数多くの来訪者をもてなすための基盤整備の全体像が姿を現してきた。

市民参加のおもてなしを目指したソフト事業

こうしたハードの整備に血を通わせるのは、一人ひとりの瀬戸市民によるおもてなしの心である。そこで、瀬戸市では、愛・地球博に向けた市民参加によるソフトプログラムを展開している。

〈瀬戸100景・街角ギャラリー事業〉

まちに暮らす市民の視点から瀬戸の地域資源を発掘するための事業である。瀬戸100景は市民からの公募により瀬戸市の魅力ある100の風景を選考したものである。街角ギャラリー事業は、気軽に立ち寄ることができる陶房や工房などを募集し、来訪者が市内各地を回遊するポイントをつくるもので、現在約170件の登録がある。



100景の１つ「窯垣の小径」

〈せと・まるっとミュージアム大回遊〉

毎年11月第２日曜日、来訪者をおもてなしの心で迎えるために、様々なお祭りが地域の特色を出しながら互いに協力し合い、市域全体で盛大なイベントを行う。



イベントの中心となるのが、やきもののまちの特色を生かした赤津、水野、品野地区の「窯めぐり」である。この日は、各イベント会場を回遊する無料のシャトルバスが走っている。

〈瀬戸市おもてなしボランティア〉

瀬戸を経由して博覧会会場に向かう来訪者に対して、暖かくもてなすとともに、積極的に瀬戸市の魅力をＰＲする事業である。開催期間中に活動するボランティアの数を6000人と想定し、平成16年５月から募集を開始している。運営企画、研修プログラム作成、広報づくりなども市民スタッフの手で行い、瀬戸らしいおもてなしを展開していく。

〈瀬戸の家〉

国内外からの博覧会来訪者や、参加各国のスタッフを瀬戸市の一般家庭に招きいれ、市民との交流を深めるホームステイ事業である。開催前年から受け入れを開始し、開催期間中までを含め600人の交流を見込んでいる。

＊

せと・まるっとミュージアムに関連する事業については、地上波デジタル放送を発信するデジタルタワー建設に併せ、平成16年５月にオープンしたデジタルリサーチパークセンターに導入された最新の設備を活用して、瀬戸市の内外へ積極的な情報発信を行っていく。

未来の瀬戸市

やきもののまち瀬戸市の歴史・文化と、新しい魅力的な都市基盤の整備、そして市民参加によるソフト展開を結びつけることを基本的な視点として、瀬戸市の将来像を展望したまちづくり運動が「せと・まるっとミュージアム」である。

愛・地球博はこうした市民参加による産業観光都市づくりの枠組みを完成させるための大きなチャンスであり、「まるっとミュージアム」の真価は2005年以降に本当の意味で問われることになる。

（文責／岡田克也）

博覧会会場における公園事業と博覧会後の公園整備

川崎昭弘

愛知青少年公園再整備計画

愛知青少年公園は、昭和45年11月１日（1970年）に明治100年記念事業として建設された県営公園で、その後、平成13年度末の閉園まで31年間余、青少年の健全育成から気軽に利用できるリクリエーションの場として幅広く県民に親しまれてきた。

昭和45年は奇しくも大阪万博（３月15日から９月13日）の開催年であるが、2005年日本国際博覧会の開催を契機に県営都市公園として再整備を図ろうとするものである。

近年になり、公園を取り巻く社会情勢は大きく変化し、少子化に対する青少年健全育成環境づくりが重視されるとともに、ライフスタイルの多様化や高齢社会への対応、公園周辺の都市化に伴う防災機能の強化など都市施設としての機能の充実が求められている。

こうした中、愛知青少年公園において「自然の叡智」をテーマにした「2005年日本国際博覧会」の長久手会場として開催されるため、これを契機に21世紀に相応しい都市公園として再整備を図ろうと、平成14年度都市計画決定し、同年に事業着手した。

基本方針

愛知青少年公園の再整備計画の基本方針として、「新しいニーズに対応した都市公園」「青少年公園の歴史を活かした都市公園」「博覧会の理念と成果を継承する都市公園」「多様な自然環境を育む都市公園」の４つを掲げている。

再整備事業

博覧会前の公園事業としては、博覧会会場計画と都市公園としての計画整合を図り、博覧会会場の「森林体感ゾーン」は公園計画の「もりのゾーン」として現在、整備を進めている。

「森林体感ゾーン」の整備内容については、“林内に咲く四季折々の花々や木漏れ日など体で体感できる場”や“自然を素材に先達の巧みな庭園技法により、人のわざと自然が織りなす美を表現する場”として日本庭園、“自然の仕組み、おもしろさなどを楽しみながら学び、体験する場”の三区域に分け、整備を行っている。

基本方針の「新しいニーズ」への対応として、施設を様々な方々にも利用して頂けるよう緩勾配となる園路・広場について木製デッキなど使用して整備を行っている。

また、博覧会会場の「パビリオンゾーン」は公園計画では「ひろばのゾーン」として、博覧会後にも使用する基盤施設の整備を行っていく。博覧会後の「パビリオンゾーン」の具体的な施設計画は、有識者や県民の意見を聞きながら検討していくこととしている。

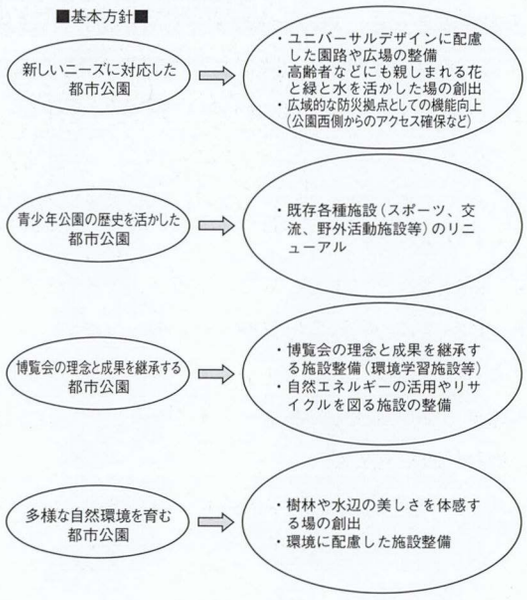
平成14年度末の事業着手後、博覧会開催までの実質２カ年余りの事業期間の中、急ピッチで事業調整と環境に配慮しつつ整備を進めている。

公園事業としては、博覧会前整備とともに、博覧会後の再整備と早期開園が大きな課題である。

このため、博覧会後のパビリオンゾーンの具体的な施設については、意見を伺いながら、策定していくこととしているが、策定後は速やかに事業を進め、再開園と全体整備を図っていくので、以前に増して皆様のご利用を望んでいる。

（かわさき　あきひろ／愛知県建設部公園緑地課　課長補佐）

愛知青少年公園再整備計画の基本方針





注：この図面は博覧会工事前の地形図に表示したものである。

海上の森の保全と活用

浦井　巧

「里山学びと交流の森づくり」の取り組み

2005年愛知県で開催される国際博覧会の会場地を決定する過程で、瀬戸市南東部に位置する「海上の森」についての保全と活用をいかに図るかが課題として提起された。

このため、愛知県では海上の森において「里山学びと交流の森づくり」を進めることとし、自然保護関係者や有識者などからなる「里山学びと交流の森検討会」を設置し検討してきた。今般、その検討結果を踏まえて、今後の県の取り組みを決定した。

海上の森における里山学びと交流の森づくりは、この森の特性を活かし、博覧会の取り組みを継承しつつ、この地の自然、先人の知恵、古からの技術、地域の生活術から学び、幅広い多様な人々が、自ら様々な活動や勤労を通して学習し、参加交流する新しい県民活動の場とすることを目指している。

また、海上の森は都市近郊にあって、多様な自然環境を有するとともに、古くからの生活や文化が生きているところである。

こうしたことから、人と自然との関わりを探求し、心の豊かさや楽しみを育む場として、海上の森ならではの新たな里山文化を創生する「貴重な県民の里山」と位置づけている。

その基本的な柱を①自然保護・森林育成のあり方を学ぶ場②里山保全のあり方を追求し、県内外のモデルとなる場③自然・森林・里山に関する取り組みの成果を情報発信する場④幅広い層の人の参加・協働を通して、県民参加のあり方を探る場――としている。

事業展開

○自然、里山、森林との関わりの探求と活動の場としてのモデルづくり

里山の保全、生物多様性の保全、自然環境の保全、森林育成整備などの活動を県民参加の方式を導入して展開し、そのモデルを示すとともに、県と県民の協働のしくみを確立し、県内外への波及を図る。

- 活動プログラムの開発と実践
- 里山学校（人材養成）の開催
- 里山保全のネットワークづくり

○環境教育・森林学習等の推進とその拠点づくり

社会教育や学校教育における環境教育や森林学習などのフィールドとして活用し、自然と共生していくことの豊かさを実感する感性のある人間性の回復をめざす取り組みを進展し、その拠点とする。

- 環境教育、森林学習の拠点づくり
- 小中学校の総合学習との連携
- 取り組みの普及啓発活動
- 自然・森林・里山・文化歴史に関する情報の発信

○循環型社会形成の糸口探求

自然の営み、自然の恵み、里山における資源循環など里山をキーワードに、自然環境と調和した新しいライフスタイルや価値観を見つめ直す機会を与え、資源の循環の学習などを通して、循環型社会形成の糸口を探る取り組みを進め、ここを核に県内外への拡大を図る。

- ライフスタイルの見直しの取り組み
- 里山を軸とした循環型社会形成の普及

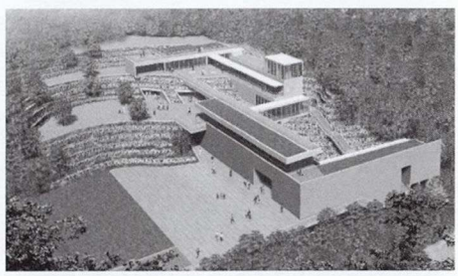
県民参加のシステムづくり

県民主体による森づくり・里づくりを進めるため、海上の森の運営に携わる県民参加の「里山学びと交流の森づくりの会（仮称）」を博覧会までに設置し、県との協働体制を整備する。

また、博覧会開催時の活用として、人と自然の関わりを探求する森林環境教育学習・森づくり活動・自然観察活動・生態系保全活動・農作業体験・里山保全活動・歴史や文化の探訪活動など様々な活動プログラムを展開する。

拠点施設の整備とその後の展開

瀬戸会場の県パビリオンを一部恒久施設とし、展示教育・参加交流・調査情報機能をもった拠点施設として再整備する。



外観イメージ図

また、博覧会後の継続的な取り組みとして、①里山保全に関する、県内外のモデルとする②里山を中心とした諸活動を通して、自然環境と調和した新しいライフスタイルを探り、循環型社会形成につなげる③社会教育や学校教育との連携により、自然と共生する人間性の回復をめざす④長期的な保全と活用の観点から、里山の保全、生物多様性の保全、山地災害の防止、森林の育成整備などの取り組みを進める。

（うらい　たくみ／愛知県国際博推進局事業調整課環境調整グループ　課長補佐）

磁気浮上式システム
～リニモ（東部丘陵線）～

愛知県高速交通

はじめに

リニモ（東部丘陵線）が整備される名古屋東部丘陵地域一帯は、「あいち学術研究開発ゾーン」として位置づけられ、学術研究開発拠点の整備、居住・文化・レクリエーション機能の充実など総合的な地域整備が進められており、大学や研究施設、文化施設などが多く立地している。

この地域は、鉄軌道系高速輸送機関の空白地帯となっており、自動車交通への依存度が高く、幹線道路の混雑も激しくなっている。磁気浮上式システムによる国内初の本格的な営業路線となるリニモは、この地域の基盤となる交通機関として、また、2005年日本国際博覧会「愛・地球博」会場への主要アクセスの一つとして期待されている。

▲ロゴ

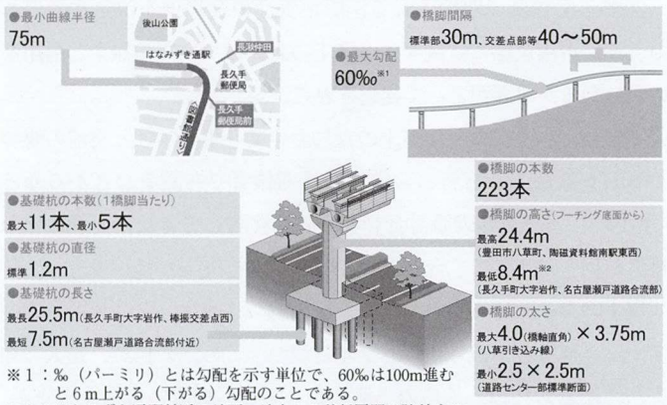
リニモの概要

リニモは、名古屋市営地下鉄東山線藤ヶ丘駅と愛知環状鉄道八草駅を結ぶ8.9ｋｍの区間に９駅が設けられる。構造は複線高架式であるが、藤が丘駅からはなみずき通駅までの約1.4ｋｍの区間は地下式となる。よって、藤が丘駅は地下駅、はなみずき通駅が地上駅、残りの７駅は高架構造となる。

走行方式として「常電導吸引型磁気浮上・リニアインダクションモーター推進方式」を採用、ＡＴＯ（自動列車運転装置）による無人運転で運行し、最高速度は時速100km、全線の所要時間は15分となる。

また、車両基地は、愛知郡長久手町地内の旧青少年公園（愛・地球博長久手会場予定地）東側3.5haの敷地に建設された。基地内には、中央制御所、検修場、変電所などの建物のほか、軌道構造物として、車両留置線３線、検査線２線、分岐装置５基が設けられている。中央制御所の２階には、無人運転となるリニモの運行を一括管理する運転指令所が設けられており、電力、信号保安、自動運転、

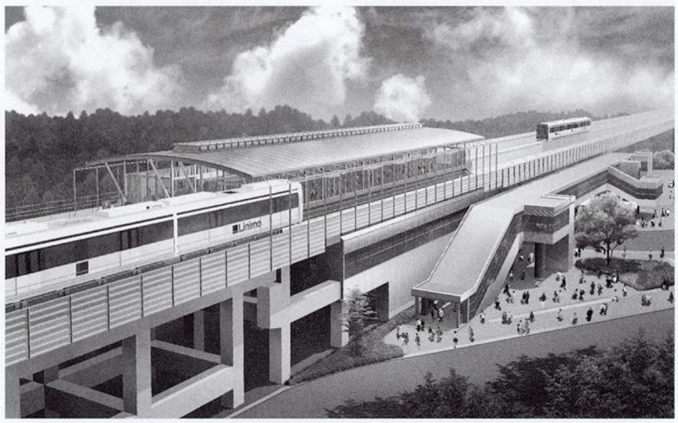
起伏の多い丘陵地や既存の道路上に建設される東部丘陵線は、急勾配や急カーブでも安全・快適に走行できるよう設計されている。また、阪神淡路大震災以降に制定された設計基準を満足する構造としている。



※１：‰（パーミリ）とは勾配を示す単位で、60‰は100m進むと６m上がる（下がる）勾配のことである。
※２：はなみずき通駅付近の地下～地上への移行区間は除外する。

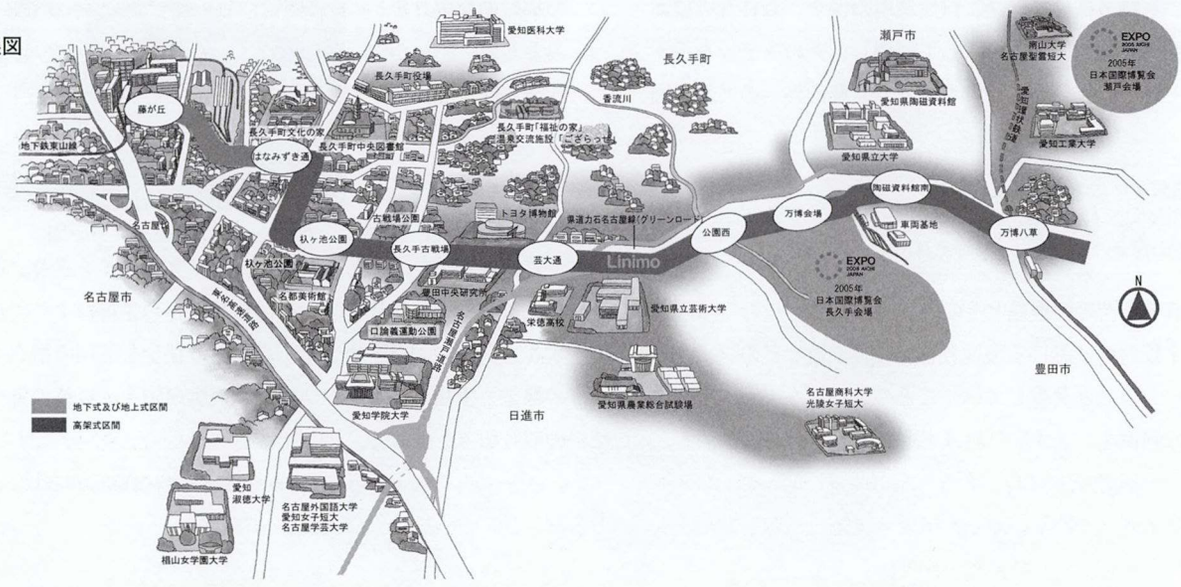
▲建設データ

▼万博会場駅イメージ



※博覧会終了後のイメージ。博覧会期間中は仮設でホームが増設される。

リニモ路線図



通信の各設備の操作や監視機能が集中している。

磁気浮上式システム

リニモに採用されている磁気浮上式システムは、以下のような特徴を持っている。

1）浮上して走行することによりレールとの接触が無いため、騒音や振動が小さく、乗り心地が快適であるとともに、沿線環境にやさしい。

2）リニアモーターで走行するため、急勾配も自由に走行できる。

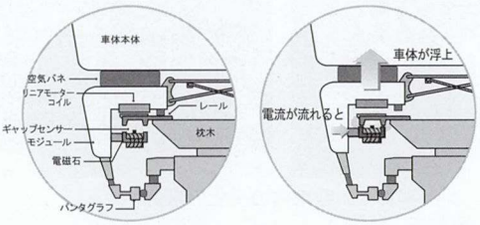
3）加減速度が高いため、表定速度が高く速達性に優れている。

4）車両がレールを抱え込む構造になっているため、脱線や転覆などの事故が起こる心配がない。

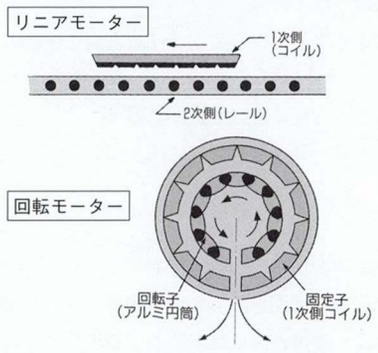
5）摩耗部分が無く、車両やレールなどの保守費用が低減される。

名古屋東部丘陵地域の起伏ある地形にも対応でき、先進性に優れた交通システムであることから、この地域の整備コンセプトにふさわしい交通システムであると言える。

■浮上　車体に取り付けられた電磁石に電流が流れると、レールに向かって吸引力が生まれ、車体が浮く。電磁石とレールとの間隔はギャップセンサーにより、常に一定の間隔を保つように制御されている。



■推進　車両はリニアモーターで推進する。リニアモーターとは、普通の回転モーターを平たくのばしたものである。普通のモーターが回転する力として使われるのに対し、リニアモーターはそれを直進する力として活用する。



磁気浮上式システムの仕組み

車両の概要

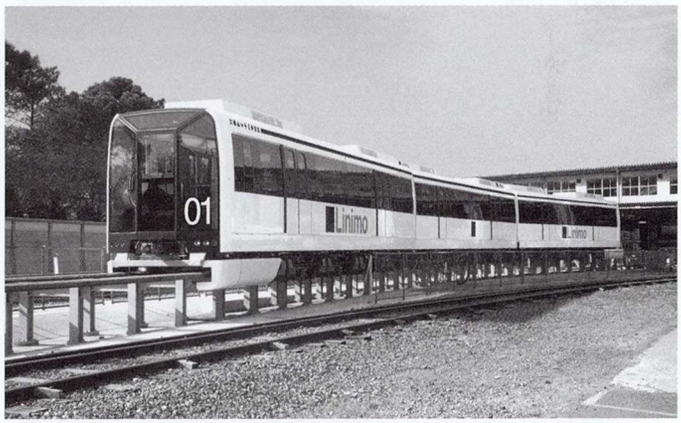
沿線にある愛知県立芸術大学の協力により設計が行われた車両は、先頭部が全面ガラス張りのカット形状で、側面の窓も広くなっており、透明感をイメージしてデザインされている。

編成は３両固定編成、車体はアルミ合金セミモノコック構造、台車はモジュール台車で各車両10台（片側５台）のモジュールで構成されている。

車両寸法は、車体長14.0ｍ（中間車は13.5ｍ）×幅2.6ｍ×高さ3.45ｍ、乗車定員は１編成244人（座席定員104人）、側扉は各車両当たり片側２カ所の計４カ所で、腰掛は車両中央にクロスシート、扉付近にロングシートを採用している。

電気方式は直流1500Ｖで、10台のリニアモーターを１台のＶＶＶＦインバータ装置により制御している。

車両は、平成14年11月から約半年間、名古屋市南区にある中部エイチ・エス・エス・ティ開発㈱大江実験線において先行車両の試験・調整を行った後、量産車両の製作に入っており、平成15年11月から12月にかけて、全９編成のうち２編成が車両基地に搬入された。



車両写真

開業に向けて

リニモは、2005年３月に開幕する「愛・地球博」に間に合うよう、急ピッチで建設工事が進められている。平成15年末の時点では、愛知県及び名古屋市が公共事業として施工するインフラ部（柱・桁等）においては、桁架設工事がほぼ完了し、走行路支持台座、高欄、通路手摺等の橋面工工事が本格化している。また、愛知高速交通㈱が施工するインフラ外部（鉄道施設・車両等）においては、車両基地が完成した他、インフラ部の工事に引き続いてレールの敷設等も進んでいる。車両も順次車両基地に搬入され、平成16年中頃からは、本線上（一部区間）での走行試験が始まる予定となっている。

開業後は、磁気浮上式システムの特性を生かして安全で快適な輸送サービスを提供し、博覧会時の主要な輸送機関として期待に応えるとともに、地域住民の快適な生活や地域の発展に貢献していきたいと考えている。

（文責／石原佳典）

大阪府景観条例

平井秀樹
大阪府建築都市部建築指導室建築企画課主査

大阪府景観条例は、風格ある都市空間および豊かな生活空間の創造を目指して平成10年に制定された。平成11年には条例に基づき、「大阪府景観形成基本方針」を定め、

①府民・事業者・民間団体及び行政の協働による景観づくり
②景観形成地域における景観づくり
③公共事業の景観づくり
④市町村との連携による景観づくり
⑤さまざまな施策との連携による景観づくり

の取り組みにより、「美しい世界都市大阪」の実現を目指すこととしている。

景観形成地域の指定

前述のように景観づくりの上で重要な地域を「景観形成地域」に指定し、届出制度により、一定の基準に沿った景観づくりを進めている。

具体的には、府の骨格を形づくる道路軸、河川軸、緑軸（山並み）等を候補とし、これまで、道路軸として大阪中央環状線、国道423号、国道308号、国道26号、大阪外環状線、国道171号の６道路軸と、河川として淀川を地域指定している（**図１**）。

また、景観形成地域（基本として道路沿道50ｍ、河川沿川500ｍの区域）では、一定規模（建築面積2,000㎡または高さ20ｍ）を超える建築物および工作物を建築等（以下「大規模行為」という）する際は、届出を義務づけ、景観形成をはかる上で基本となる方針（景観形成方針）、および最低限守るべき景観指導基準（**図２**）に基づき、事業者と協議を実施している。

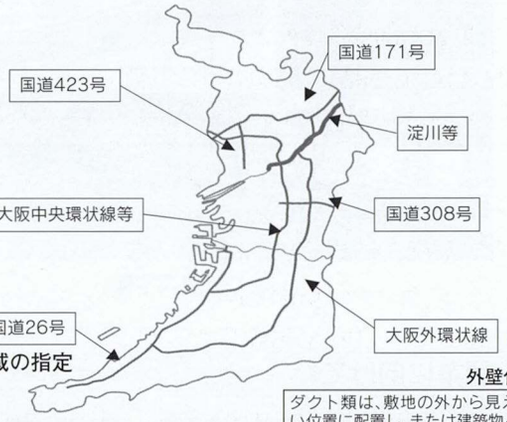


図１
景観形成地域の指定

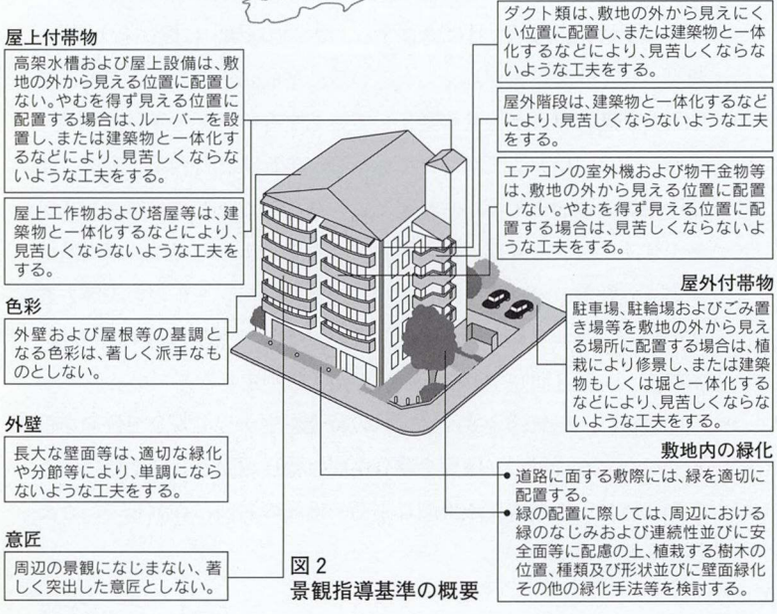


図２
景観指導基準の概要

大規模行為の届出制度と協議状況

景観形成地域における大規模行為の届出制度は平成12年７月から実施しており、平成15年12月末までの３年半で97件の実績があった（**表１**）。用途別にみると共同住宅が半数近くを占め、次いで商業施設、工場・倉庫が多く、地域別でみると国道308号（東大阪市域）、国道423号（吹田市域）、中央環状線（東大阪市域）が多くなっている。

表１　大規模行為の届出実績

地域別届出件数		用途別届出件数	
大阪中央環状線等	39	事務所	6
国道 423 号	18	病院	4
国道 308 号	27	共同住宅	47
国道 26 号	1	商業施設	16
大阪外環状線	10	工場・倉庫・車庫	13
国道 171 号	7	公共施設	4
淀川	7	工作物・その他	13

※地域重複 12 件含む　　※複合用途 6 件含む

これまでの主な協議成立事項は、次のとおりである。

●緑化関係（**写真１**）
・緑化部分の増加（プランターの設置、生け垣設置）
・樹種の変更（低木から中高木に変更して、ボリュームを増加等）
・植栽による景観阻害要因の目隠し（ゴミ置き場、駐車・駐輪場等）

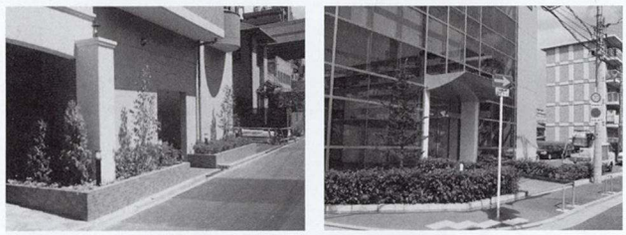


写真１　敷地内の緑化の事例

●建築物の色彩関係
・壁面の彩度を下げる（周辺から突出した色彩としない）
・過度に目立つ色彩部分の面積の縮減

●設備の修景、外構の仕上げ等
・駐輪場を２段式から平面式に変更、ゴミ置き場を建物の意匠と調和させる
・空調室外機を外部から見えない位置に設置
・外構の舗装をインターロッキング等で仕上げる

おわりに

大規模行為の届出制度は一定の成果をあげているが、沿道立地型の商業施設等のチェーン展開を図っている店舗では、全国一律の意匠や色彩を採用している等から協議が難航する場合や「着工直前ではコスト上の都合で計画を変更できない」といった回答に終始するケースもあり、事業者に早くから景観に対する意識を持って計画を進められるよう、より一層の周知・啓発を図る必要がある。

また、行政による規制指導型の景観形成と併せ、良好な景観は府民の共有の資産であるといった観点から、住民、事業者、行政の協働による景観づくりが一層重要となっている。　（ひらい　ひでき）

SMWの本設杭使用

金子　治
戸田建設㈱技術研究所

ソイルセメント柱列壁（ＳＭＷ）工法は、仮設の山留め壁として広く使われているが、本体構造物が構築された後は利用されることなく埋め殺されるのが一般的である。応力材である芯材（Ｈ形鋼）については地下外壁と一体化して合成壁として有効利用する工法はあるが、ソイルセメントについては品質の安定性の問題から、本設利用は行われていなかった。そこで、ソイルセメントを含むＳＭＷを本設の支持杭として使用できる工法＝ソイルセメント本設杭（ＰＳＰ）工法（**図1**）を開発し、実現場に適用した。今回の適用では、建物の外周部だけでなく内部の杭も同じ工法とし、すべての杭を山留め壁と同一の機械で施工することで、工期の大幅短縮、コストダウンを実現することができた。

なお、本工法は建設業14社で共同開発を行い、2003年３月に㈱日本建築総合試験所から「ＰＳＰ工法―芯材を有するソイルセメント杭工法」として建築技術性能証明（第02－22号）を取得しており、福岡市博多区のシロクス九州営業所新築工事は採用の第一号である。

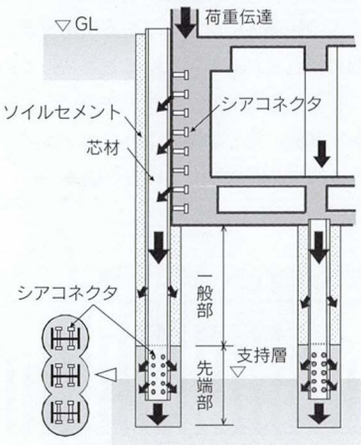


図1　PSP工法の概要

■シロクス九州営業所
●設計監理
本多環境・建築設計事務所
●構造設計
デザイン・構造研究所
●構造規模
ＲＣ造ラーメン構造、一部ブレースフレーム構造、吊り構造
地上５階・地下１階
●杭本数
94セット、芯材122本（**図2**）
●施工径、芯材
ϕ550、*H*340×250×9×14
●施工長
ソイル長13.1m、芯材長12.0m

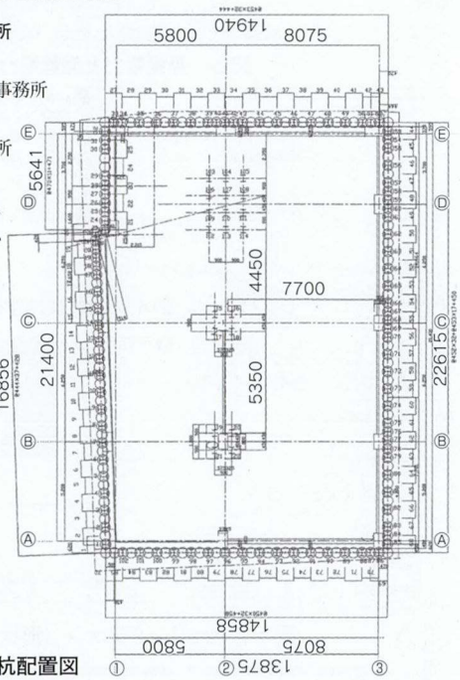


図2　杭配置図

ＰＳＰ工法の概要

ＳＭＷ工法では、ソイルセメントは応力材ではなく、配合や撹拌方法は施工性を考慮して経験的に設定していることが多いが、本工法は芯材へ伝わった建物荷重を、芯材とソイルセメントの付着抵抗および先端部に設置したスタッドボルトの支圧抵抗を介して地盤に伝える機構であり、性能確保のためにはソイルセメントの品質および施工精度（設計径の確保、鉛直精度、掘削および芯材の挿入深さ）が重要である。

そこで、開発にあたって多くの現場施工試験、構造試験、載荷試験を行い、芯材＋ソイルセメントの複合構造としての応力伝達機構、支持性能を確認し、必要なソイルセメントの目標強度とばらつき、およびそれを確保するための厳密な施工管理、品質管理方法を確定した。**表1**に標準施工水準を、**図3**に標準施工によって構築した杭の載荷試験結果の例を示すが、ソイルセメントの品質、施工精度が確保されていれば、許容支持力レベルでは荷重－沈下関係は弾性範囲内であり、設定した支持力式に対し十分な安全性を有していることがわかる。

表1　標準施工水準

	目標強度	固化材配合量	水セメント比	撹拌回数
一般部	1 N/mm^2	353 kg/m^3	150%	38回/m
先端部	5 N/mm^2	705 kg/m^3	80%	100回/m＊

＊繰り返し撹拌（ターニング）および孔底撹拌を行う

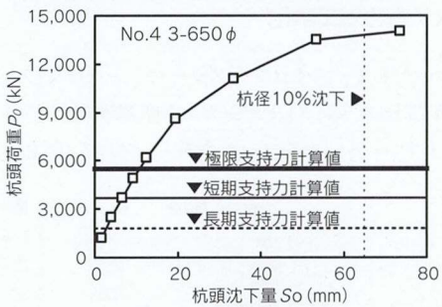


図3　載荷試験結果

施工状況と品質確認結果

本工事の杭の施工は標準施工水準によって行い、所定の施工精度（鉛直精度、所定の深さまで掘削・芯材の挿入）および施工能率（１日４～６セット）を確保し、問題なく施工（**写真1**）を完了した。また、施工後に杭の中からサンプリングしたソイルセメント試料を用いて品質確認のための強度試験を行った結果、一般部では必要強度1.0N/mm^{2}に対し3.3N/mm^2、先端部では必要強度5.0N/mm^{2}に対し6.6N/mm^{2}と、すべて支持力確保に必要な強度を上回っていた。また、強度のばらつきも、変動係数（標準偏差／平均値）で一般部0.38,先端部0.14と、深層地盤改良工法による一般的なソイルセメントの変動係数の上限値0.45よりも大幅に小さく、特に支持力確保のために重要な先端部で高い品質であることから、ＰＳＰ工法により基礎構造の性能が確保されたことを確認した。なお、試験用のソイルセメントは施工直後に未固結状態で採取したが、地中で養生、固化後にコアサンプリングした場合はこの1.5倍以上の強度を持つことが確認されており、実際にはより以上の安全性を有しているものと判断される。

さらに、高品質のソイルセメントで外周部を囲うことで、せん断変形抑止による液状化対策効果にも期待できることから、構造性能の向上にもつながったと考えられる。

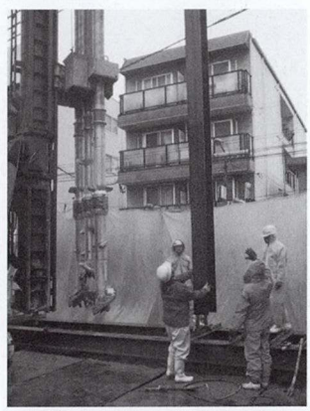


写真1　PSP工法施工状況

（かねこ　おさむ）

堺ガスビルの設備設計

岡　克己
大阪ガス㈱エンジニアリング部システム制御チーム

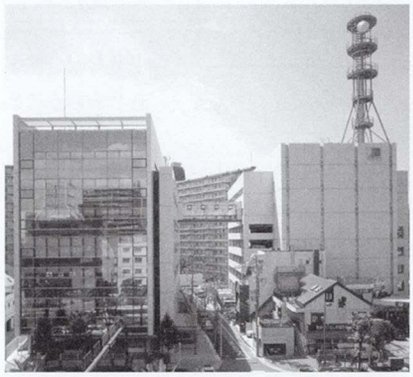
堺ガスビルは、大阪ガス㈱大阪南部地区の分散拠点の集約化、耐震性の向上を目的として、現地建て替えを行い、平成15年８月に竣工した。建物はオフィス、会議室、ショールーム（ディリパ堺）をもつ東棟（NEST東）と、保安指令センターと業務用駐車場をもつ西棟（NEST西）の２棟構成である（**写真１**）。

堺ガスビルは、省エネルギー・環境負荷低減を目指し、ガスエネルギーを中心とした先進的な省エネルギーシステムの導入、都市空間での自然エネルギー利用、28℃快適空調やBEMS（建物環境エネルギーマネジメントシステム）を中心とした運用における省エネルギー化などを積極的に取り入れている（**図１**）。

本稿では、これらのシステムを紹介するとともに、運用実績について報告する。

エネルギーシステムの省エネ化

東棟は熱源システムとして、マイクロガスタービン＋排ガス投入型ガス吸収冷温水機（ジェネリンク）＋デシカント空調機（取入外気の除湿機）のコージェネレーションシステムを導入している（**図２**）。



	■東棟	■西棟
敷地面積	1842㎡	1700㎡
建築面積	1085㎡	1346㎡
延床面積	7155㎡	8811㎡
階数・高さ	7F、P1、32m	8F、33m、無線塔
建設工期	H14.10～H15.8	H13.6～H14.4
	7F／食堂	8F／倉庫等
	6F～3F／事務室	7F、6F／事務室
	2F／共用会議室	5F～2F／駐車場
	1F／ショールーム	1F／事務室・倉庫

写真１　全景

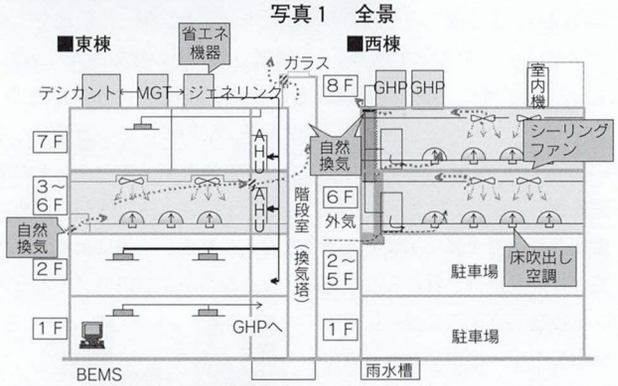


図１　省エネシステム全体イメージ

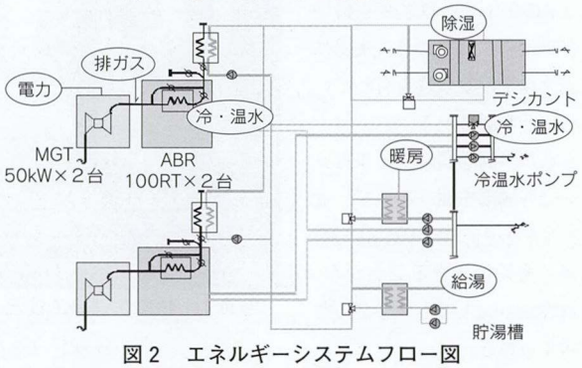


図２　エネルギーシステムフロー図

マイクロガスタービンで発電を行うとともに、その排ガスを直接、ジェネリンクに投入することにより高効率な排熱利用冷房運転が可能である。ジェネリンクで利用した排ガスは、熱交換器を介して給湯、暖房、デシカント空調機にも利用されており、総合効率は82%になる。**図３**に示すようにマイクロガスタービンの発電により、電力負荷を平準化できている。西棟には、GHP（ガスヒートポンプパッケージエアコン）を導入している。

夏期の28℃空調快適化

省エネルギー対策として夏期28℃空調が各施設で実施されているが、ある程度快適性が犠牲になっているのが現状である。本建物ではシーリングファン、床吹出空調、デシカント空調機を用い、28℃空調での快適化を目指した。人の快適性に影響を与える環境要素として温度のほかに、湿度、輻射、気流がある。温度は省エネのため28℃とするが、シーリングファンによる気流、床吹出空調による床面の冷輻射効果、デシカント空調機による除湿により、エネルギー削減効果をそのままに快適性を許容範囲内としている（**図４、５**）。

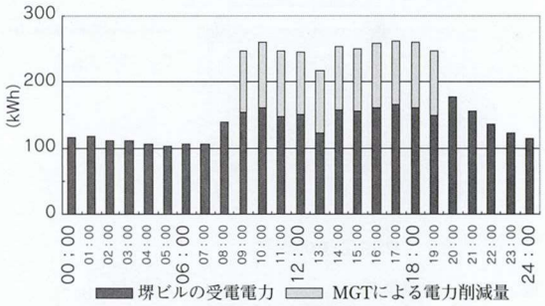


図３　受電電力と発電電力実績

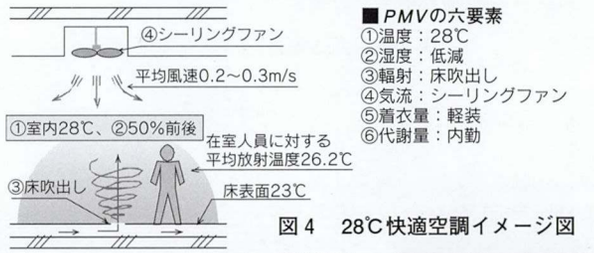


図４　28℃快適空調イメージ図

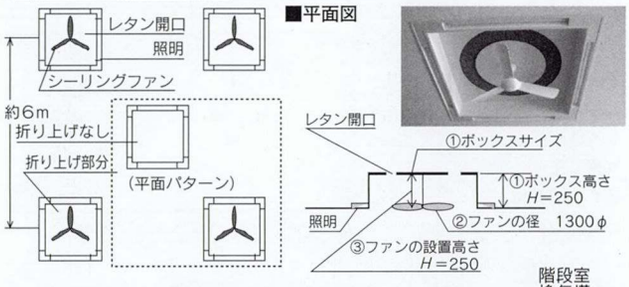


図５　シーリングファン（形状）

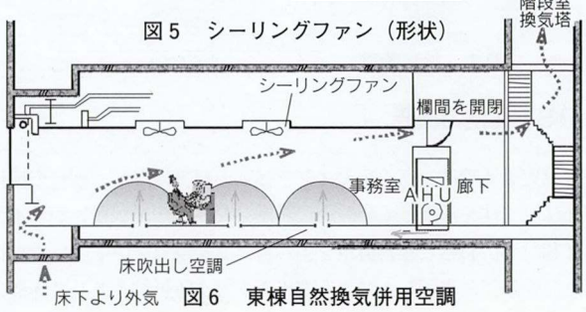


図６　東棟自然換気併用空調

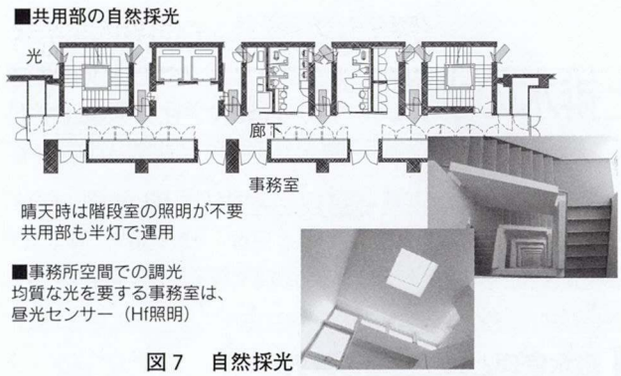


図７　自然採光

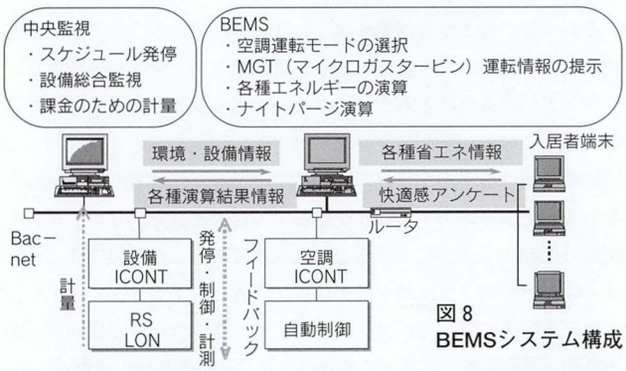


図８
BEMSシステム構成

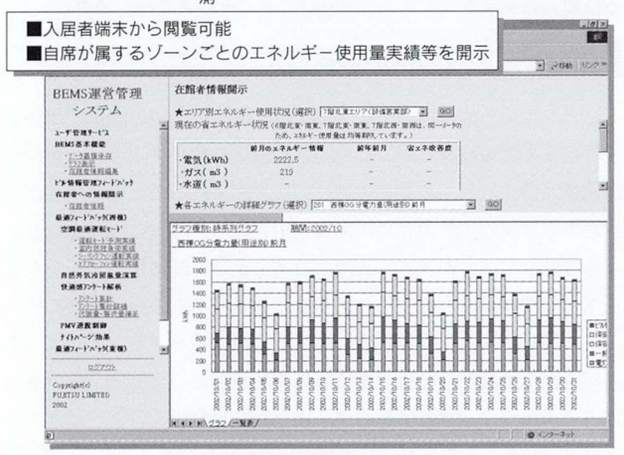


図９　入居者情報開示画面

都市空間での自然エネルギー利用

堺ガスビルでは、都市空間での自然エネルギー利用をテーマに自然採光、自然換気、雨水利用などを行っている。

■自然換気

東棟では、中間期には階段室のドラフト効果をいかして、各階の外気取入ガラリより、ペリメータ側床下トレンチに外気を取り入れ、床幅木スリットより吹き出し、室内～廊下～階段室と自然外気冷房を行っている。夜間のナイトパージとしても利用している（図６）。

西棟では、ドラフト効果の代わりにシーリングファンを逆回転させることで自然外気冷房を図っている。自然外気冷房のみで負荷がまかなえない場合は、床吹出空調を併用できるシステムとしている。

■自然採光

東棟では、コアにスリットを設けることにより、共用廊下に自然光を取り入れている。晴天時には階段室の照明は不要、共用部も半点灯で運用できている。その他、照度センサー、人感センサーによる照明制御を行い、省エネルギー化を図っている（図７）。

BEMS

これまでの設備管理システムは、運転状況の把握や計量、課金がメインであった。堺ガスビルではBEMSを導入することにより、*PMV*や１次エネルギー消費量を演算し、各種省エネ技術の効果測定をおこなっている。これらのデータを元にフォローアップ会議を定期的に行い、運用方法の改善をおこなって効果をあげている。

また、BEMSからエネルギー使用実績を、社内LANを通じて開示することで、入居者の省エネ参加を図るとともに、温冷感などの電子アンケートを行い、その結果を空調制御にフィードバックしている（図８、９）。

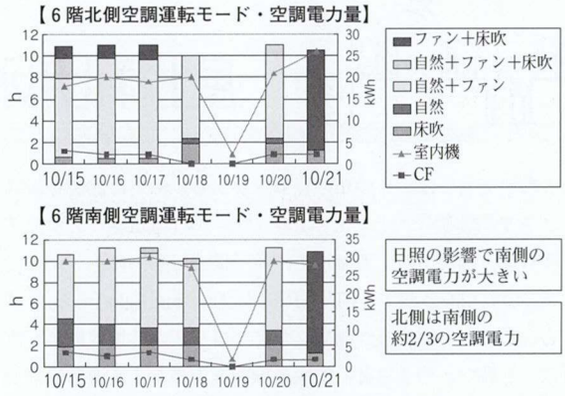


図10　東棟６階空調モード

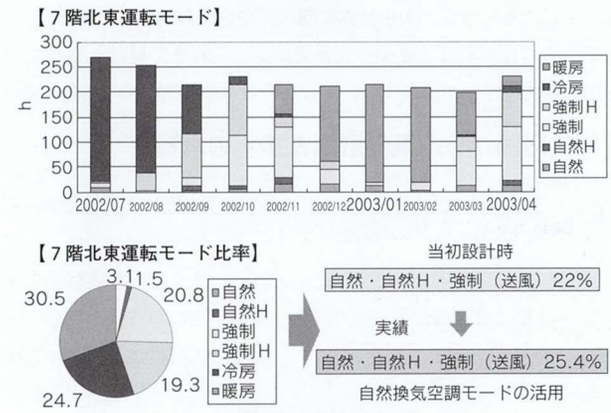


図11　西棟の年間空調モード

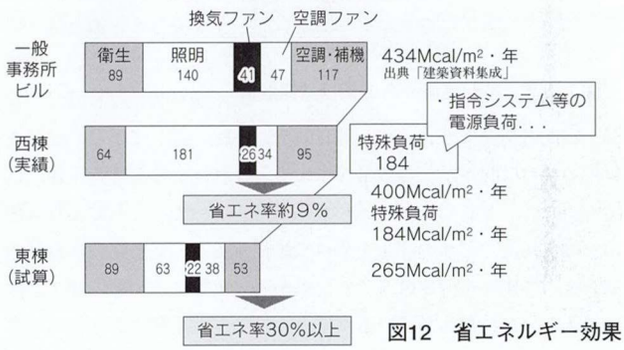


図12　省エネルギー効果

エネルギー使用状況・省エネ効果

図10に、10月の東棟の自然換気実績を示す。ほぼ自然換気でまかなえているが、日射の影響のある南側が、北側に比べて空調動力が多いことがわかる。西棟では年間を通じて約25%外気冷房を利用している（図10、11）。

上記のような省エネルギー技術の採用により、一般事務所ビルに比べて、指令システムなど負荷の大きい西棟では省エネ率約９%（実績）、積極的に省エネ技術を取り入れた東棟では省エネ率30%以上（試算）となっている（図12）。

（おか　かつみ）

26 屋上緑化用水量と排水の水質

水工学研究室
近畿大学社会環境工学科

私たちの研究室にはいくつかの世界一がある。例えば2002年にフィリップスや島津製作所とともに100万枚／秒の超高速ビデオカメラを開発した。画像中の１万個以上の粒子像を自動的に追いかけて水や空気の流れ場を計測するPTV（Particle Tracking Velocimetry）についても、私たちの研究室が開発したアルゴリズムは世界最高クラスの解像力を持つ。種子などの生殖系細胞を生きたまま南極の高地に1,000年にわたって保存しようという「生物環境タイムカプセル構想」も私たちの研究室から世界に向けて発信されたものである。

これらに比べればささやかな研究だが、これまで見落とされていた屋上緑化に伴う水問題について最近得られた観測結果を報告する。

緑化区画からの蒸発散量と排水の水質

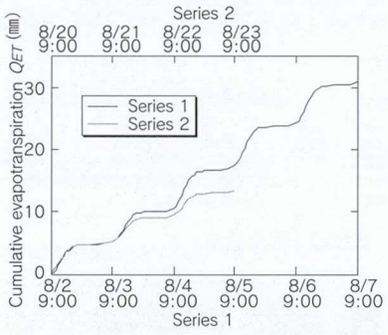


図１　屋上緑化区画からの累積蒸発散量

図１は近畿大学の実験棟の屋上に作った芝生をはった実験緑化区画における、夏季の晴天時の蒸発散量の累積値を示したものである。観測期間の最初に十分水を与え、あとは一切散水していない。累積蒸発散量は昼間に上昇し、夜間は蒸発散が止まる。数日間これを繰り返している。総量を日数で割れば日平均蒸発散量が求まる。これによると８月上旬には6.2㎜/day、下旬には4.4㎜/dayの日蒸発散があった。これにより大阪市の緑化可能なビルの屋上をすべて緑化すると、盛夏期には毎日約23万人分の水を必要とすることがわかる。実際には、屋上緑化区画にはふんだんに散水している例が多いので、屋上緑化が本格的に実施されれば渇水時にかなり大きな水量負荷が生じることになる。

驚いたのは、屋上緑化区画からの排水の水質である。肥料を散布した区画、除草剤を散布した区画、コントロール区画からの排水中の硝酸・亜硝酸性窒素およびリン酸態リン濃度を調べた。**図２**はリン濃度の例である。散布後、１週間程度で最高濃度となり、２～３カ月程度で一定値に落ち着いている。ところが落ち着いたときのリン濃度でさえ２㎎/ℓに達しており、これは最も緩い湖沼の水質基準の20倍程度という高濃度である。その後の分析の結果、園芸や屋上緑化で良く使われている軽量人工土壌が汚染源であることがわかった。

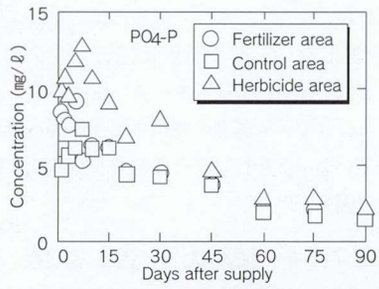


図２　排水中のリン酸態リン濃度

散水管理と人工土壌の選択

それではどのような対策を講じればよいのであろうか？　最も重要なことは適正な散水管理である。話は飛ぶが、デンバーやカリフォルニアの大都市の１人１日当たりの使用水量は非常に大きい。夏季の芝生に対する散水が主因のひとつである。

排水における窒素やリンの削減については、これらの排出量の少ない人工土壌を選択することがひとつの対策となる。しかしリンを環境基準のオーダーに下げることは無理である。自然界では、リンは中間流出や地下水流出中に土壌中で吸着されてほとんど排出しない。屋上緑化では、下がコンクリートやプラスチックの床や管であるため、過剰散水により下まで抜けた水はそのまま排出される。

雨水貯留施設の機能の総合化

私たちは総合的な対策として屋上緑化にビル単位の雨水貯留施設を併用する案を提案した。これだと高濃度の散水排水もいったん貯留施設に蓄えられ、公共用水域に直接排出されることはない。蓄えられた水は次の散水のために循環利用される。これにより水量面からも無駄な水使いが減る。大雨の貯留により、都市化による雨水流出量の急増対策にも役立つ。雨水貯留施設を都市の雨水対策に使うことに関してすでに20年以上の研究と行政実績がある。今回はさらに屋上緑化区画からの排水水質制御機能を加えることで、各戸または各ビル単位の雨水貯留施設に、より幅広い機能を持たせようという提案である。それに必要な追加費用はわずかである。

雨水貯留施設の利水機能の評価手法

実は雨水貯留施設の治水・利水・水質改善機能については、私たちの研究室では長い研究実績がある。雨の降り方は神様のみが知るランダムな現象である。このことを前提にしたできるだけ厳密な雨水貯留施設の機能評価の式を導き、それを簡略化して実用的な簡便な式を提案した。例えば、どれだけの大きさの雨水貯留施設を作って、１日当たりどれだけの水を使うかが決まると、雨水のうち何%が使えるか、雨水が不足して水道水や地下水に頼る水量は何%になるか、などを簡単に計算することできる。この方法は例えば「雨水利用ハンドブック（㈳雨水貯留浸透技術協会編）」の182～190ページに紹介されている。

●研究室のひととき

今年の卒業研究と修士論文の発表会の案内状をご父兄にもお届けしました。一般の人にもわかるように発表を工夫し、学内の主要施設も案内しました。非常に喜んでいただけました。最大のスポンサーであるご父兄に説明責任を果たすのは当然ではないでしょうか。

連絡先
東大阪市小若江３-４-１　TEL:06-6721-2332
http://hydraulics. infoseek. web. co. jp

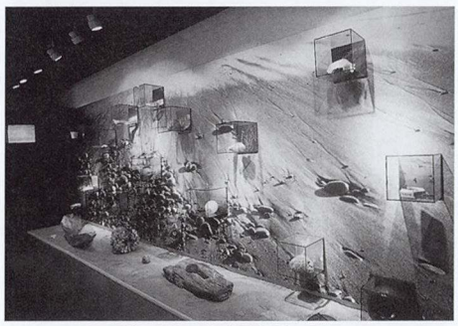


江藤剛治教授　　高野保英助手（４月から講師）

●研究スタッフ

江藤剛治：1946年生まれ
・研究分野／流れの可視化計測、高速ビデオカメラ、生物環境タイムカプセル、都市の水問題
高野保英：1970年生まれ
・研究分野／乾燥地の水問題、屋上緑化、ローカル環境計測

漂着物考展



INAXギャラリー名古屋会場にて　写真撮影／高木茂樹

6800を超す島々からなる日本は、赤道まわり4万kmに匹敵する海岸線をもつ。そんなわが国で2001年、「漂着物学会」が旗揚げされた。

本展は「漂着物学会」と高知県大方町の「砂浜美術館」の協力により実現した。入場無料。

■漂着物考展―浜辺のミュージアム―

会期　2004年3月5日(金)～5月21日(金)
10：00～18：00　休館日＝毎週水曜日

会場　INAXギャラリー大阪
大阪市西区新町1-7-1　INAXショールーム
TEL 06-6539-3518、FAX 06-6539-3521

■講演会「漂着物学～砂浜が教えてくれること～」

講師　松本敏郎（漂着物学会事務局長）

日時　2004年4月16日(金) 18：30～20：00

会場　INAX大阪ショールーム8階・会議室

参加　無料。希望者は予め電話かFAXで申し込む。

建築海外研修奨学生募集

日米欧の国際教育関係者からなる国際教育団体ユーロ・アメリカン教育協議会は、今年3月31日(水)まで、2004年春期の海外研修奨学生を募集中。

応募資格は、出発時に21歳以上の健康で日本語を母国語とする、建築、インテリアデザイン、ランドスケープデザイン、都市計画、環境保全、ユニバーサルデザイン等々の学業もしくは実務経験のある人。

奨学金　50万円3名（申込金5万円＋参加費45万円の免除）、25万円5名（5万円＋20万円免除）、10万円15名（5万円＋5万円免除）

出発時期　2004年10月～2006年7月より選択

研修期間　1～12カ月(英国、米国、その他より選択)

参加費用　1カ月466,000～12カ月1,159,000円(税別)
申込金10,000円（税別）、渡航費等は別途。

応募方法　選考申込書・課題作文を下記へ郵送。
ユーロ・アメリカン教育協議会「奨学生募集」担当（〒113-0024　東京都文京区西片2-22-21、TEL 03-3812-2022）

選考方法　1次選考：書類、2次選考：面接もしくは電話インタビュー

詳しくは、http://www.euroamericans.comへ。

京都六大学合同卒業設計展「六建ロールカーニバル」

京都大学、京都工芸繊維大学、京都精華大学、京都造形芸術大学、京都府立大学、立命館大学の有志約100名で構成する京都建築学生之会が1989年から開催する合同卒業設計展は、今年は「六建ロールカーニバル」と題して開かれる。

会期　2004年3月19日(金)～3月21日(日)

会場　京都市勧業館「みやこめっせ」第一展示場
地下鉄東山線東山駅1番出口より北へ徒歩10分

■19日　12：00～17：00　学生主体のイベント

■20日　10：00～19：00

第1部　卒業設計作品の講評会

第2部　シンポジウム「卒業設計の向こう」
伊東豊雄／遠藤秀平／高崎正治／古山正雄／山本理顕

■21日　10：00～17：00

シンポジウム「異分野から見た卒業設計」

辻村久信（インテリアデザイナー）／小林昌廣（京都造形芸術大学）ほか。コーディネータは鈴木隆之氏。

「創っ展―TSUKUTTEN―」ATC関西学生卒業作品展Vol.9

主に関西で建築や環境、インテリア、プロダクト、グラフィックなどを学ぶ学生の合同卒業作品展が、今年も13大学、9専門学校の参加の下に開かれる。

会　期　2004年3月18日(木)～3月21日(日)
10：00～18：00

会　場　大阪南港ATC・ITM棟10階
大阪デザイン振興プラザ

参加校　大阪芸術大学／大阪工業大学／大阪産業大学／大阪大学／近畿大学／神戸芸術工科大学／摂南大学／奈良女子大学／東京理科大学／武庫川女子大学／三重大学／和歌山大学／大阪工業大学短期大学部
専門学校アートカレッジ神戸／大阪デジタルテクノ専門学校／大阪総合デザイン専門学校／オプスクリエイティブデザインスクール／京都建築専門学校／京都国際建築技術専門学校／中央実務専門学校／パンタンキャリアスクール／兵庫科学技術専門学校

大阪府公共建築設計コンクール表彰式・記念講演会開催

大阪府内の建築関連の高校生・短大生・専修学校生を対象に、「大阪府公共建築設計コンクール」（主催：大阪府・㈳大阪府建築士会・㈶大阪府住宅管理センター）では交番や休憩所などの小規模な公共建築物をテーマにコンクールを実施してきた。第13回コンクール「ふれあいゲット！みんなのやすらぎ集会所～大阪府営苅田北住宅集会所～」の入賞は2月下旬に発表され、表彰式・記念講演会を下記のように開催。

日時　2004年3月24日(水) 14：00～16：30

会場　大阪府立文化情報センター　さいかくホール
大阪市中央区大手前3-1-43　大阪府新別館北館
TEL 06-4790-8511
大阪市営地下鉄谷町線・中央線「谷町四丁目」

講演　「サスティナブルな箱の家をめざして」
難波和彦（建築家・東京大学大学院教授）

定員　150人（先着順）

参加　住所・氏名・電話番号を記入し、ハガキ、FAX、インターネットのいずれかで、3月19日（金）までに下記へ申し込み。
大阪府公共建築室計画課計画・保全グループ
〒540-8570　大阪市中央区大手前2-1-22
電話 06-6941-0351（内4605）
FAX 06-6944-6831
http://www.pref.osaka.jp/koken/

西日本トータルリビングショー

西日本地域において最大規模の住宅産業見本市「第23回西日本トータルリビングショー」が、住宅及び関連製品を一堂に取り揃え、「家内安全」をテーマに開催される。

主催は㈶西日本産業貿易見本市協会。

会期　2004年3月18日(木)～21日(日)
10：00～17：00

会場　西日本総合展示場・新館
北九州市小倉北区浅野3-8-1

入場　200円

出品　輸入住宅建材、住宅設備機器、各種建築資材、インテリア、エクステリア、住宅情報、建築設計用CADシステム、ホームオートメーション・IT住宅、ホームセキュリティ、DIY用品

東京オペラシティアートギャラリー

日々の営みを豊かな詩情にまで昇華させつつ、初々しくも大胆な青春のイメージを造形化しつづけるアーティスト11人による「タイム・オブ・マイ・ライフ―永遠の少年たち―」展。

会期　2004年2月21日(土)～5月9日(日)
12：00～20：00（金・土のみ21：00まで）
休館日＝月曜日（祝日のとき翌火曜日）

会場　東京オペラシティアートギャラリー
東京都新宿区西新宿3-20-2

料金　一般800円、大高生600円、中小生400円

作家　難波田史男／有元利夫／舟越桂／山本容子／保田井智之／奈良美智／村瀬恭子／杉戸洋／中川トラヲ／工藤麻紀子／奥村雄樹

日本建築協会

月間の動き

【平成16年 1 月分】

理事会

第７回常任理事会
１月28日（水）15：00～16：30
出席者　佐野会長ほか９名
議　事（１）平成15年度収支予算執行状況
（２）平成16年度事業計画及び収支予算
（３）常設委員及びサポーターの応募
（４）評議員定数
（５）理事会・総会の日時

役員会

第14回正副会長会議
１月28日（水）16：30～17：30
出席者　佐野会長ほか４名
議　事（１）建築協会の運営方針
（２）平成16年度会員確保

編集委員会

第10回編集委員会
１月14日（水）18：00～20：00
出席者　設楽委員長ほか４名
議　事（１）２月号「都市緑化」特集経過報告
（２）３月号「東海支部」特集経過報告
（３）４月号「省リスクな『まち再生』」特集の企画報告
（４）５月号「リニューアルの現状と動向」特集の企画報告
（５）作品作風、広告企画、シリーズ頁等の検討
（６）収支状況報告
第５回計画分科会―計画系―
１月13日（火）18：30～21：00
出席者　鈴木幹事ほか３名
議　事（１）４月号「省リスクな『まち再生』」の具体化
（２）新年度の分科会体制
第８回計画分科会―建築系―
１月21日（水）18：30～22：00
出席者　野田幹事ほか４名
議　事　2004年９月号特集の企画
第２回計画分科会―インテリア・住宅系―
１月８日（木）18：30～20：30
出席者　高野幹事ほか４名
議　事　（１）委員の交代
（２）７月号特集の企画
第10回構造分科会
１月９日（金）18：00～18：45
出席者　稲田　竜也
議　事「構造の頁」のフォロー
第７回施工材料分科会
１月29日（木）17：00～19：15
出席者　平野幹事ほか５名
議　事　５月号特集経過報告
第10回法令分科会
１月14日（水）16：00～18：45
出席者　鶴田幹事ほか４名
議　事（１）６月号法令特集の企画
（２）「法令コーナー」の企画
第10回作品作風小委員会
１月22日（木）19：00～20：30
出席者　赤木　隆ほか２名
議　事（１）作品の選定
（２）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（３）「gallery」掲載報告・予定
第10回広告企画小委員会
１月14日（水）17：00～18：20
出席者　渡邉副委員長ほか５名
議　事（１）２月号「都市緑化」特集経過報告
（２）３月号以降の特集企画
（３）収支状況報告

事業委員会

第６回事業委員会
１月20日（火）18：00～19：30
出席者　川村委員長ほか３名
議　事（１）各小委員会からの報告と検討
（２）平成16年度事業計画案・予算案
第６回若い会員の集い小委員会
１月７日（水）19：00～20：30
出席者　杉本副委員長ほか４名
議　事（１）前回事業委員会の報告
（２）今後の企画の検討、経過報告
第６回見学会小委員会
１月８日（木）18：00～19：30
出席者　松浦副委員長ほか６名
議　事（１）前回事業委員会の報告
（２）見学会の実施報告、企画経過報告、今後の検討
第６回情報小委員会
１月14日（水）18：15～19：30
出席者　天野副委員長ほか５名
議　事（１）前回事業委員会の報告
（２）企画の経過報告、今後の検討

出版委員会

第９回出版委員会
１月15日（木）18：00～19：00
出席者　上原委員長ほか９名
議　事（１）〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
（２）今後のテーマと執筆者選定
（３）平成16年度事業計画ならびに予算案
第11回建築教育小委員会（仮称）
１月８日（木）17：30～18：45
出席者　安達主査ほか４名
議　事（１）「建築設計教育の変化」の企画・見本原稿検討
（２）今後の作業予定
第19回「建築施工図の作図方法とチェックポイント」小委員会（仮称）
１月23日（金）18：00～19：30
出席者　田中主査ほか５名
議　事（１）「建築施工図の作図方法とチェックポイントに関して」事例報告
（２）小委員会の編成と今後の進め方
（３）E-mailによる連絡方法

教育委員会

第３回工高生教育小委員会
１月23日（金）18：00～20：00
出席者　片倉・和田正副委員長ほか７名
議　事　第50回工高生デザインコンクール募集規定原案の検討

近代建築を学ぶ会

「近代建築を学ぶ会（仮称）」打合せ会
１月26日（月）18：00～20：30
出席者　松隈委員ほか３名
議　事　「近代建築を学ぶ会（仮称）」の企画

入会者(敬称略)

〔個人正会員〕　土井　敬三（竹中工務店）　吉田　武生（サントリー）
〔準会員〕　石角　容子

Digital Pri-Press
AOBA PRINTING CO.,LTD.,
代表取締役社長　依藤孝行
青葉印刷株式会社
〒534-0027　大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-6351-5428 Fax.06-6351-5299

●情報処理●企画・制作●編集●画像処理●印刷・製本
人と技術をクリエイティヴで結びます
日本データネット株式会社
本　社　〒530-0043　大阪市北区天満1-1-10　TEL.06-6352-7502　FAX.06-6355-2714
制作部　〒530-0043　大阪市北区天満1-9-19　TEL.06-6352-0943　FAX.06-6355-5533
印刷工場　〒530-0043　大阪市北区天満2-5-15　TEL./FAX.06-6352-1551

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

より快適な水環境をめざして
給排水衛生設備，冷暖房設備，消火設備の設計，施工

株式会社 西原衛生工業所 大阪本店

大阪本店　〒531-0071　大阪市北区中津六丁目8番4号
TEL 06-6458-3628（代表）
本　　社　〒108-0023　東京都港区芝浦三丁目6番18号
TEL 03-3452-7441（代）
支　　店　札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋・九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見２丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

CHOYO
人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。

電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役　山本貴士

本　　社　〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目 2-4（朝日ビル）
TEL 06(6385)1361(代)　FAX 06(6385)1050

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　宅　清光
常務取締役関西支店長　本木　満

関西支店　大阪市淀川区宮原3-4-30 ニッセイ新大阪ビル　電話 06(6350)8100
本　　社　東京都千代田区有楽町１－４－１　電話 03(3502)6103
支　　店　北海道・東北・関東・千葉・横浜・北陸・名古屋・京都・神戸・四国・中国・九州

電気設備工事設計施工
東光電気工事株式会社
関　西　支　社
常務取締役支社長　髙橋幸久

大阪市中央区高麗橋４丁目３番７号　電話大阪(6202)0325～9番
本　　社　東京都千代田区西神田１丁目４番５号
支　　社　北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・北関東・中部・九州

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社 三晃空調

本　　社　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1671
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡

電気設備設計施工
株式会社 三興社
代表取締役社長　上田正雄

本　社　大阪市北区堂島浜１―4―19（日土地堂島ビル）
電　話　０６（６４４２）３６７１（代）
支　店　東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電　話　０３（３６６６）１４７８（代）
営業所　堺・泉州・泉南・滋賀

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む――

株式会社 精研

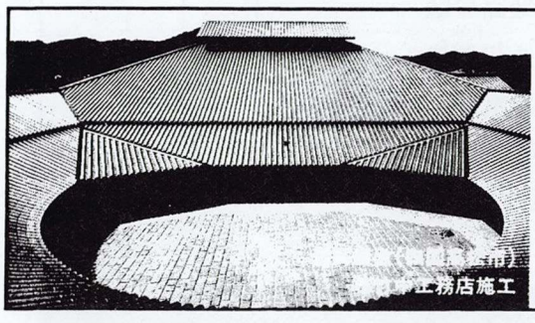
本　　社　大阪市中央区瓦屋町２丁目11番16号（オートセンタービル1・2階）
〒542-0066 電話 大阪（06）6768－5031代表
メンテナンス　電話　大阪（０６）６７６８－１６５１代表
東京支社　東京都文京区小石川１丁目12番14号（日本生命小石川ビル７階）
〒112-0002　電話（03）５６８９－２３５１代表

OKUJU
スペース クリエイター

建築に革命をもたらした技術がある
「大規模天井無足場工法」

内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社 オクジュー

本社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530-0047
TEL(06)6312-4131　FAX(06)6312-7998
東京・九州・横浜・南九州・名古屋・上海



〒556-0024
大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
ナニワ瓦株式会社
ファックス　六五六一～七四五四
☎　六五六一～七四一六
あらゆる屋根工事の相談は、

＊奉仕感謝の店
タイル及び規格石一式施工

株式会社 川岸窯業商店

本　　社　大阪市西区西本町１の13の33
TEL.06―6532―0641(代表)
FAX.06―6535―5181
天理営業所　天理市丹波市新町４９

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・網野（07727）2－2220
舞鶴（0773）76－0133

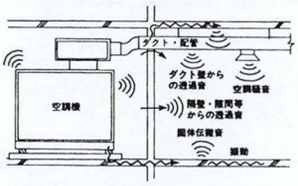
金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252－6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83－2381
TEL 大阪（06）6877－1581

((プロのノウハウ))



建築と音のトラブル

第一線の技術研究者がわかりやすく鋭く解説

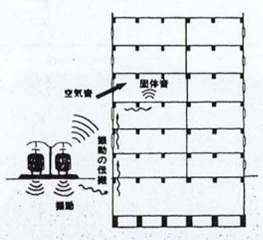


企画・日本建築協会

田野正典、中川清、縄岡好人、平松友孝著
（鹿島建設）（清水建設）（大林組）（大成建設）

四六・224頁（2色刷）・2300円＋税　ISBN 4-7615-2197-X

生活騒音、建物の構造や配置プランによる騒音、設備機器からの騒音振動、配管の伝搬経路の騒音など、建物に関わる様々な音のトラブルの解決方法をゼネコンの第一線の技術研究者が解説。約50の重要事例について具体的な内容→原因→対策→解説→ヒントとして整理し、建築設計や施工監理の実務担当者に役立つよう構成した。



学芸出版社
京都市下京区木津屋橋通
西洞院東入　〒600-8216
tel 075-343-0811
fax 075-343-0810

株式会社 タスト

TAST

＊ I･S･O 9001認定企業

＊ B･L ベターリビング認定企業

JAB
QS Accreditation
R 029

BL
I S O 9001
SYSTEM CERTIFICATION CENTER REGISTRATION
登録番号
Q118

ビル用建築金属金物メーカー

BL手摺ユニット・アーバン内外装金属装飾建材

本社・工場　〒643-0055　和歌山県有田郡広川町井関811-1
TEL 0737-64-1900　fax 0737-63-0618

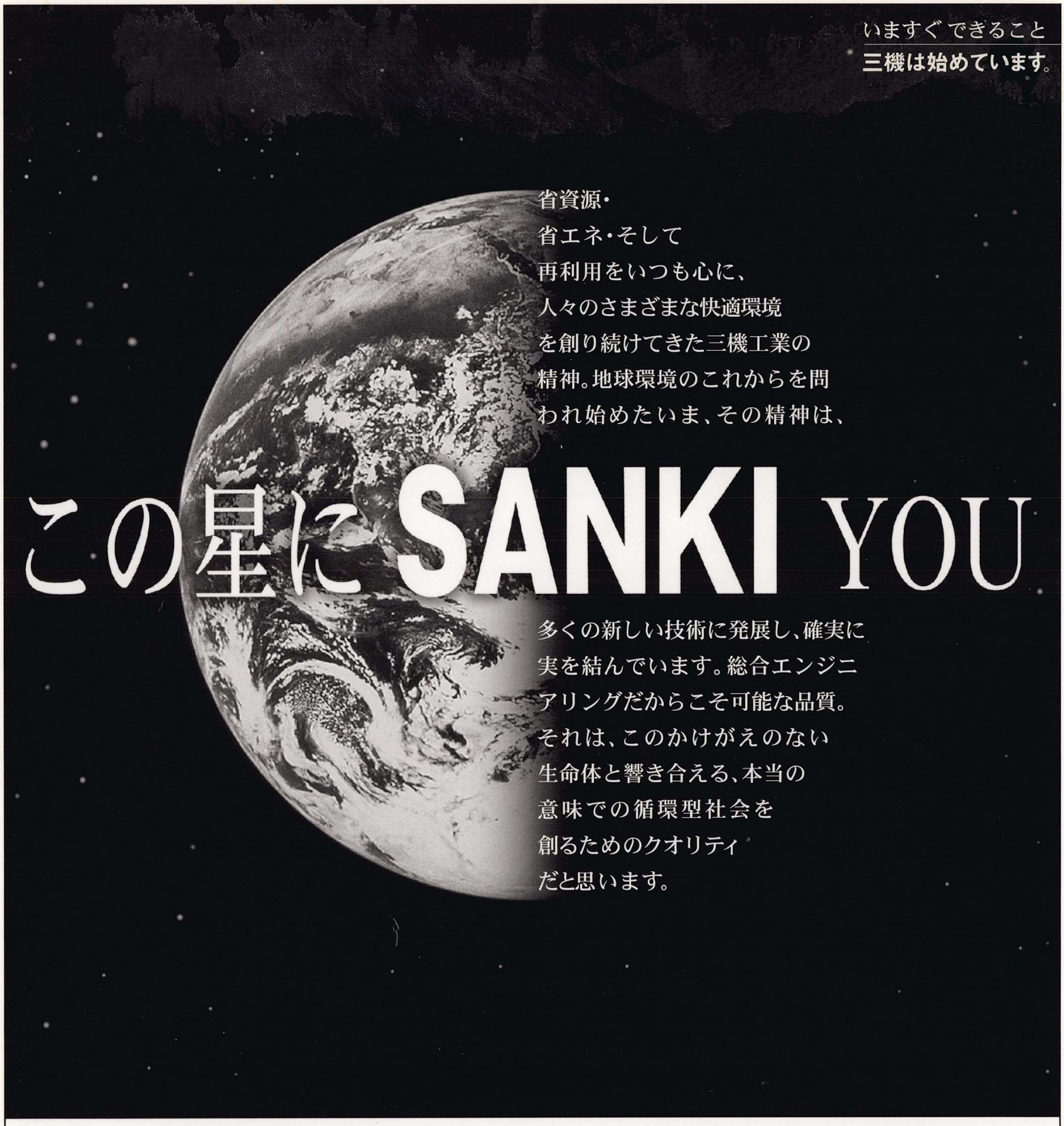
大　阪　店　〒542-0081　大阪市中央区南南船場1-11-9
長堀安田ビル7F
TEL 06-6271-7039　fax 06-6271-7055



建築仕上材の総合メーカー
エスケー化研株式会社
SK KAKEN 本　社：大阪府茨木市中穂積5-5 ☎072-621-7722／東京支社 ☎03-3563-3311／東京開発本部／東京支店／名古屋支店／大阪支店／福岡支店

旭川・札幌・青森・盛岡・仙台・新潟・前橋・長野・水戸・宇都宮・千葉・埼玉
東京住宅開発・城東・三多摩・横浜・静岡・三河・北陸・名古屋・岐阜・三重
京都・大阪・大阪住宅開発・南大阪・神戸・姫路・岡山・広島・山陰・山口・高松
松山・北九州・福岡・大分・長崎・熊本・鹿児島・宮崎・沖縄

JSA
ISO 9001 登録番号 RQA02167
ぜひ一度ホームページをご覧ください
http://www.sk-kaken.co.jp



三機工業の精神、総合力は次を始めています。

三機工業株式会社

関西支店：〒532-0003 大阪市淀川区宮原3-4-30
本　社：〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1
ホームページ　www.sanki.co.jp

建築と社会 03 2004 vol.85 no.984

社団法人 日本建築協会 〒530-0001 大阪市北区梅田1-1-3-2100 電話:06-6348-0635 FAX:06-6348-0634 http://www.aaj.or.jp

毎月1回1日発行 昭和24年3月19日第3種郵便物認可 ISSN 0912-8182

定価1,200円(税込) 正会員の購読料は会費に含めて徴収

雑誌 03379-3